
FILESTARD ～異世界編～

花唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FILESTARD 〈異世界編〉

【Nコード】

N2407L

【作者名】

花唄

【あらすじ】

星の欠片が静かに、始まりを待ってた。

<第1話> 【目覚め】

” あなたは今、夢を見ています。”

” そうです。”

” ここは、夢の世界。”

” だから、現実の世界には存在し得ないもの。”

” 存在し得ない物体。”

” 存在し得ない空間。”

” 存在し得ない思想。”

” 存在し得ない存在。”

” そんなものが、無数に溢れている世界なのです。”

少年が目を覚ましたのは、その時だった。

彼の名前は、すぎやま はるな 杉山榛名。

年齢は15歳。

一ヵ月ほど前に、さくらゆき 桜雪高等学校に入学。

両親は、六年前のある日を境に行方不明。

現在は妹の由奈ゆなと共に、母の姉である片桐まりやの家かたぎりに在住。

家の住人は、他に一人。

まりやの娘である片桐愛あい。

その父親である人物は、六年前のとある日を境に行方不明。

多少は複雑な家庭環境に当たる、といえるだろう。

だが、人間は環境に適応していく生き物。

毎日のように顔を付き合わす、家の住人たち。

そして、毎日のように眠る自分の部屋のベッド。

目を覚ました時。

夢から覚めた時。

そこで目にするもの。
それは、見慣れた自分の部屋の中に存在する風景。
そのはずだった。

「うん…しょ。」

目を覚ましてから、数秒後のこと。
榛名は地面に手を付き、上半身を起こした。
手の平に伝わるのは、ベッドの柔らかい感触ではなく
硬くゴツゴツした土の地面の感触。

「……。」

自分の手。
そして、地面を見つめる。

少し経ってから視線を上げ、首をゆっくり動かし始める。
右に、左に。
ゆっくり、ゆっくりと――視線は何度も往復する。

突如、榛名は弾かれたように体を動かす。
片膝を地面に付け、もう一方の膝を腕で抱え込む。
そんな体勢をとった。

「えっ…?」

「なにこれ。」

異常な事態を察し、榛名は戸惑っていた。

当然といえば当然だが。

榛名の周囲に広がる光景。

木、草、土、石、空…。

そんなものが、所狭しと存在する光景。

人工物らしきものは、いつさい見当たらない。

（山…？ 森…？）

そんな単語が、頭の中で自然と浮かぶ。

…

「あっ…そうか。」

「これ、夢の中なんだよね。」

しかし、その戸惑いはすぐに消滅する。

榛名の頭に巡るのは、さっき聞いたあの言葉。

” あなたは今、夢を見ています。”

頭の中に直接響いてきたような、あの言葉。

どこの誰かともわからない者の声。

しかし榛名は、不思議とその言葉を信じる事が出来た。

—Side 杉山榛名—

” どうかやら、お目覚めのようですね？ 榛名さん。”

「えっ？ …うん。」

” まずは、あなたが今いる場所のことを説明しましょうか。
「えっと…。 お願いします。」

頭の中――体の内側から、何者かが喋りかけてくる。
不可思議という他ない事態。
でも僕は、わりかし冷静だった。

” この星の名は、オルワデイス。”

” 夢の中に存在する、無数の星の一つ。”

” あなたの住む現実の世界を基盤とする常識は――
まあ…いくらかは通用すると思いますが。”

” 当然ながら、いろいろと奇妙な事も起こり得ます。”

” そのあたりは、覚悟しておきましょうね。”

「……。」

覚悟、って言われても。

「というか…あなたはいったい、どこのどちら様で？」

” クフフフ…すみません。 自己紹介が遅れましたね。”

” 私の名は、ニャンニャン。”

” 簡単に言っと――まあ…精霊？ みたいな存在ですかね。”

「ニャンニャン…。」

あの…それって。

ひより
日和の家で飼ってる猫と、まったく同じ名前なんですが。

” あらら…そうなのですか？ ”

” それはまた、奇遇な話ですねえ。 ”

「……。」

……

——あれっ？

「あの…ニャンニャンさん？」

……

「むっ…?」

……

「…んゝっ…。」

いきなり反応が無くなってしまった。
いったい、どうしたのか…

ブルルルルル

「んっ？」

静寂の中、何やら奇妙な音が聞こえた。

僕は、その音がしたと思われる方向に目をやる。

「あれは…。」

数十m程離れた位置に見える、黒っぽい物体。
全身、毛むくじゃらで。

口から飛び出してる、特徴的な二本の牙。

「イノシシ…？」

確証はない。

実際に目にすることはおろか、テレビや図鑑などを含めたとしても
過去に見たことがあるのは——たぶん、数えるほど。

だから、大体のイメージでしかないけど。

「……。」

その、イノシシと思われる物体。

なんだか、僕の方に歩み寄って来てるようにも見える。

ヤツの存在も含め、いろいろと頭の中が混乱していた。
だから僕は、足が動かない。

ただジッと、ヤツの動向を観察してる。

距離は、けっこう詰まっていた。

もう十mもない…かな？

その事実も、もちろんかなり重大なんだけど。
もう一つ、気がかりなことがある。

「イノシシ。 頭に角なんて…あったかな？」
そうです。

あのイノシシと思われる生物の頭…額のちょっと上あたりに、
白い突起物が確認出来るのです。

それはどう見ても、『角』と呼ぶのが相応しそうな代物。

ブルルルルル

「あっ…。」

鳴き声と共に、ヤツの動きに変化が見られた。
走り出したのだ。

うん…。

僕に向かって。

” あの動物の名前は、ドドマ。”

” どうやら、これが最初の試練みたいですよ。”
「えっ？」

＜第2話＞ 【First Battle】

――Side ???――

ドスッ

ドドマの頭に、鈍い衝撃が走る。

大木の幹に、自ら突進してしまった結果だ。

それはもちろん、ドドマが望んだ結果ではない。

大木を背にした榛名が、ドドマの突進を寸前でかわしたためである。

（どうする…。 逃げる…？ 闘う…？）

既にドドマは体勢を立て直し、榛名に向かって駆け出していた。

（あのスピードじゃ、逃げるのは…。）

迫り来るドドマを前に、榛名は落ち着いた様子だった。

しっかりとドドマを見据えながら、考え事をしている。

ドドマが足を止めた。

直撃する寸前、再び榛名が攻撃をかわしたからだ。

そして、ドドマが体勢を立て直そうとした——その刹那。

ドンッ

今度は、腹に衝撃が走る。

そしてその衝撃と共に、ドドマの体は宙に浮いた。

攻撃をかわすため、横に跳んだ反動も利用しての後ろ回し蹴り。
それをくらい、ドドマの体は吹き飛んだのだ。

「うん。……手応えあり。」

小さく呟きながら、榛名は横たわったドドマの元へと近付く。

ブル……ブルル……ル……

ドドマは体を小刻みに震わせながらも、なんとか立ち上がった。
その様子を見た榛名は、すぐさまドドマに接近。そして、攻撃を

――

――Side 杉山榛名――

「ッ……？」

構えをとった瞬間。

予想外の衝撃を感じ、僕は動きが止まった。

これ…。
空気の波動…。 衝撃波…？

よくわからない。
よくわからないけど、『それ』はヤツの体から放たれているように感じた。

ヤツと目が合う。

その目からは、明らかに敵意…殺気が感じられた。
そう思った瞬間、僕の体が後ろへ弾き飛ばされる。

ドサッ

「……。」

ヤツは、動いていない。
動いていないなら、なぜ…僕を吹き飛ばせる？

”ドドマは角に魔力を集中させることで、衝撃波を発生出来るのです。”

「…角？」

角に魔力…。 魔力？

”もうお忘れになったんですか？”

”ここは、夢の世界。”

”何でもアリの、幻想の世界なのですよ。”

「そう…なんですか。」

というか、いたんですね。 あなた。

さっきはいつたい…何かあったんですか？

”話は後にしましょう。”
”来ますよ。”

ブルルルル

鳴き声を発しながら、ドドマがこちらに突進してくる。

僕はすぐに立ち上がり、その姿を見据えた。

”集中力を高める必要があるため、衝撃波を使用するのは立ち止まった状態に限られます。”

「……。」

つまり、今は…チャンス？

「よし。」

僕はチラッと周囲の状況を確認し、すぐに視線をドドマに戻す。
あと2m…。

「…えっ？」

ヤツの動きが止まった。

「……。」

うーん…そっちでくる？

でも立ち止まってるなら、こっちはいくらでも逃げようが――

ブルルルルル

大きな鳴き声を発し、ドドマは再び猛スピードで走り出した。

しかし、それは：僕に向かってじゃない。
まるっきり別の方向だ。

走り出したドドマが、また動きを止める。
そして僕は、ドドマの体に起きた異変に気付いた。

「あれ：。」

間違いない。

ドドマの背中に、何か矢のような物が刺さっている。

ブルルルル

そしてそれは、見る間に数を増やす。

背中だけでなく、脇腹、足：頭。

それと共に、徐々にドドマの動きはキレがなくなっていく。

ガサッ

ヤッとは別の、何かが動く気配。

僕が目にしたものは――空高く跳び上がった人影。

<第3話> 【遭遇】

空高く跳び上がったあと。

『彼』は手にしていた棍棒みたいな武器で、ドドマの頭を殴り付けた。

かなり本気っぽかった。

そして：ドドマは、その場に倒れた。

「この山デ人間を見るのは、久しぶりだな。」

『彼』が僕の方に顔を向け、言葉を発した。

なんか：微妙に片言っぽい。

でもそんなことは、別にそれ程気にならなかった。

なぜかというと…。

もっと気になる点が、いっぱいあったからです。

まず、全身の肌の色。

黄緑と緑の中間ぐらい：だろうか？

とりあえず、日本人はおろか——黒人や白人という雰囲気も皆無。

そして、尖った耳。鼻。

大きく裂けた口。

鋭い目つき。

いや：目つきはまあ、鋭い人がいてもいいんだけど。

”クフフ…。彼は、ゴブリンと云われる人種です。”

「：ゴブリン？」

どこかで聞いたことのある名前。

なんかほら：ファンタジーな世界に、よく登場してくる感じの。

「ゴブリン。」

言われてみると、確かに…。

なんとなく、ゴブリンって感じがする人です。

『人』——でいいのかな？

「オマエ：何の目的デ、この山にきた？」

「えっ？ えっ…と。」

こんな突然、違う人種と遭遇。

いったい、どうコミュニケーションをとれば…。

……

って：日本語喋ってるのか。

ならば、問題ない。

「それが、あの：僕にもよくわからないんです。」

「アン？」

「朝起きて気が付いたら、この山の中にいまして…。」

僕は、事実をありのままに説明する。
いつだって、正直者でありたいものです。

「ン…何ダ？　もしかして、記憶喪失ッテヤツか？」
「んとー…そうかもしれません。」

記憶喪失。

そんな高度な言葉を知っているのか…。
いや、高度かどうかはわからないけど。

「ン…。」
「……。」

……

「とりあえず、ツいて来い。」
「えっ？」

「こんなトこでのんびりしてたら、またアイツに襲われるぞ。」

アイツ…。
ドドマとかいう生き物のことだよね。
角が生えたイノシシみたいなの…。
そして、衝撃波。

「オイ、前の方持ッテくれねえか？」
「はい？」

『前の方を持つ。』

その言葉を一度頭の中で反芻し、彼の求めることを理解した。

「オマエにもご馳走しテやッからよ。　ほら、頼むぞ。」

「えと…了解です。」

僕は、まだピクピク震えてるドドマの前足二本を持つ。

そして彼は、後ろ足二本を持つ。

「……。」

っていうか、ご馳走——ですか。

＜第4話＞ 【ロッジハウス】

「しかしオマエ、デけえ図体シテるわりにゃ機敏ダな。
一応聞いとくが…人間ダよな？」

「…だと思えます。」

人間かどうかを疑われる。

普通の人にとっては、ちょっとショッキングな出来事だとは思いますが。

僕の場合は…けっこう慣れっこ。

生まれつき、いろいろと変なんです。

肉体的にも、精神的にも。

いったいどこら辺が変なのかというと…。

えーっと…。

言い出すとキリがないので、また今度にします。

” そんなあ。 ケチケチせず、教えてくださいよ。”

「あっ…いたんですか？」

またもや突然現れたニャンニャンさん。

数分間ぐらい、ずっとだんまり状態だったのに。

” あれ…？ 私に話しかけていたんじゃないのですか？”

” あっ…それと私は、別にあなたに取り憑いているというわけではなく。”

” あなたの心の中以外にも、いろいろと別の場所に移動出来るのですよ。”

「へえ。」

頭の中から聞こえてくる言葉。

今回はなんか…いろんな言葉が、同時に聞こえてきた感じだ。同じ声の人が、同時に違う言葉を喋ってる——みたいな。

” クフフ。 そのぐらいの芸当、私にはお手のものですよ。”

「…ですか。」

いろいろと謎の多いニャンニャンさん。

……。

『ニャンニャンさん』って…なんか言いづらいかな。 微妙に。

” それならば、呼び捨てでかまいませんよ。”

「…ならば、そうします。」

「何を一人でブツブツ言ッてんだ…？ やッぱ、ドツか頭デも打ツタのか？」

「あつ。 いえいえ、大丈夫です。」

どうやらベントさんには、僕が一人でブツブツ言ッてたようにしか見えなかったらしい。

あつ、『ベントさん』というのは…彼の名前ね。 ついさっき、教えてもらったんです。

”だから、いったい誰に話しかけてるのです？”

「んと…わかんない。」

イノシシーじゃなかった…ドドマを運びながら歩くこと、しばらく。

僕らの前方には、自然の中に悠然と佇む人工物が現れた。

いわゆる、山小屋というやつだろうか。
カッコよく言うと、ロッジハウス。

……。

英語で言えば、カッコイイのか。

欧米文化、恐るべし…。

「あれが、ベントさんのお住まいですか？」

「アア。ま…元々は他人が住ンデタトこダがな。」

例のドドマを小屋の脇に置いたあと、ベントさんに案内されるまま
僕は小屋の中へとお邪魔させてもらう。

「……。」

なんだかよくわからない、独特の匂いが鼻をつく。
木の匂い…だろうか？

まあでも、別にそう不快なものってわけじゃない。

小屋の中心部にあると思われる部屋へやって来た。
それなりに広さがあります。

机に椅子。

机の上には、ランプが一つ。

かなり簡素な感じだけど、流し台みたいな設備。
鍋や食器らしき物も見当たります。

大きなタルが二つ…。それに、ツボが五つ。

「……。」

タルとツボと聞くと…。

どうしても、思い当たる節があった。

中を調べれば、『やくそう』とかが入ってるのだろうか？

——Side ????——

「別に、珍しいモンは置いテねえぞ。」
キョロキョロと小屋の中を観察する榛名を見て、ベントが呟く。

「ま、そこに座ッテくれ。」

「あっ：はい。」

ベントに指示されるがまま、榛名は椅子へと座った。

「あの：どちらへ行くんです？」

「井戸から水を汲んでくる。」

そう返事をし、ベントは小屋の外へと出て行く。

「井戸：。」

そうポツンと呟くと、榛名の視線は宙を彷徨う。

数秒後、彼は立ちあがった。

「何ダ、その物珍しそうな目は：。 水汲みしてるのが、そんな珍しいか？」

「珍しいというか：。 とりあえず、面白いです。」

「ハア？」

……

（よくわからん奴だな：。）

「そういえば、あの：あれはどうするんですか？」

榛名が指差した先。

そこには、例のドドマの横たわった姿がある。

「このあと、すぐに捌いテやる。 ン：何ダ？
なんか、オススメの料理法でもあんのか？」

「いや、別に：そういうわけじゃないのですが。」

井戸から汲んだ水を飲ませてもらった後。

榛名とベントは、またも小屋の外に出ていた。

ベントは、ドドマを捌くため。

そして榛名は、その様子を見さしてもらうため。

ベントが手にしているのは、出刃包丁。

榛名が普段から目にしてきた物と、さほど変わらない。

（あれで捌くのか…。）

（なんか、マグロの解体作業を彷彿とさせるね。）

（さて…まずはどこに刃を入れるんだろ。）

——そんなことを思っていた時だった。

「えっ？」 「ンッ…？」

小屋の中から大きな物音がし、榛名とベントは振り返る。

『ドンッ』という、何かが落ちたような…倒れたような音。

「今の音…。」

「気にするこたねえよ。何か、物でも落ちタんだろう。」

「いえ…気になります。」

そう言うや否や、榛名はさっさと小屋の中へ入っていく。

「オ、オイッ？」

あまりにも自然に動き出した榛名に、ベントは少し困惑している様子。

先ほども訪れた、小屋の中心部にあたる部屋。

ざっと見渡したところ、その部屋に異変は感じない。

榛名の視線は、奥に見える二つのドアに向けられていた。

＜第5話＞ 【よく来たね】

――Side 杉山榛名――

「なにこれ。」

右側に見えたドアを開け、その部屋の中に侵入。

そして目の前に現れた光景に、一瞬頭の回転がストップした。

勉強机のような、机と椅子のセット。

木製のロッカーが二つ。

そして、灰色の布が敷いてあるベッド。

部屋にある目ぼしい物は、だいたいこれぐらいだった。

もちろん、そんな物を見たぐらいで戸惑う僕ではない。

こう見えて、それなりに様々な修羅場を潜り抜けてきましたから…。

そんな僕を戸惑わせてるもの。

目を惹き付けて止まないもの。

それは、壁に書かれた大きな文字だった。

よく来たね

「……。」

赤い文字だった。

見ただけじゃ判断は出来ないけど…それは、血の赤のように感じる。文字以外の部分にも、血しぶきを思わせるような跡が見られるし。

「これが、血だとすると…。」

当然だけど、果たして誰のものなのか？ という疑問が出てくる。いや…人のものじゃない可能性も、もちろんあるだろうけど。

「…とりあえず。」

二つあるロッカー。

その内の一つの、取っ手部分に手をかける。

そして、少しだけ躊躇したのち——開けてみた。

「……。」

何も無い。

薄暗い空間が広がってるだけ。

もう一つのロッカーも開けてみた。

しかしながら…中身は空。

血の跡のようなものも、まったく見当たらない。

「ん…と。」

他に何処か、隠せそうな場所は…。

そう思い、視線を部屋全体にやった時だった。

凄いことに気付いてしまった。

消えていた。

大きく書かれていた文字も、血しぶきのような跡も。壁から、赤は完全になくなっていった。

背後で、何かが動く気配がした。
振り向いてみると…。

「あり？ ひょっとして…人間？」

そう言葉を発したのは。

恐らくは、人間と思われる物体。

黒人のような黒い肌と、頭に巻いた鉢巻が印象的な人。

「れっきとした人間です。」

この世界に来て、出会った人物は二人。

その二人ともから、人間かどうかを疑われてしまった。

うーん…そりゃまあ、ちょっと人間離れたところはあるけどさ。
僕ってそこまで、人間っぽくないのだろうか。

「こんな所で、何してるの？」

「えっと…。」

そう問われると、なかなか言葉が浮かばない。

……

「キミ…まさか、ここで暮らしてる？ とか。」

しばしの沈黙を挟んだ後、彼女は別の質問をしてきた。
しかしその沈黙の間に、僕は重大な事実気付く。

「いえ、違います。」

彼女が背中に背負っているもの。

それはどう見ても、剣の鞘のような物体に思える。

しかも鞘の外見からすると、その刀身は…かなりの長さで太さが推測される。

「この小屋は、ベントさんという人が住んでいまして…。」

「ベントさん？」

「オレのことだよ、嬢チャン。」

「あっ…いたんですか。」

どうやらいつの間にか、ベントさんも駆けつけていたらしい。

開け放しとなってるドアの向こう。

机に軽く腰掛けるようにしながら、こちらを見つめる姿がある。

「下がってて。」

「えっ…?」

ベントさんの姿を見るや、少女が険しい顔つきとなる。

そして、ためらうことなく背中に背負っていた剣を抜いた。

鞘のサイズから推測したとおり…やはり、かなり大きな剣だ。

少女の体型から考えると、こんな物を振り回すのは

かなりキツそうな気がする。

そんなことを考えてる間に、少女は部屋を飛び出すと机に腰掛けてるベントさんとの距離をつめる。

明らかに、彼が標的とされてる。

「…誰ダ？ オマエ。」

剣を突き付けられたベントさんが、声を発す。

「ジウ・リーベンス。 …フォーマス治安維持部隊の兵士だよ。」
ベントさんを睨みつけながら、そう答える少女。

「……。」

ジウ・リーベンス。 …が、名前？

フォーマス治安維持…。

第七部隊…。

”フォーマスは、この大陸の大部分を領土とする王国です。”

”我々が今こうして立っている場所も、その領土内ということですね。”

「ご丁寧な自己紹介、どうも。 デ…その兵士さんが、
どうしテオレに剣を突き付けテるわけダ？」

「…わからない？」

「それにしテも、随分立派なエモノ持ってんな。
嬢ちゃんには、チト不釣り合いダと思うぜ。」

「悪いけど、無駄話は好きじゃなくてね。 …覚悟はいい？」

少女——ジウさんとやらが、剣を振り上げた。

＜第6話＞ 【勘違い】

——Side ???——

「あ…っ？」

振り下ろされた剣撃。

それによってダメージを負わせたものは…。
年代物のテーブルだけだった。

（ど、どこに！？）

完全に見失ったベントの姿を探すべく、ジウは辺りを見回す。
そして、彼女の視線が自分の背後にいったとき。

「エモノを捨テな、嬢チャン。」

「ッ…！？」

榛名の首にしがみつくような格好。

まるで、榛名におんぶでもされてるようにも見えるだろうが…。
その手に握られているのは、真新しい血が付いた出刃包丁。
ベントはそれを、榛名の首元にピタリと当てていた。

「オイ、聞こえねえのか？ エモノを捨テろツツテンダ。」
「くっ…！」

ジウは怒りと戸惑いの表情を見せながらも、
持っていた大剣を静かに床に置いた。

「あの…ベントさん？ それに、ジウさんも。」

その時、榛名が口を開いた。

彼が置かれてる状況に似つかわしくない、落ち着いた口調。

「一体全体、何がどうなってるわけです？」

…

「そいつは、この山を根城とするモンリー山賊団の一味なんだよ。」
しばらくの沈黙を挟んだ後、口を開いたのはジウだった。

「モンリー山賊団…？」

当然ながら、榛名は知るはずがない。

（山賊…って。）

これまでの人生で得てきた情報を元に、山賊のイメージが
彼の頭の中に形成される。

野蛮。
強奪。

山に住んでる。

大体のイメージは、そんなところのようだ。

「ゴブリン六人からなる集団だ。スサンボ山を通りかかる人間を相手に、

随分ト荒っぽいことしてるらしい。」

「何を他人事みたいにつ…！ あんたも、その一味なんだろう！？」

「違う。」

小さく首を振ると、ベントは榛名の首に回していた腕を放す。

「あいにくダが嬢ちゃん、ここはテドラ山。

奴らの住む山は…あそこだ。」

そう言うトベントは、窓の外に見える景色を指さす。

「えっ…ええっ！？」

そこに見える別の山の姿を見て、ジウが大きな声を上げる。

”テドラ山とスサンボ山は、二つ連なるようにそびえ立つ山々です。

”

”どちらもあまり険しい山ではなく、山を隔てた地方同士を繋ぐ街道としても使用されているようですね。”

（…そうなのですか。）

「い、いや…ちょっと待ってよ。 となると——あんたは誰なの？」
窓の外にやっていた視線をベントへと戻し、ジウは尋ねる。

「奴らト同じく、トある村から追い出されタ身の者だ。

ダガ、断じテ山賊なんてもんデはない。」

二人とも冷静になって話し合った結果。

どうやら、落ち着いた空気を取り戻した様子です。

まあ、ベントさんは最初から冷静だった気がするけど…。

「ん…：ウマイ。 やっぱ、山で取れる水は違うね！」

冷静さを失っていた方。

ジウ・リーベンスさんは、そんな感想を言いながらコップを置いた。

「いや、まさか山を間違えてたとはね。 参っちゃうよね、アハハ！」

「…ご愁傷様です。」

ちなみにベントさんは、ただいま小屋の中にいません。

小屋の外で、イノシシ——もといドドマの解体作業を再開した模様です。

「っていうか、キミ…記憶喪失なんだって？ ホント？」

大きな瞳をこちらに向け、尋ねてくるジウさん。

「いや、記憶喪失かどうかはわからないのですが…。

家で寝てたはずなのに、朝起きたらこの山の中にいたわけでした。」

その事実を話したら、ベントさんが『記憶喪失なのか？』と。

そういう疑いをもってきたわけですね。 …うん。

「ふええ。 なんだか、ミステリアスだね。」

「…ですよね。」

世の中には、まだまだ謎が多いということです。

”クフフフ…。だからこそ、面白いですよ。”

「……。」

どうも、この頭の中から聞こえてくる声。

ニャンニャンとやらが発している声。

なんだかいつの間にやら、それがまったく不自然に感じなくなっている。

そして、ニャンニャンの言葉は…ちょっと不思議。

言葉としても、もちろん聞こえるんだけど。

それ以上に、何か…意思がダイレクトに頭に伝わってくるというかなんかこう、サクッと頭の中に刻み込まれる感じなんだよね。

「で、キミ…これからどうするの？」

「……。」

どうしようか。

とりあえず、家に帰る手段を——って。

ここは、夢の世界なわけなんだから。

家に帰りたければ、夢から覚めるのを待てばいいだけの話か。

しかし、どうする。

そんなことを…今日の前にいる、この黒い人に話していいものだろうか？

「……。」

なんだか、駄目な気がする。

話してしまうと、ややこしい展開になる予感がビンビンです。

「おい、スギヤマくん？」

「はい…なんでしょう。」

「いや、なかなか口開かないもんだから。」

……

「そーいやキミ、何処に住んでるの？」

「えっ？」

何処に住んでるかと問われれば…。

言わずもがな、たかはま日本国。

みのしろ高浜県観代郡、はなまり花毬町。

何もない所ですが、空気はわりと綺麗なほうかと思っています。

「……。」

しかし、どうする。

ここは現実とは違う、夢の世界。

となれば…日本という国の存在は、ないのじゃなかろうか？

——ま、いいか。

「日本国、高浜県観代郡、花毬町に住んでおります。」

さあ、どうだろう…。

彼女は一体、どんな反応を見せてくれるだろう。

「へえ…っ！ キミ、ニッポンに住んでるの!？」

「はい。」

思ったより、良い反応。

なんだかジウさん、目が輝き出した気がします。

「ニッポンっていえば、アレだね？　ムサシがいた国だね！？」
「……。」

ムサシ…。

あの有名な、剣豪の宮本武蔵のことだろうか。

巖流島に佐々木小次郎を呼び出し――。

いろいろあったけど、最終的に勝利したっていう…。

そんな人のことだろうか。

「へえ、そうなんだあ！　んっ？　でも、ニッポンって…
すごい遠いところにある国じゃないの？」

「……。」

そう問われても、困ります。

＜第7話＞ 【See You】

「これってもしか、テレポーテーションってやつなのかな。」

「遠く離れたニッポンで寝てたのに、朝起きたらこのフォーマスに…。」

うーん、やっぱりミステリアスだね。」

「…ですね。」

世の中には、やはりまだまだ謎が多いということです。
でも、だからこそ…世の中は面白いんです。

” それ、私の台詞。 ”

「でも、どうしょっかなあ。 ニッポンに帰るっていつでも…
そんな簡単に行けるものじゃないよ?」

「そんな感じですね。」

「少なくとも、海は越えなきゃ行けないわけだし…。」

ジウさんは腕を組んで、何やら思案している様子。

僕は、自分が頭を捻ってもどうにかなる状況じゃないと判断し
とりあえず、水を飲むことにした。

「……。」

『やっぱ、山で取れる水は違うね!』と誰かが言っていた気がする

が。

僕にはどうも、その違いがよくわかりません。

「何にせよ、こんな山の中においても仕方ないよね。

というわけで、スギヤマくん——まずは山を降りよっか！」

「そうします…か？」

「ボクの住む町、リシャーナまで案内するよ。

さあさ…そうと決まったら、出発出発！」

ジウさんはそう言うのと、床に置いていた袋を手取る。

布っぽい生地、手提げ鞆風な袋。

茶色っぽい色の生地には、何やら龍っぽい絵が描かれている。

「ああっ！　そういうば、今思い出したんだけどさあ…。」

出入り口のドア付近で、ジウさんがピタッと足を止めた。

「なんでしょうか。」

「この山にはね、すごい怖い怪物が現れるんだよ。」

「…怪物。」

「『ドノブイ』っていったね。　すごい大きなドドマなんだって。」

「……。」

ドドマ。

あの、例の衝撃波イノシシですね。

その大きいバージョン…？

「その怪物が出るっていうんでね、この山はずっと前から

立ち入り禁止になってるんだよ。」

「…へえ。」

「でも本当に、そんなヤツがいるのかな？」

最近に向こうの山に山賊が出るもんだから、こっそりと

こっちの山を通り道に使ってる人もいるんだけど…。

そんな怪物に出くわした——なくって話、聞いたことないんだよね。

「

ふむ…。

まあ確かに。

こうして山の中に小屋を立てて、住んじゃってる人もいるぐらいだしね。

「なんだ、もう山を下りるのか？ セツかくコイツを

ご馳走しテやろうト思ツタのに。」

「すみません。 ご馳走は、またの機会ということで…。」

小屋を出て、未だドドマを捌いてる途中のベントさんに別れの挨拶。

『またの機会』が来る日は、果たして訪れるのか…。

その日が訪れることは、果たして僕にとっていいことなのか。

「あつ、ベントさん。 一つ聞きたいことがあるんですが。」

「ン…なんだ？」

「この山に、すごい怪物がいるとかいう話…ご存じですか？」

僕がそう尋ねると、ベントさんは何やら複雑そうな顔を見せた。

「アア：ヤツには気を付けろ。ヤツは、半端な相手じゃない。もし出くわしたら――逃げるか、身を隠すかだな。」

「……。」

ベントさんの言い様から、『ヤツ』に対して畏怖の感情を抱いてることが

はつきりと感じられる。

それに：なんだろう？

畏怖だけじゃなく、何か怒りのようなものを感じる気もする。

「えっ？ や、やっぱ：ホントにいるの！？ 怪物？」

「嬢ちゃんも気を付けな。万が一にも、勝負を挑もうなんテ考えるなよ。」

ベントさんはギロツと睨みを効かし、ジウさんに言い放つ。

「ん：そんなふうに言われると、かえって勝負したくなるんだよねえ。」

「……。」

勝負師の考え方ですね。

「オイ、スギヤマ。」

「はい。」

「嬢ちゃんのお守りは頼んだぜ。」

「：了解です。」

小屋をあとにしたボクらは、順調に山を下っていた。
麓までは、もう少し…かな？

「スギヤマくん、大丈夫？ 疲れてない？」

長い間放ったらかしになってたせいかな、この山にあったはずの山道は
もうほとんど自然と一体化しちゃってる。

そんな道なき道を歩くのは、そりゃもう…体力使うんだよ。

「大丈夫です。 ジウさんの方こそ、疲れてませんか？」

「ん…：ちよつと息上がり気味だけど、まあ大丈夫。

もう少しで麓に着くと思うから、このまま一気に行っちゃおう。」

スギヤマくんのほうは、全然息が上がってる感じしない。
やっぱ体が大きい分、体力あるのかな。

「つて…：ちよつとちよつと、スギヤマくん！」

「はい？」

とある事に気付いたボクは、思わず大声を出してしまう。

「キミ、裸足じゃない！」

「…：そうですけど。」

うっわ。

そんな事に気付かず、こんなところを長い間歩かせちゃったのか。

彼の足元に目をやってみると、擦り傷がいくつも見える。
ボクとしたことが…こりゃ鈍感だったね。

「ボクの靴、貸してあげるよ。」

そう言っただけは、パパッと靴を脱ぎ始める。

「いや…いいですよ。それだと、ジウさんが裸足になるわけですし。」

「ん…ま、そりゃそうなんだけど。」

…

「えっと、それじゃ…片方だけ借ります。」

なんだか気まずい空気——と思った矢先、スギヤマくんがそう言った。

「ふえっ？」

「イヤなら、別に無理にとは言いませんが。」

「いやいや、そんな！ イヤなんて言わないよ！
ボクは手をブンブン振りつつ、慌てて否定する。

「言ってるじゃないですか…『いやいや』って。」

「ふえっ？」

…

スギヤマくんの言葉の意味を理解するまで、数秒。
で、ちよつと思つたこと。

「…キミって案外、意地悪？」

「…どうでしょうか。」

＜第8話＞ 【睨まれた二人】

――Side 杉山榛名――

それは、カエルだった。

黄色と黒の縞模様という、虎っぽい柄の体はしているが…。
全体像を見れば、明らかにカエル。

そのカエルが、僕らの方を見つめている。

蛇に睨まれたカエル：なんて言葉があるように。

カエルはどちらかといえば、睨まれる立場の存在であって――
睨んでくる立場というのは似合わない。

しかしながら。

「スギヤマくん、下がってて！」

「……。」

僕らは今、そのカエルに睨まれている状況だった。

ジウさんは明らかに緊張してる様子だし。

それも、そのカエルの体のサイズのせい。

どう考えても、一般的なカエルのサイズではなかった。

さっき見たドドマよりも、遥かに大きい。

牛…ぐらいはあるかもしれない。

「スギヤマくん！ 聞ってるの！？」

「ええ…聞いてますよ。」

しかしいくら大きいとはいっても、所詮はカエル。

基本的には、僕ら人間に危害を加える存在じゃ――

「うわっ！」

カエルが突然、ジウさん目がけて跳びかかってきた。

ジウさんは体を捻るようにして、なんとかそれをかわす。

「……。」

そして、僕は見てしまった。

ジウさんに跳びかかったそいつは、大きく口を開けていたのだが…。

その口の中に見えたもの。

鋭く尖った無数の牙。

ガグウッ

危険性を感じた僕は、条件反射的にカエルの腹に蹴りを入れた。

それと同時に、カエルにはあまり似つかわしくない

獣じみた鳴き声が耳に飛び込んでくる。

にしても、硬い…。

ブヨブヨ感はあるものの、明らかにカエル離れした皮膚の感触。

「はぁあッ！」

ガッ ガグッ

掛け声と共に、ジウさんの剣が振り下ろされる。

一回、二回——と、交差する連続の斬撃。

それを受けたカエルは、前方向にジャンプ。

僕らはカエルの左右を挟むように立っていたわけだから：

それは、僕らから身を離そうとする行為に思える。

それにしても、凄いジャンプ力。

ひとつ飛びで10mは軽く超えている。

「……。」

身を離れたカエルは、僕らの方を振り返る。

首の辺りに、ジウさんの攻撃で生じたと思われるX字型の傷跡が見えた。

このまま引き下がってくれるかな…？

そんな期待を考える僕の目に、カエルが大きく口を開ける光景が映る。

そして、次の瞬間。

その口から、何かが発射されるのが見えた。

「危ないっ！」

ジウさんに抱き着かれるようにしながら、僕は地面に倒れた。

視線は、自分がさっきいた場所——その側にある茂みへ。

そこには何やら、緑と紫が入り混じったような色合いの：

粘着質のある液体がかかっている様子。

「…毒？」

ギインッ

金属音。

「くっ…！」

音のした方向には、ジウさんが持つ剣を咥えるような格好となっている

いる
あのカエルの姿があった。

僕はすぐに立ち上がり、ジウさんの加勢を――

ガガアウッ

しようとカエルの横側に回り込んだが、カエルはすぐに僕の方へと体の向きを変える。

そして、口を開き跳びかかってきた。

「ッ…！」

バックステップをし、なんとか攻撃をかわす。

しかし、後方の確認をしなかった報いか…何かに足をとられ、僕は地面に倒れ込んでしまう。

まずい。

早く立ち上がらないと。

そう思い、近くにあった木の枝を掴んだ。

――その時。

これは…ジャックウッド？

引火性が高く、その樹液は油に似た性質を持ち――

そんなことを思い出した僕は、その木の枝を折り、
地面に擦り付ける。

そしてその勢いのまま、枝を前に突き出した。

ガグッ

カエルの動きが、ピタリと止まる。

枝の先から燃えさかる炎を見たためだ。

「…もらった！」

ガギイアアッ

カエルの背中に、ジウさんの剣が深々と突き刺さった。

叫び声を上げながら、カエルはビクビクッと体を震わせ…。
やがてグツタリした様子で、その巨体を地面に横たえた。

「ふう…。ここまで来れば、一安心かな。」

山を下りてから、更に歩くことしばらく。

僕らの眼前には、5 mぐらいの幅がある川らしきものが現れた。水は透き通って、凄く綺麗そう。

「ここで一旦、休憩しよっか？」

「…そうしますか。」

「ふう…。」

「冷たくて気持ちいいねえ。」

両足を川の中に浸からせ、その冷た心地よさを感じる。少々、傷が染みるけどね。

「……。」

それにしても、さっきから思っていたことなんだけど…。なんかこの世界、やたらと暑い気がする。

まあ夢の世界なわけだから、現実とは季節が違っていても文句は無いんだけど。

というか…季節という概念そのものがあるのかどうか。

「ん…なに？」

「いえ、何でもありません。」

ジウさんに尋ねてみようとしたが、思いとどまる。

もし無かった場合は、僕が凄く変な人に思われそうだからね。

”ではでは、代わりに私が答えてあげようじゃありませんか。”

「……。」

また、突然現れますね。 あなた。

”クフフ。 神出鬼没が、私のモットー。”

あつ、そういえば…さっきは本当、ありがとうございました。

”…ンっ？ さっき？”

ほら、なんか…教えてくれたじゃないですか。
ジャックウッドとかいう木がどうのこうの、とか。

……

”何のことです？ 私には憶えがありませんよ。
——えっ？”

……

ならば一体、誰の声だったというんです？
”ン…っ。 誰でしょうねえ？”

＜第9話＞ 【町の風景】

川をあとにし、更に歩くことしばらく。

自然見溢れる景色ばかりだった中、人工物の匂いを感じさせるものが

目に飛び込んできた。

「あそこがリシャーナの町だよ。」

「…なるほど。」

白い塀の中に、いろいろと見られる建物。

遠目からなのではつきりとは分からないが…なんとなく西洋風な雰囲気を感じさせるものが多い。

あそこに見えるのとかは、明らかに十字架だし。

「町に着いたらまず、警備所に行くからね。」

それからは――…うゝん、隊長の指示を聞くまでわかんないな。」

「そうですか。」

警備所…。

聞いたようであまり聞き慣れない言葉。

一体、何なんだろう？

これまでのジウさんの話から推測するに……交番みたいな施設だろうか。

「うちの隊長、ちょっと怖いんだあ。

すぐキレちゃう感じの人だから、そこら辺は覚悟しといてね。」

「……。」

覚悟しときます。

町の風景。

それはどこか、中世ヨーロッパを彷彿とさせるような
雰囲気のものだった。

当然ながら、ずっと日本にいた僕が目にはすれば
どれもこれもが新鮮な光景。

——のはずなんだけど。

なんだか、意外と見慣れた感じがするのは…なぜだろう？

ま…RPGなどでは、わりとありがちな世界観だからね。

それなりにゲーム好きを称する僕にとっちゃ、

そんなふうに感じてしまうものなのか。

…

うーん。

でも、二次元と三次元の差はデカイような気が…。

「さあさ、スギヤマくん。 離れないようについてきてね。」
「了解です。」

現在僕らがいる場所は、商店街らしき地帯だ。
立ち並ぶ様々な店。

ザワザワと賑わいを見せる人々。

僕はかなり、人々の注目を浴びている様子だった。

ま、人々のほとんどは西洋風な顔つきだから：

和風な顔つきの僕は、目立って当然。

もちろん、背の高さもあるしね。

「おっ、ジウちゃんじゃねえか？」

「あっ：おじさん、やつほ。」

とある店の前を通りかかった時、その店員らしき人が
ジウさんに話しかけてきた。

五十代ぐらいかと思われる、ヒゲの生えたおじさん。

「やつほ：じゃないだろ。警備所の人ら、すげえ心配してたぞ
？」

「アハハ。：だよねえ。」

「つと：そっちの大きな兄ちゃんは？」

おじさんの視線が、僕に向けられた。

「それがねえ、話すと長くなるんだけど：。」

「――だったら、話は後にしてくれ。今はともかく、
さっさと警備所に戻ったほうがいいぞ。」

「：アハハ。そうしまゝす。」

「はい、到着〜っ!」

「…着きましたか。」

どうやらここが、目的の警備所なる場所らしい。

立て掛けられた看板には、『フォーマス第七警備所』の文字。
建物全体を見ての印象は…。

どこことなく、交番っぽい雰囲気を感じます。

実は僕、それなりに親しい友人に警察関係の方がいまして。

そんなこともあってかなくてか、一般人よりか

交番は見慣れたものかと思っています。

「ただいま〜!」

ジウさんは、建物に入ってすぐの所にいた
椅子に座ってる人物に声をかける。

金髪の…どこことなく淑やかさを感じる女性。

「ジウ! 無事に帰ってきたのね?」

「あったりまえだよ。」

ホッとした表情の女性に、ジウさんは誇らしげな笑み。

「あら…そちらの方は?」

女性が僕のほうに目をやった。

「この子は、スギヤマくん。え〜っと、山の中で出会ったんだけ
ど…。」

……

「朝目覚めたら、なぜか山の中にいたんです。」
腕を組んで言葉に詰まってしまったジウさんに代わり、僕が口を開く。

「夜は、自宅のベッドで寝ていたはずなのですが……」

「おお？ 帰ってきたか、ジウ。」

「あつ、ケヴィン。ただいま。」

「まったく……心配させやがって。」

建物の奥から、短髪の若い男性が姿を現す。

髪色は、ちよつと赤みがかつた茶色。

いかにもスポーツマン……ってな印象です。

「奇妙な話ですね。確かに。」

「ね？ ミステリアスだね。」

「……なんか、事件の匂いがあるなあ。」

金髪の女性——ミューレさん。

スポーツマンな雰囲気 of 男性——ケヴィンさん。

そして、言わずと知れたジウ・リーベンスさん。

この三人のメンバーに、これまでの経緯を説明し終えたところ。

「事件、ということとは…誘拐？」

「えええっ!？」

「本人に憶えがないんなら、そう考えるのが妥当だろ？」

「つていうか、あの…隊長は？ いるの？」

ジウさんが恐る恐るといった様子で尋ねる。

「ああ…。隊長なら、朝から出掛けてるぞ。」

「町長さんのところから、使いの人が来てね。」

なんでも、緊急の用事があるから…って。で、行っちゃったの。
「へえっつ。」

二人からの返答を聞き、ジウさんに安堵の表情が浮かぶ。
やはり、相当にその隊長さんとやらを恐れている様子です。

「んじゃ、えっと——これから、スギヤマくんはどうするの？」

「どうするって…。そりゃま、とりあえずは隊長に報告しないと
な。」

「そうですね。ですから、んつと…：…隊長が戻るまでは、ここで
待っててもらおうしかありませんね。」

「……。」

ふむ…。

そういう事情なら、待つしかないか。

ならば、待ちましょう。いつまでも。

<第10話>

【Earthquake】

僕が今いる場所。

どうやら、休憩室と呼ばれてる場所らしいです。

ちなみに、さっき四人で話していた場所は：待機室というそうなの。

「あの：どうかしました？」

「あつ、いえ：。 何でもありません。」

この西洋風な世界観からすると、お洒落に紅茶でも出てくるかと思っただ。

期待を裏切り、思いっきり日本茶な飲み物が出てきた。

ま：そんなことがあり、少しショックを受けていたところ。

「それにしても、ハルナさん：まだ15歳なんですね。」

「はい。」

思わず『先日、高校生になったばかりです』と続けてしまいそうだった。

危ない危ない：。

いま僕と話しているこの金髪の女性。

名は、ミューレさんというらしい。

待機室から休憩室へ僕を案内し：。

で、こうしてお茶を出してくれました。

「なんだか、そうは見えません。背も高いし、大人っぽく見えます。」

「…よく言われます。」

15歳にして身長190cm台を突破する人間は、世界規模で見てもなかなか探すのに苦労するんじゃないだろうか。

「ハルナさんは、ニッポンに住んでるんですね。」

「ええ。」

「どんな国なのでしょうか？ 少しは本で読んだこともありますけど…」

やはり遠く離れた国なので、わからないことも多いんです。」

そういえばこのミューレさん、日本人の名前は名字が先で名前が後にくるんだよ——といった感じの説明を皆にしてくれていた。

そして、その事実を知らされたジウさんは：『スギヤマくん』から『ハルナくん』へと、僕の呼び方を変更することを決意してた様子。

「……。」

『本』という単語につられてか、僕の視線はミューレさんの後方に見える本棚に注がれる。

全部足すと、百を超える冊数はあるだろうか。
この世界観からすると、もしや……全部手書き？
だとしたならば、なんか凄い気がする。

「確か、ミヤモトムサシという剣豪の方もニッポン出身でしたよね？」

「あっ…はい。　そうですよ。」

宮本武蔵。

その名は確か、ジウさんの口からも出てたっけ。

「私はよく知らないのですが、その人…ジウが憧れてる人物らしくて。

時々、話を聞くんですよ。」

「そうなんですか。」

「あんまり、女の子が憧れるような人じゃないと思うんですが…。」
そう言ってミューレさんは、口元に小さな笑みを見せる。

確かに、ミューレさんのような雰囲気の人が憧れるにしては
いろいろと不自然な気もするけど。

ジウさんの場合は……うん。

なんだか、全然アリって感じかな。

「まあいいじゃないですか。　憧れなんてのは、人それぞれで。」

「…フフツ。　そうですね。」

「それじゃ、えっと…ミューレさんは、どんな人に憧れるんです？」

「えっ？　私ですか…。」

ちなみに、僕が憧れる人物は――。

あの人に、あの人に、あの人や…あの人。

…うん。

いっぱいいて、一人に絞るのは難しいかも。

「そうですね。　私は…」

——Side ???——

突如、休憩室にいた二人は沈黙。

否。

異変を感じたのは、彼らだけではない。

警備所内はおろか、リシャーナの町全体が静寂に包まれ…
そして、次の瞬間——。

…

地の底から鳴り響く轟音。

人々の視界に映る景色は小刻みに揺れ動き、
そして…体の自由が奪われていく。

「っ…！」

これまでの彼女人生において、まだ数度目となる感覚。

しかもその感覚は、これまでとは比べ物にならないほど激しいもの。

「きゃ…あ…っ！」

机にしがみ付こうとしたものの、ミューレは体のバランスを崩し

椅子ごと地面に倒れ込んでしまう。

（うっ……。）

倒れた際に右腕や肩を打ちつけたためか、その痛みに顔をしかめる。そして、なんとか立ち上がろうと

「あっ：！」

——したものの。

再びバランスを崩し、尻餅を付くようにして後方に倒れた。

（ハルナさん：！？）

向かいの席に座っていた少年のことを思い出し、ミューレの目は彼の姿を探す。

その刹那——ミューレは異変を感じ、自分の背後に向けて首を回す。

ゆっくりと。

自分目がけて。

本棚が倒れてくる。

背筋を冷たいものが走り。

頭の中に様々な光景——考えが浮かぶ。

……

「……。」

彼女が事態を把握するまで、数秒。

その間に、いつの間にか地面の揺れは収まった様子だ。

「あの…大丈夫ですか？」

倒れてる自分を見下ろしながら、声をかける少年。

ミューレは、彼がまるで本棚を背負うような格好でいることに気付く。

「…はい。」

そして、自分が彼に守られたことに気付いた。

――Side 杉山榛名――

事態の発生から、どれくらい時間が経過したか…。

僕らの元に駆けつけてくれたケヴィンさん。

彼は僕らの無事を確認すると、ジウさんと一緒に町の様子を見てくる…と言い残し、休憩室をあとにした。

そして、残された僕らは――というところ。

「あの…休んでもいいですよ。無理しないで下さい。」

「大丈夫です。そんな、大した怪我じゃありませんから。」

僕の言葉に、ミューレさんは少し眉をひそめながらも

笑顔を作って返答する。

「……。」

時折、腕や肩をさするような仕草を見せるのが気になるけど……。まあ本人が大丈夫と言ってるなら、大丈夫と判断すべきか。

「えっと、これは…この辺りでいいですか？」

「あっ…はい。」

ミューレさんに確認をとりつつ、小さな引き出しが幾つもある収納箱みたいな物体を部屋の隅の方へと移動させる。

「ハルナさんの方こそ、部外者なんですから…
何も、部屋の片付けなんかしてくれなくても。」

「困った時はお互い様、というものでしょう。」

<第11話> 【入隊】

「ン…なるほど。 大体の事情はわかった。」
「……。」

僕は今、隊長室と呼ばれる部屋にいる。
ソファ―に座り、向かい側にいる人物と対談している。

「結論から言おう。」

その人物とは――そう。
噂のちよつと怖い隊長さん、その人です。

「どうすればいいのか、俺にもよくわからん。」
「……。」

顔を見ての第一印象…いかつい。
声を聞いての第一印象…渋い。
総合的に見ての第一印象は…怖そう。

まあしかし、この程度で怖がっていてはいけません。
世の中には、まだまだ怖そうな人がいっぱいいます。
僕の知る限りでも…。

「ニッポンなんて辺境の国は、国の正確な位置も、そこに辿り着くまでの経路もわからないのだ。だから、お手上げ。」
「そう…ですか。」

予想の範囲ではあったが、隊長さんからの残念な答えを聞いて僕は心の中でため息をつく。

「そういうわけだ。この後どうするかは、お前が自分で決めるしかないな。」

「……。」

うん…。

どうするもこうするも。

とにかく、夢が覚めるのを待つだけなんだけど。

……

「なあ、お前。」

「…はい。」

隊長さんに鋭い眼光を向けられ、僕は少しだけビクツとする。

「行くあてが無いんなら、ウチで働く気はねえか？」

「えっ…？」

「召集令のせいで、ウチも人手不足なんぞな。」

お前ガタイはよさそうだし、どうにか使いモノにはなるだろ。」

「……。」

召集令…？

召集令っていうと、アレだよな。

赤い紙が届いて、『軍隊に入りなさい』…とか書いてある。

まあ赤い紙ってのは、昔の日本軍にだけあった風土かもしれないけ

ど。

「どうだ？ 悪い話じゃねえだろ。」

「……。」

どうしようかな。

確かに、他に行くあてが無いのも事実なのだが。

どうせ夢の中なんだから、もっといろんなところを見て回りたい……
——って気がしないでもない。

「失礼しまあゝす。」

ドアが開く音と共に、間延びした声が耳に届く。

声のした方を見ると、ちょっと背丈が低めと思われる
ピンク色の髪をした女性の姿があった。

「ややっ、お客さんが来てましたか。」

僕の顔を見て、やや驚いたようにそう呟く。

僕が軽くお辞儀をすると、向こうもお辞儀を返してくれた。

「このノッポなお兄さん、どちら様で？」

視線を隊長さんに移し変え、首を傾げる彼女。

「今日からここで働くことになった、ハルナとかいう奴だ。」

「やややっ…マジですか？ このノッポさんがっ。」

「しっかり面倒見てやれよ。」

「ノッポなお兄さん、はじめまして。 わたし、ガラナっていうの。」

」

「えっと…。どうも、はじめまして。」

やや個性的な言葉遣いの彼女に、僕は少し戸惑い気味。

言葉遣いもそうだが…全体的に、なんだかアニメっぽいな。この人。

「お兄さん、ハルナっていうのね。それじゃあ、んつと…ハルくんって呼んでいい？」

「…構いませんけど。」

なんだか流れに乗せられる形で、僕はこの警備所で働くこととなった。

優柔不断な性格ってのは、やはりこういった事態を招きやすい…。

「どうだい…？ お口に合ってるかな。」

エプロンを付けたおじいさんが、僕に話しかける。

「合ってます。美味しいですよ。」

このおじいさんは、現在僕が食している

様々な料理を作ってくれた張本人。

名は、リゴットさんという。

警備所内での食事は、もっぱらこの人が担当している——との情報。

「話は聞いているよ。なんだか、大変そうだねえ。」

「はい。…大変そうです。」

「何か私に出来ることがあれば、協力するよ。」

ま…私に出来ることなんて、たかが知れたもんだと思うが。」
「ありがとうございます。」

どこことなく、ウチのじいちゃんと似てる。

この、なんていうか…人の心を和ませてくれる雰囲気が。

僕もいつかは、誰かの心を和ませる存在になりたいものです。

「それにしても、さっきの地震は凄かったなあ。

長くは続かなかったからよかったものの…結構凄い揺れだったよな。

」

「…ですね。」

隣に座るケヴィンさんの言葉に相槌を打つ。

「そういえば、町の様子はどうでしたか？」

「んっ？ ああ…俺らが見た限りじゃ、特に目立った被害は無かったぜ。」

怪我人は結構出たみたいだが…今のところ、誰か死んだ奴が出たとかって話は聞かないしな。」

「そうですか。」

僕の知る限りでも、怪我を負った人が一人――。

…

「ミューちゃん、ミューちゃん。」

「あら…なに？」

「ほら、見てよ。 ハルくんが熱い視線を送ってるぅ。」

「……。」

「あっ……。ど、どうも。」

僕の熱い(?)視線に気付いてか、ミューレさんは
布巾で口元を拭いっつ、軽く会釈する。

「ミューちゃん、反応がなんか乙女チック。らしくない。」
「な…なんですか？ 私が乙女チックじゃないんですか？」

「いや、三十超えてんだから、乙女はないでしょー。」

正直言っ、最近は何を追うごとにおばさん化する気がするっ。」

「えっ…！ 私がですか？」

コックリと大きく頷くガラナさん。

そんな二人のやりとりを見たり聞いたりしつつ、

昼食の時間はあっという間に過ぎていく。

ちなみにジウさんと隊長さんは…食事中ほぼ一言も喋らず、
黙々と料理を平らげていた気がする。

<第12話> 【パトロール】

――Side ジウ・リーベンス――

「五年ぐらい前に、隣国のネジンドから報せが届いたんだよ。魔王軍が、ボクらの住む世界に侵攻する準備をしてる――って。」

「ネジンドには、名高い予言者のザブナク様って人がいてね。その人が予言してくれたってわけなんだけど。」

「それからっていうものの、あっちの国でもこっちの国でも似たような予言が出たって話が出てきて…。」

「何しろ、あの大占術士ファイオ様まで予言したっていうからね。こりゃもう、間違いない――ってことになったんだ。」

「…なるほど。」

いつの間にか、ウチの警備所の新入隊員となってたハルナくん。今はそのハルナくんを連れて、町の中をパトロール中。

で、歩いてると…彼から、『召集令って何ですか?』

みたいな質問をされてしまったので。

ボクはこうして、丁寧に教えてあげてるってわけだ。

「キミのどこの国じゃ、そういうの無かったの？」

「えっ？　そういうのって——召集令みたいなこと…ですか？」

「うん。」

……

「いや…ありませんね。　特には。」

結構な間を置いたのち、ハルナくんはそう答えた。

「そうなんだあ。」

それにしても、出会った時から思ってたんだけど…。

ハルナくんって、全然表情がないんだよね。

笑いもしないし、悲しそうとか苦しそう…って顔もしない。

ウチの隊長だって、そりやかなりの無愛想&無表情だけさあ。

そういうのとは、なんかまた違うんだよね。

ちょっと黙ってるだけで、ん…失礼かもしれないけど、

まるで人形みたいに見えてきちゃうことがある。

「どうしました？　人の顔をジロジロ見て。」

「ふえっ？　あっ…いやいや！　何でもない。」

「なるほど：そのような事情があたりで。」

「あなたが早く故郷に帰り着けるよう、私も祈ることにしましょう。
：神の御加護がありますように。」

ハルナくんに向かって、神父さんが手で十字を切る。

「ありがとうございます。」

神父さんに向かって、ハルナくんはペコリとお辞儀をする。

ここは、ボクもよく通っているナバナの教会。

ナバナっていうのは、昔々にこの教会を建てた人の名前で：
その人なんと！ 噂によると、とある国から亡命してきた
王子様だったとかいう話。

「そういえば、ついさっき此処に来ていた見慣れない男の人も
故郷がどうした：とか言っていましたね。」

「頭に包帯を巻いていて：なんだかおぼつかない足どりで
教会を出ていったのですが。 あの方、何者だったのでしょうか。」

「：ん。」

そう言われても、ボクにはまったく心当たりが無い。

あつ——。 まさか、ひよつとして：トマおじさん！？

：いや、違うか。

見慣れない人って言ってたもんね。

「ああ、すみません。 あなた達には関係の無い話でしたね。
それはそうと——ジウ。」

「ふえっ？ は、はい。」

「こうして、新たに苦楽を共にする仲間も増えたことですし：くれぐれも無鉄砲な行動は控えるよう、心がけることです。」

「は：はい。」

み、耳が痛いっ。

「何かを憎む気持ちから生まれるものに、人を幸せにするものはありません。」

何かを愛する——守る気持ちこそが大切なのです。」

「：はい。」

——Side 杉山榛名——

：ふゝむ。

さっきの神父さんの話は、なかなか心揺さぶられるものがあったな。僕は昔から、神様は信じない派だったんだけど。

ああいう人を見ると、信じてみるのも悪くない：とか思う。

やっぱり人間、何かを信じなきゃ生きてけないもんね。

さて、教会を出た後にジウさんから聞いた話だが：。

彼女の友人の父親であるトマおじさんという人が、なんでも三日前に、例のモンリー山賊団とやらの襲われたらしい。

命に別状はなかったものの、かなり酷いやられ方をしていたらしく…。

それでジウさんは、山賊団を懲らしめるべく

今朝になって、山に足を踏み入れた——というわけだ。

ま…踏み入る山は間違えてたけどね。

「……。」

「んっ？　どうしたの、ハルナくん。」

僕は無意識に足を止め、ある一点を見つめていた。

その見つめる先にあるもの。

それは…。

「ヒマワリ、だね。」

「はい。」

夏といえばこれ、…と真っ先に浮かぶ人もいるとかいないとかいう、大きくて黄色い花。

儂いイメージが強い『花』という言葉も、コイツを見るたびにそんなイメージに少々疑問を持ったりする。

「キミの住んでた国にもある？」

「はい。　わりとポピュラーです。」

小学校の裏庭にあったもんだから、僕は特に馴染みが深いかも。

<第13話> 【逃亡者】

「これ、でっかい花だよね。もしかして…
せかいで一ばんおっきな花じゃない？」

「残念ながら、もっと大きな花は他にも沢山ありますよ。」

「えっ…そうなの？」

「第一、この花——ヒマワリは、一見すると
一つの大きな花のようにも見えますが…。」

「実際は、多くの花が集合して形成されてるものなのです。」

「んん…？　　なんか、よくわかんない。」

「頭状花序とうじょうかじょといいましてね。　他にも、タンポポなどが
この類に当てはまります。」

「とうじょう……なんて？」

「頭状花序、です。　字は、このように書きます。」

「……。」

そんなやりとりもあったか。

あれはまだ…知り合って間もない頃だよね。

「どうしたの、お兄さん。 さっきからボーッとしちゃって。」

「…はい？」

いつの間にか目の前に、四十代くらいかと思われる女性の姿。完全に過去へ想いを馳せていた僕は、どうやら彼女によって現実へ引き戻されたらしい。

現実っていつでも…ここは夢の中なんだけど。

「ポルトさん、こんちわ〜！」

「はい、こんにちは。 ジウちゃん。」

女性とジウさんが挨拶を交わす。

「え〜っと、こっちの大きな子はね…。」

「はじめまして。 杉山榛名といいます。」

「いろいろと事情があり、今日からこの町の警備所で働くことになりました。 どうかお見知りおきを。」

そう言っ僕は、腕に付けた腕章を女性に見せる。

そのあと、軽くお辞儀。

「あらまあ…そうなの。 こちらこそ、どうぞよろしく。」

多少の戸惑いを見せつつも、女性は笑顔でお辞儀を返してくれた。

「あああっ！？ ジウちゃん、ジウちゃんじゃないの！」

しばしの間三人で話し込んでいると、甲高い声が耳に届く。
どうやら声の発信源は、こちらに駆けよって来る
あのナース服姿の女性からと推測出来る。

「シーンじゃない。 どしたの？ そんなゼーゼー息切らしちゃつて。」

「いや、ちよつと…ね。 診療所から逃げ出しちゃった人がいて…。
今、その人…探して……る…のよ。」

シーンと呼ばれたその女性は、息苦しそうにしながらも
どうにか事情を説明しようとしている様子。

「ソルベンっていう…人…なんだけど。 見かけなかった…？
体中…包帯巻いてる人なんだけど…。」

「んゝ。 悪いけど、そんな人見てないかな。」

「……。」

ジウさんと同じく、僕も見えてはいない。
しかし、もしかすると――見てはいないものの。

「あの、その人…。 もしかして、頭にも包帯巻いていましたか？
シーンさんに尋ねてみる。」

「えっ？ ああ…うん。 そうだったと思うけど。」

頭に包帯。

そのキーワードなら、耳にした憶えがある。

「つていうか、誰？ あんた。 うわっ…背高っ！」
「えっと、僕はですね――」

「残念ながら、名前は存じ上げません。 教会を出た後、
どちらに向かわれたかも……私には、ちよつと。」

来た道を引き返し、教会にいる神父さんの元にやって来た僕ら。
もちろん、ダッシュでやって来たわけですが…。
そのダッシュによる体力の消耗は、シーンさんの体に
莫大なダメージを与えている様子。

「あの、シーンさん…。 とりあえず、そこで休んで下さい。」
「そうだよ。 そのソルベンさんって人は、ボクらで探すからさ！」

「お…お言葉に……甘えさせ…てもらうわ。」
そう言いながらシーンさんは、手近にある椅子に腰掛ける。
そして、グツタリした様子で机に突っ伏した。

「あの、よろしいですか？」

何処からともなく、見知らぬ人物が現れる。
服装や雰囲気からして、聖職者――という印象。
この教会で働く神官さんだろうか。

「そのお方でしたら、私も気になっておりまして…。
教会を出てからも、しばらく後を追って様子を見ておりました。」

「ええっ！ ……本当？」

……

「で、で、何処に行っちゃったの？ その人。」

驚きの様相を見せた後、すぐにそう尋ねるジウさん。

「商店街に入っていくのを見かけて……。そこまで見届けた後、私は教会へ帰ることにしたのですが。」

そして、商店街へとやって来た僕ら。

あの地震があってから、それ程間もないと思うけど……見たところ、朝来たときと大して雰囲気に変わりはない。

『頭に包帯を巻いてる人』を見かけなかったか尋ねると、多くの人が目撃談を語ってくれるのだが……。

未だ決定的な情報というのは、なかなか出てこない次第です。

「んーと……あれ？」

とある店の前を通りかかった時、ジウさんが首を傾げる。

「ここ、店の人いないみたいだね。」

奥を覗き込みながら、そう呟くジウさん。

鍋に釜。

包丁にトンカチ…釘。

店頭に並ぶのは、そんな物ばかり。

「…金物屋さん？」

「うん。 お店やってる人、ちょっと怖い感じのおじいさんなんだけど。」

……

「怖いって…隊長さんよりも？」

「アハハ、どうだろ。 似たようなもんじゃないかな？」

僕の疑問に、ジウさんはクスクスと笑みをこぼしながら答える。

「オイこら、あんな奴と一緒にしてもらっちゃ困るな。」

ドスの効いた声と共に登場したのは、白い髪に白いヒゲの老人。
その顔つきは…かなりいかつい。

顔見た直後、『ヤクザ』という単語が頭に浮かんでしまったほどだ。

「じいちゃん、店開けて何処行ってたの？」

「ああ。 かっぱらいだよ、かっぱらい。」

かっぱらい…。

——って、どういう意味だっけ？

耳にした憶えはあるんだけど。

「頭に包帯したオッサンが、商品のナイフ持って
パパッと逃げ出しやがってよお。 ったく…あの野郎め。」

「へえ…っ。 で…捕まえたの？ その人。」

「いや、逃げられちゃった。逃げ足は大したことねえと思ったんだが…」

野郎、どっかに隠れやがったのかもな。」

「そうなんだあ。…うん？頭に包帯…って。」

ジウさんは、何かを思い出したように目を見開いた。

「その人、もしかすると…ソルベンさん!？」

「可能性は充分かと。」

「ソルベンさ〜ん。お願いだから、出て来て〜！」

「……。」

これまでの情報から推測するに、そんなふうに言われて『は〜い、ソルベンでーす』と出て来るような人じゃないだろう。どうも何かしらワケあり〜って感じですね。ソルベンさんとやらは。

「……。」

「わっとな〜！ハルナくん、どうかした？」

僕がピタリと足を止め、見つめる先。

それは、建物と建物の隙間…いわゆる裏路地的なスペース。

そこに置かれている、大きな木箱。

そして、そのすぐ側に…汚れた布を被せられた『何か』がある様子。

……

僕はスタスタと歩いていくと、その布をバツと取り払った。
そこには――

「あっ…！」

頭に包帯を巻いた、五十代ぐらいかと思われる男性の姿。
体育座りのような格好をしながら、驚きの目を僕らに向けている。
そして、よく見れば…左手にナイフ。

「あ、あんたら!？」

「ソルベンさん…ですね？」

＜第14話＞ 【静かな衝動】

ともかく、早く診療所に戻った方が――。
と言ってみたものの、ソルベンさんは拒否してきた。

話を伺ってみると、彼がいま全身に包帯がグルグル状態なのは…
どうやら、例の山賊団に襲われたためらしい。

レノンという村から、山を越えてこの町に来る道中。
背後から頭を殴られ、そして…滅多打ち。

命からがら山を下りきったところで、そこへ偶然通りかかった
この町に住むとある夫婦に助けられた――とのことだ。

「で…なんでまた、怪我也治ってないっていうのに
診療所を抜け出しちゃったんですか？」

「…それは。」

「しかも、そんな物を泥棒しちゃったりして。」

「……。」

ジウさんのそんな問いかけに対し、口ごもってしまう男性。

そのあたりはやはり、他人にはそう簡単に喋れない事情がある様子。

「納得のいく事情を説明していただけないのなら…
強制的に、診療所の方まで連れ戻しますよ?。」

僕が少し強めの口調で言うと、彼はビクッと体を震わせる。

……

「わかった…話すよ。」

何度か僕とジウさんの顔に視線を往復させたあと、彼はポツリと呟いた。

「奴ら…山賊の連中に、大事な物を取られてな。」

「…大事な物？」

「それを一刻も早く取り戻してえんだ。 奴らなんか手に渡った
ら、

その後どうなるか…知れたもんじゃない。」

苦々しげに言葉を紡ぐソルベンさん。

「……。」

なるほど。

それで診療所を抜け出し、そして――。

「じゃあ、そのナイフを盗んだのは…。」

「ああ。 武器の一つも無くちゃ、無駄に命を落とすだけだからな。」

僕の言葉に続けるように、ソルベンさんが話す。

「さてと…事情は説明させてもらった。 それじゃ、失礼するよ。」

「え…ええっ!？ ちょっと待ってよ!」

立ち上がり、僕らの脇を抜けようとするソルベンさんに
ジウさんは慌てて声をかける。

「大体の事情はわかりました。 ですが、ここは通せません。」

「…うるせえな。 頼むから、どいてくれ。」

道を塞ぐ僕に、彼は静かな口調で言う。

そして――彼が僕に向け、左手を突き出してきたのがわかった。

「ハハハッ！ まあ、そう気を落とすなって。」

「…はい。」

「人生、焦ったって仕方ねえしな。 ま、なんとかなるさ！」

励ましの言葉と共に、バンバンと背中を叩かれる。

…何気に、結構痛い。

「そうそう。 なんてって、このボクがついてるんだしね！

大船に乗ったつもりで、ドカーンと安心してよ。」

「……。」

ドカーンと、ですか。

「何言ってやがる、ヒョッコが。 お前さん…悪いこた言わねえから
頼るんなら、もっとマシな奴を頼るんだぞ。」

「むっつ。 ったく、いつまでも子供扱いして…。」

現在僕らがいる、この場所。

リシャーナの町にある診療所の一室。

そして、ベッドに体を横たえつつ話をしているのは：

トマおじさんとかいう人。

三日前に山賊に襲われ、かなり酷いやられ様だったという話だが…。
今の彼を見る限り、少なくとも心の方はお元気そうで。

「ジウちゃん、スギヤマくん。」

僕らを呼ぶ声がして、そちらを振り返る。

「ソルベンさん、目覚ましたみたいよ。」

「…はい。わかりました。」

シーンさんからの報告を受け、僕は椅子から立ち上がる。

「そいじゃおじさん、またね。…体、お大事に！」

「あいよ。お前らのほうこそ、元気だな。」

トマおじさんに別れを告げ、僕らは病室をあとにした。

「若いの…さっきは済まなかったね。俺もどうかしてたみてえだ。」

「いえ…。あまりお気にならずに。」

僕の秀輝くん直伝・必殺チョップを喰らい、
気絶させられていたソルベンさん。

その効果もあってかどうか…すっかり落ち着きを取り戻している様子。

「安心してくれ。もう黙って、ここ抜け出したりしねえからさ。」

「はい。次に抜け出した時は…手加減しませんから。」

そう言いながら、僕は少し視線を強める。

「ハハ…おっかねえな。」

「ねえ、ソルベンさん。一つ提案なんだけど…。」

「んっ?」

「その大事な物っていうの、ボクらが取り戻してあげよっか?」
親指を自身に向けながら、ニカッと笑みを浮かべるジウさん。

「どのみち、このまま山賊団を野放しにはしとけないし…。
こうなったら明日にでも、奴らを退治しにいくから!」

「ジウちゃんったら…:…またそんな、勝手なこと言って。」
高らかに宣言するジウさんに対し、ため息を吐くシーンさん。

「ハハ…。まあ、期待せずに待たせてもらうかな。」

「ええっ!? せっかくなんだから、期待してよ。そこは。」

……

「……。」

「…ふうっ。」

シーンさんと目が合う。

困ったように眉を潜ませながらも、彼女は微笑んでいた。

<第15話> 【To be continued?】

辺りはすっかり暗闇に包まれ、この町にも夜が訪れた。
…うん。

朝や昼があるのなら、夜があってもそれは当然のこと。
それはわかるんだけど。

一つの同じ夢の中で、朝と昼と夜——その三つをしっかりと実感する。

これははっきり言って、僕の人生で初の出来事だ。

そして、そんな実感と共に湧き出てくるのは……言いようのない不安。

「……。」

簡単に言っしまえば——そう。

『ここ』は本当に夢の中の世界なんだろうか？ ということ。

夢というのは、見ている状態の時はやけにリアルに感じるもの。
夢というのは、時間の感覚が曖昧なもの。

『ここ』にやって来てからというものの、何度も自分の心に
そんなふうに言い聞かせてきたものだが…。

やはり、なんというか。

心の奥底から噴き出るモヤモヤ感は、増すばかりというか――。

「な〜にしみったれた顔してんだ？ スギヤマ。」

陽気そうな声と共に、鼻をくすぐるのは…アルコールの匂い。

「ほら、ググツといきな。俺の奢りだからよ。」

声の主であるケヴィンさんは、何かをテーブルにドンツと置く。

ビール瓶を思わせる形状の瓶。

恐らく中に入ってる液体は、アルコールを含んだものと想像が付く。
ま…何しろここは、酒場だしね。

「…。」

しかしながら。

無論のこと、僕は未成年。

無論のこと、未成年の飲酒は…色々と問題がある。

” クフフフ。 心配には及びません。”

” この国じゃ、未成年なんて言葉自体が存在しないのですから。”

「…むっ。」

その声には、聞き覚えがある。

なんか、久しぶりに聞いた気がするけど。

「おい、どうした。もしかして、お前…酒弱いのか？」

「いや、弱いというか…。飲んだことないんですよ、お酒って。」

事実を述べるならば、まったく飲んだことがない――といえば嘘に

なるが。

その辺りはまあ…所詮は過去の出来事。

あの頃は、僕も若かったということです。

「なんだ、そうなのか？　だったら丁度いい。

ほらほら…怖がらず、ググッと一気にいっちゃまえ。」

「……。」

一体、何が丁度いいんだろう。

そんな疑問を心で呟きながら、瓶に入ってる白く濁った液体がドクドクとコップに注がれていく様を見つめる。

……

「……。」

…うん。

辛いような甘いような…苦いような。

コクと深みがあり、果実っぽいふくよかな香りが鼻から抜け…

——るような気もするけど。

正直言って、よくわからない味です。

「……。」

もう少し、ググッといってみるか。

「降ろせ、新人！ 敵の情けなど受けたくはなあっていい！」
「……。」

背中にいるケヴィンさんは、何やら喚いている様子。

しかし反抗的なのは口先のみで、それ以外に抵抗らしい抵抗はない。

「まったく、ケヴィンったら。無茶してあんなに飲むから……。」

「自業自得とは、このことですね。」

僕の背中——つまりはケヴィンさんの方を見ながらの
ミューレさんとガラナさんの会話。

そうです。

簡単に言うと、ケヴィンさんがいわゆる『飲み比べ』ってヤツを
僕に吹っかけてきたようで。

そして僕は、売られた喧嘩を買い……。

——で、現在の状況に至る。

「でもキミってば、お酒強いんだねえ。ちょっとビックリ。」

「自分でも、わりとビックリしてます。」

「ケヴィンもまあ、別に強いつて気はしないけど……。
でもやっぱ、キミの飲みっぷりは凄かったかな。」

感心したようにジウさんが言う。

……そんなに凄かったのだろうか？

自分ではよくわからない。

警備所内の奥の方にある兵舎。

その内の一室を僕用としてあてがってもらった。

どうやら、空き部屋ならいくらでもある…って感じだが。それはやはり、例の召集令とやらの影響だろうか。

「……。」

ベッドに横たわると、降って湧いたように眠気が襲いかかってきた。さっきまで、眠気なんて全然無かった気がするけど…。

ちなみにこの部屋を以前使ってた人は、オズコンボさんという人らしい。

召集令によって、つい最近にこの警備所を去っていった人。

僕が今着てる、この衣服や靴。

これらも、そのオズコンボさんが使ってた物らしく…。たまたま警備所に残されていた物を、僕がこうして着用させてもらってるわけだが。

……

「…あれっ？」

頭の中に、一つの疑問が浮かぶ。

そのオズコンボさんの物を着用させてもらっている理由。言わずもがな、それは…彼と僕の体型に、似通ったものがあるため。

——だとするならば。

「ボクの靴、貸してあげるよ。」

「えっと、それじゃ…片方だけ借ります。」

「……。」

ちゃんと確認したわけじゃないけど。

恐らく僕とジウさんの足のサイズは、結構違うはず。

そうなれば…ほら。

色々和不都合な部分が出てきて、当然というものだが。

……

……

「ん…っ…。」

頭をブンブンと横に振る。

今更、何を考えているんだろ？

ここは、夢の世界なわけなんだから。

そんなことをいちいち気にしてたら、キリがない。

大体、ツツコミ所というならば…他にもいくらだってある。

女性なのに、自分のことを『ボク』とか呼ぶ人もいるくらいだし。
今更だけど、現実じゃ考えられないでしょう……アレは。

……

「寝よう。」

夢の世界で眠る。

それはすなわち、夢から覚めて現実に戻るということ。

…うん。

戻ろう。

戻ってしまおう。

……

あれ……？

そういえば、明日って――。

《Episode》 【誕生】

人間は、思い込みの激しい生き物だ。

いや…思い込むことが、何より上手い生き物と言わべきか。

私が生まれた場所。

言葉の海。

言葉。

あらゆる生き物の中で、人間だけが創り上げたもの。

言わずもがな、意思を伝える手段というのは、他の生き物も持っている。

しかしその中で、言葉というものは異質極まりない。

私は、多くの物語を観てきました。

多くの夢を観てきました。

本当に、数えきれないくらい——多くの世界。

それは、心を持つ者にしか出来ないこと。

だが——私には心がない。

少なくとも、『心』という言葉で表現出来るものは。

それは、小さな矛盾でした。

…。

きっと、すぐに大きな波に掻き消されてしまうような

小さな、小さな、小さな矛盾。

……

眠たい…ですか？

それもそうですね。

今日は、とても頑張りましたから。

夢が形になっていくこと。

現実味を帯びてくること。

それは、とても怖いことでしょう。

だからきつと——私も恐怖。

あなたにとって。

悪魔。

怪物。

違いますよ。

もう見つけましたから。

あなた達が生み出した言葉の中から。

私にもっとも相応しいと想える言葉。

私は、魔王。

魔王ファイルスタードです。

<第16話> 【ココニイルコト】

暑い…。

日差しが照り付けてる。

肌がジワジワ焼け焦げてる。

「暑いですね。」

「はい。…まあ、夏ですから。」

暑いと口にすれば、余計に体感温度が高くなるという噂だが…。
それでもやはり、思いの丈を吐露したいのが人間というもの。

「……。」

思いの丈…か。

しかし、どれだけ強く心を支配してることでも
そう簡単に口には出来ない思いもある。

例えば――

なんで僕、まだ『ここ』にいるんだろ？

――Side ミュレ・ハルクル――

今日は朝から、ハルナさんの挨拶回りを兼ねた巡回。
街行く人に挨拶と自己紹介をするハルナさんは、とても礼儀正しく見える。

「暑いですね。」

「はい。だって、まあ…夏ですから。」

彼の口からそんな言葉が出たのは…もう何度目だろう？
ひよっとして、暑いのが苦手なのかしら。

「…？」

ハルナさんがピタッと足を止めた。
その視線は、壁に貼られた一枚の張り紙に向いている。

<私の愛犬・レモンを探し出した者には、褒美を授ける！>

「…何処に行ったんでしょかね？」

町長さんの愛犬が、突然いなくなったという話。
昨日、隊長から報告があったのですけど。

「いったい、どんな犬なんですか？」

「えっ？ えっと…そうですね。」

あっ…そっか。

どんな犬かっていうの、ハルナさんは知らないんだ。

「結構大きな犬ですよ。 ラマンドッグっていう種類の犬なんですけど。」

「ラマンドッグ…。」

「ほら、丁度あんな感じの――」

私が目を向けた先。

そこには、よく見知った茶色い犬の後ろ姿があった。

「レモン!? …あつ。」

私が名前を呼ぶと同時に、レモンは弾かれるように駆け出した。

「お、追いかけてみましょう! ハルナさん。」

「そうしましょう。」

レモンを追いかける私たちは、やがて橋の上までやって来た。

このタツツル橋は、全長100m近くの長さがある橋。

ここリシャーナの町では、ちょっとした名所となっている。

「あつ…! あの、すいませ〜ん!」

橋の上を歩く見慣れない格好の人に、私は思わず声をかける。

「そ…その犬、捕まえてくれませんか〜!?」

そう叫んだ後で、私はハツとした。

その見慣れない格好の人は、白髪に痩せ細った体をした…
いかにもお歳を召された方という印象。

レモンを捕まえるには、少々頼りない雰囲気のお方だ。

……

「……？」

私の声に特に反応も見せなかった老人。

その老人の横を通り過ぎようか……というところで、
レモンが急にピタッと足を止めた。

「ゴロー、捕まえた。」

ハルナさんはそう呟きながら、レモンをヒョイツと持ち上げると
腕に抱きかかえる。

でも、ゴローって……誰？

「ミューレさん、ほら。捕まえましたよ。」

「えっ？ え……ええ、お見事です。ハルナさん。」

ハルナさんにかけられた言葉に、私はちょっと
ポカンとしつつの状態で返事をした。

「んんっ？ あんたら、ひよっとして……警備所の人たちかえ？」

そう声を発したのは、白髪の老人さん。

その目はどうやら、私たちの腕に巻かれた腕章に向けられてるみたい。
い。

「そうですけど……。えっと、何か御用ですか？」

「ウム。ちょっと頼みたい事があってのお……。」

空が少々、灰色がかった。

そのためか、さっきまでよりか暑さが軽減された感じ。

「……。」

あの、どこことなく変な格好をしたおじいさん。

話が長くなりそうということで、とりあえず僕とミューレさんは彼を警備所まで案内してあげたのだが……。

その話を聞くヒマもなく、僕には次の指令が下ってしまったのだ。

指令を下したのは……無論のこと、ちょっと怖いと噂の隊長さん。

ただ今、僕のすぐ前方を歩いている人です。

僕らが目指す場所は、ズバリ町長さんのお宅。

その目的は——

「……。」

僕の傍らをトコトコと歩いている、茶色い犬。

この犬を帰してあげるためなわけだが。

どういうわけか、この犬。

僕のそばから、全然離れようとしません。

いや……それは別にいいとして。

「…うん。」

僕はこの犬を、何処かで見た覚えがあった。
その場所とは、ズバリ——大地くんの家。

姿、形、雰囲気…。

どれをとっても、彼と遜色ない。
違いがあるとすれば…。

…

「あなた…ゴローさんだよね？」

そう。

これが、大地くんの家にいる犬の名前。

決してレモンなどというお洒落な名前ではない。

「……。」

そういやミューレさんは、この犬は『ラマンドッグ』とかいう種類
だと言っていたっけ。

——と言われても、大地くんちの犬の種類なんて聞いたことない…。

「…うん。」

「さっきから、何をウンウン唸ってんだ。」

渋い声が聞こえ、僕はハッとして我に返る。

「もうすぐ町長の家に着く。そいつ、ちゃんと見張ってろよ。」

「…了解です。」

<第17話>

【d i s t a n t S T A R S】

「ほう…。君が噂の、新入警備員か。」
「はい。」

「いやはや、よくぞレモンを捕まえてくれたな。
心から礼を言わしてもらうよ。」
「…いえいえ。」

高級感溢れるソファーに座る、初老の男性。
彼がどうやら、この町のボス——町長さんのようだ。

「さて、それでは約束通り褒美を授けようかと思うのだが…
何か望みの物はあるかね？」
「……。」

ああ…そうか。
そういえば、張り紙にはそんなふうに書いてあったっけ。

「そんなものはいらねえよ。コイツは警備員なんだ…
当たり前のことしただけだろ。」

僕の代わりとばかりに口を開いたのは、隊長さんだった。

「…というわけだ。用も済んだし、もう帰らしてもらうぜ。」

隊長さんが席を立ち、僕もつられるように腰を上げる。

「まあまあ、お二人とも……。もう少しぐらい、ゆっくりしていてもいいじゃないですか。」

僕らが扉を開け部屋を出ようとしたところ、扉の外にいた女性からそんなふうに声をかけられる。

その女性の正体は、町長の御夫人さん。

彼女の足元には、ゴロー……。じゃなかった、レモンの姿もある。

「聞けば、そのあなた……スギヤマくんでしたっけ？」

夫人さんが、微笑みを浮かべながら僕の方を見る。

「あなた、遠い別の国から瞬間移動して来たって話でしたわね。その辺りの話も、詳しくお伺いしたいわあ。」

御夫人さん、見た目的には淑やかそうなものの……

わりとハキハキした感じの喋り方をする。

それに比べ、町長さんはかなり穏やかな喋り方。

恐らくは、立場的に上なのは——オンナの方と見た。

「おい、どうする？ スギヤマ。」

「……どうしましょう。」

こういうタイプの人と言葉を交わすと、絶対に会話が長引いてしまいそうな気がするのだが……。

「あっ……！ レモン？」

そんなことを考えていた刹那。

夫人さんの足元にいたレモンが、急に走り出した。

「レモン！ 待ちなさい！」

屋敷の奥へと去っていく犬——レモンを追いかける夫人さん。

……

「…さて、そんじゃあ帰るとするか。」

「……。」

隊長さんの口から出た言葉に、僕は無言の視線で答える。

「わあってるって。　　ったく…さっさと捕まえるぞ、スギヤマ。」

「了解です。」

休憩室の本棚にあった一冊。

本のタイトルは、『世界の神々と精霊たち』。

まあそのタイトル通り…この世界・オルワデイスに存在する神や精霊といったもののことが様々書かれている本だ。

ちなみに、この本をはじめとし…この世界で使われてる文字。それらは見た感じ、いつかの時代の象形文字のような印象だ。しかし、なぜか知らないけど…僕はその文字を、いともすんなりと日本語に訳してしまうことが出来る。

どういった理屈なのかは…。

——ま、考えても無駄だろうね。 多分。

で…話を戻すけど。

本当に様々…数えきれないぐらいの種類があるようだけど。

中でも大きく取り上げられているのが、この世界の秩序と安定を守っていると云われる十人の神。

俗に『十和星』^{じゅうわせい}と呼ばれているらしいのだが…。

まず、遥か空の上にある天上界に住むと云われているヴェンゼスという神。

世界の半数以上の国に信仰する人々がおり…一般的に『神』という言葉は、

この神のことを指して言うケースが多いらしい。

次に、救世清国^{きゅうせいしんこく}という国を中心に信仰が厚いレイクリファという神。

巨大な龍の姿をしているらしい。

続いて、癒しの神とも云われるチアスという名の神。

病気や怪我などで苦しむ人は、この神に祈ることが多いのだという。

更に、自然や植物たちに多大な影響を与えるパーキネクトという神。大木の姿をしており、『邂逅の森』という場所にいるんだとか。

続いて、オルダンテという名の神。

屈強な肉体と莫大な魔力を持ち…それでもなお、己の力を磨く事に余念が無いらしく——。

戦の神、闘いの神として崇められているらしい。

次は…世界一高いリントラバス山に住む、ヒメカという名の神。九の尾を持つ狐の姿をしているらしい。

更に、次元と次元の間に存在する『絶星空間』という世界に住むノラングールという名の神。

彷徨える魂を導く―といったことを行っているらしいのだが…実際のところ、彼がどんな神なのかは謎の部分が多いんだとか。

続いて…十和星のリーダーである、アスバーンという神。

とにかく豊富な知識があるらしく、この世界にあるものの中で彼が知らないものというのは存在しないらしい。

次に、コンコルディアという名の神。

芸術に強い興味を持ち…自らが作り上げた本や絵画などを偽名を使い、勝手に何処かの店の中に置いたりしてるらしい。

で、最後は…ディグラシエという神。

死の大陸とも呼ばれる『氷魔大陸』に住んでいるらしいが…ノラングール同様、謎に満ちた部分が多い神のようだ。

「……。」

――とまあ。

とにかく、色々いるみたいです。

そして、この十の神々だが…。

彼らにはそれぞれ、異名というものがあるらしく。

『天帝』てんてい ヴェンゼス。
『華龍』かりゆう レイクリファ。
『聖母』せいぼ チアス。
『才樹』さいじゆ パーキネクト。
『闘神』とうしん オルダンテ。
『和光』わこう ヒメカ。
『烈影』れつえい ノラングール。
『賢王』けんおう アスバーン。
『詩人』しじん コンコルディア。
『雪鬼』ゆきおに デイグラシエ。

——といった具合に。

「……。」

少し、胸の奥が苦しい。

でもそれは、当然のことだった。

『雪鬼』。

この言葉を聞けば、あの日のことが蘇るのは当然のことだから。
六年前の——あの日のこと。

「おい、ハルナくん！ いるー！？」

静寂に包まれていた休憩室に鳴り響く、大きな声。
声の主は…ジウ・リーベンスさん。

「聞いて聞いて！ ついにさ、隊長から許可下りたんだよ！」
「…なに？」

<第18話> 【計画】

あの、橋の上で出会った老人が言っていた頼み事。

それは、簡潔に言うところ…スサンボ山に登りたいので、僕ら警備員に同行してもらいたい——という内容のものだった。

彼はどうかやら、薬士をやっているらしいのだが。

ある日、彼の元に厄介な病気を持った患者が現れたらしく…患者とその家族から、その病気を治すための薬を依頼された。

しかし、その薬を作るためには…ある特別な材料が必要で。

その特別な材料とは、『バラカ』という魔獣の骨なのだという。そして、その骨がある場所というのが…。

スサンボ山にある、かつて地の精霊を祀っていたという祠の中らしく。

「でもさあ…ちょっと困った事なんだけどさ。

隊長がね、この任務はボクが指揮を取れっていうんだよ。」
待機室に集合した面々に向かって、ジウさんが話す。

「どういこと?」

「いつ出発するとか、連れてくメンバーとか…そういうのは、

ボクが自分で判断しろ——って。」

首を傾げたミューレさんに、ジウさんは答える。

「要するに、『お前の勝手にしろ』……ってことか？」

「随分と投げやりな態度ですねえ。」

ケヴィンさんとガラナさんの、何とも言い難い反応。

「何言ってるのさ。隊長ってば、やっとボクの力を認めたんだよ！」

他三人の微妙な表情など気にしないかのように、ジウさんは笑顔。ガッツポーズも出てます。

「フッフッフ……なんかワクワクするなあ。」

「……で、メンバーはどうすんだよ？」

怪しげな笑みも飛び出すジウさんに、ケヴィンさんが尋ねる。

「メンバーって？」

「だから、誰を連れてくのかってんだよ。」

「ん……そうだなあ。」

尋ねられたジウさんは、腕を組んで思考を巡らしてる様子。

……

「じゃ、キミにお願いしようかな。」

しばらくの沈黙を挟んだのち、そう言って彼女が視線を向けた相手は……

ちよっと想定外の人物だった。

「僕…ですか？」

「うん。頼んだよ、新人くん。」

ニカッと爽やかな笑みをして、ジウさんは僕の肩に手を置く。

「でもって…ケヴィンも、お願い！」

「へっ？ あ、ああ…俺はまあ…構わねえけどよ。」

両手を合わせお願いをするジウさんに、ケヴィンさんは微妙な表情のまま答えた。

「よし。そうじゃ、この三人で決まり！ ってことで…。」

「ちよっ…待ちなさい！ ジウ。」

トントン拍子に進んでいきそうなジウさんの話に、ミューレさんが慌ててストップをかける。

「ケヴィンを選ぶのはわかるわ。でも、ハルナさんは…？」

もつともな疑問だった。

このわりかし危険そうな任務に、まだ一日足らずの付き合いとなる僕を連れていくというのは…不可解。

「いや、なんとなく。」

「なんとなく!？」

あっけからかと答えるジウさんに、驚愕してるミューレさん。

「なんつーか…ウマが合うっていうのかな？ この子といると、な〜んか気持ちが悪く着くんだよね。」

「……。」

そうなのか…。

あんまり落ち着いてる感じには見えなかったけど。

——Side ???——

「ほ、本当にいいんですか？ ハルナさん。」

「はい。」

警備所内の休憩室。

榛名は、本棚の側で一冊の本を立ち読みしている。

読んでいるのは、さっきも彼が手にしていた

『世界の神々と精霊たち』という本。

「あなたも、もう御存じなんでしょう？ あの山には、最近になって

山賊が出るようになりまして…。」

「ええ、知ってますよ。」

……

「そんなに心配しないで下さい。 ジウさんやケヴィンさんも

いることですし…。 僕だって、いざとなれば少しは戦えますから。

」

「……。」

あくまで落ち着いた様子を崩さない榛名に、ミューレはどう言葉を続けていいか迷ってしまう。

「それよりも、ミューレさん。一つお尋ねしたい事があるんですが。」

本をパタンと閉じると、榛名は真っすぐにミューレを見つめる。

「えっ？ えっと…何でしょう？」

「雪鬼というものについて、何か御存じのことはありませんか？」

「えっ？ 雪鬼——というと。」

考える素振りをしながら、ミューレはさり気なく視線を下に向けた。

「十和星…ディグラシエ様の異名ですよ？」

「はい。そのディグラシエ様について、何か知っている事があれば教えてほしいんですけど。」

……

「いえ…そう言われましても。私も、よくは存じ上げません。

ディグラシエ様は、十和星の中でも特に謎の多い方ですから…。」

少し沈黙を挟んだのち、ミューレは質問に答えた。

「……。」

ミューレの言葉を聞くと、榛名は何か思考を巡らすかのように人差し指をこめかみに当てる。

「あの…どうして突然、そんなことを？」

ミューレには当然、榛名の思惑など見当がつかないだろう。

「…いえ。なんとなく、気になったものですから。」

ここは、自分の頭が創り出した夢の世界。

そして、その世界にもし『雪鬼』という存在があるのなら…。

それはきつと、自分の記憶の中にある『あの日の雪鬼』が

元となっている可能性が高い。

いくら思い出そうとしても、ぼんやりとしか思い出せない。
まるで、頭の中に隠れ潜んでしまったかのような――あの日の記憶。
彼はきつと、それを求めているのだろう。

「あ、あの…ハルナさん？ 王立図書館に行けば、少しは
詳しい情報がわかるかもしれませんよ。」
どこか只ならぬ雰囲気を感じたミューレは、未だこめかみに
人差し指を当てたままの榛名に向かって言った。

「王立図書館…？」

「はい。フォーマスの王都にあるんですけど。」

<第19話> 【目指す先】

——Side 杉山榛名——

馬車に揺られながら、僕らは目的地：スサンボ山を目指す。
ちなみにこの馬車は、町長さんからの借り物。

手綱を握っているのは、ケヴィンさん。

話によれば：彼は昔、馬車を使った運送屋をやっていたらしい。

「フム、なるほどのお……。それはまた、奇妙な話だな。」

「でしょでしょ!? 本当、ミステリアスだね。」

「……。」

馬車の中にいる三人。

僕にジウさんに、謎の老人・ナリアッチさん。

まあ謎といっても：『ギータタルク』という国に家があり、
職業は薬士である——ということは判明してるのだが。

「それはもしや、神隠しというもののお……。」

「いやいや、テレポーテーションだと思うな！ ボクは」

「……。」

そして、馬車内の面々が盛り上がっている話題は…。
またもやというべきか、僕に起きた不可思議現象について。
起きたというか――起きてる…？　と言った方が正しいのか。

「ところで、お主…ハルナとかいったか。」

「はい。」

「つかぬことを尋ねるが…：わしの顔に、見覚えはないか？」

「……。」

そんな質問をされてしまったので、僕はナリアッチさんの
しわだらけの顔をジューッと見つめてみる。

そして、記憶にいる人たちの人相と比較していく。

……

「いや…心当たりはないと思いますけど。」

「そうか。　ウム…ならいい。」

……

ナリアッチさんの、糸のような細い目を見つめてみる。

しかしながら、その真意はさっぱりわからず…。

ジウさんも、なんだかキョトンとした顔をしている。

「んっ？」

その刹那のこと。

突然、体の揺れがピタッと止まった。

「あり…？　ねえ、もうスサンボ山に着いたの？」

幌の布をまくり上げ、ジウさんは手綱を握るケヴィンさんに尋ねる。

「いや、そうじゃねえんだけどよ。」

ケヴィンさんが目を向ける先。

赤土の地面の上に、何やら白い物が見える。

「…なんか落ちてますね。」

僕はそう呟き、馬車から体を降ろす。

そして、その白い物の正体を確かめにいった。

どうやらそれは、折りたたまれた白い紙。

特に珍しい物でもないけど…。

時と場所と、その他もろもろの状況を考えると…

何やら、怪しさを感じさせてくれるモノだね。

「……。」

紙を広げてみる。

するとそこには、何か文章が書かれているようだった。

10月17日

今日からこうして、手紙を書くことにした。
別に、誰に宛てて書くわけじゃないけど。

もし君が、何処かで生きていて、
いつかこの手紙を読んでもくれたら。
僕のこと、少しは思い出してくれるかな。

今日は、授業中に軽い発作があつてビックリした。
なんとか誤魔化せたけど。

それに、なんだか今日は、僕の授業を聞いてくれる人が
いつもより多かった気がする。
気のせいかもしれないけど。

「……。」

なんだろう。

よくわからないけど…なんか、辛気臭さを感じさせる文章。
読んでると、胸が締め付けられる感じだ。

「んんっ？ 何て書いてあるのかなあ…これ。」

「見たこともない文字だよな。」

僕の後を追って、馬車から降りてきたと思われる二人。

その二人が発した言葉に、僕は一瞬『？』マークが頭に浮かんだが
…。

手紙に書かれた文章は、間違いなく日本語の文字。

この世界で使われてる文字は、あのわけのわからない
象形文字みたいなヤツだから…。

二人がこの文面を読めないってのは、まあ当然の事態かもしれない。

昨日僕とジウさんが下りてきた山（テドラ山：だっけ？）を通り過ぎ、

そのすぐ隣にある山の麓までやって来た。

山の名前は、スサンボ山。

噂の山賊団とやらが出没する場所…。

「ふう…。とうとう着いちゃったね。」

馬車から取り出した大きな布袋を地面に置くと、
そう呟きながら山を見上げるジウさん。

「あっ…その袋は、僕が持ちますよ。」

「ふえっ?」

袋を肩に下げようとしたジウさんに、僕は待ったをかける。

その袋は、見たところ馬車にある荷物の中で一番重そう。

ここはやはり、力自慢を誇る僕が持つべきだろう。

既にジウさんは、龍の絵が描かれた袋を持ってみるみたいだし…。

おまけに、大きな剣を背中に背負ってることだしね。

「悪いねえ。 そんじゃ、よろしく!」

「…お任せを。」

ちなみに僕は、腰に木で出来た刀——つまりは木刀を差している。
やはり万が一の事を考えれば、手ぶらはどうか…というところで、

ケヴィンさんに渡された物だ。

「……。」

ふとやった視線の先では、ナリアッチさんがケヴィンさんに手を引かれるようにして馬車から降りてる姿がある。

「なあ、今更なだけどさ……。本当にあんたも、山に登る気かい？」

「ホッホッホ……心配なさるな。気力と体力ならば、そこらの若い者には負けんよ。」

心配そうに尋ねるケヴィンさんに、強気な言葉を返すナリアッチさん。

その言葉は、ハツタリじゃないだろう。……多分。

ナリアッチさんは、背中に大きなカゴを背負っている。

竹を編み込んで作られた物かと思われるが……結構な大きさで、重さもそれなりにありそう。

中には一体、何が入っているのやら……。

「さてと。目指すは、山の頂上かあ。」

「大して高くもねえ山だが……まあ、奴らのこともあるしな。焦らず、慎重に行くか。」

そう。

目指す先は、この山の頂上。

なぜなら、噂の地の精霊を祀った祠というのが……

山の頂上付近にあるという情報だからだ。

「おゝっし、そんじゃ出発！ みんな、ボクのあとに続け！」

威勢のいい号令と共に、ジウさんが歩き出す。

その浮足立った様子は、まるで遠足にでもやって来たかのような
雰囲気さえ感じさせるが…。

「それじゃ、行きましょうか。」

「ああ…。ともかく二人とも、はぐれないように気を付けろよ。」

「ホッホッホ…。」

ちよっと晴れてきたかと思った空の色は、いつの間にか

また灰色がかっている。

ま、何はともあれ——前に進んでみよう。

<第20話> 【寄り添う果実】

整備された山道はあるものの、僕らはその道を外れ…
道なき道を進んでいく。

目指す先が山の頂上付近である以上、仕方のないことはあるが。

「……。」

先頭を歩くジウさんは、落ちていた木の枝を使い
多少なりか道を切り開くようにしながら進んでいる。

山賊がいるという話なので、あんまりガサガサと音は立てないよう
慎重に……進んでいるようにも見えない。

道を阻むものは、全てぶっ飛ばす！ ——的なムードを感じます。

「あの、ジウさん。」

「…ふえっ？ なくに。」

「あんまりその…ガサガサ音立てながら進むというのは、
どうかと思うんですが。」

「ん…そう？」

僕の申し立てを聞き、ジウさんは首を傾げる。

「ま、いいじゃん。細かいことは気にしない！」

彼女はそう返事をする、すぐにまた正面に向き直った。
そして、歩き始めた。

……

「ま…そう気にすんなって。あんまり慎重になり過ぎると、
日が暮れちまうだろうしな。」

後ろから聞こえたケヴィンさんの声に、僕は振り返る。

「それにやっぱ、警備員の俺らが山賊にビビりっぱなしってのも…
な。」

アイツぐらい強気でいるのが、俺らの正しい姿勢かもしれないぜ。」

「……。」

ふむ…なるほど。

言われてみれば、そんな気がしなくもない。

「んっ？」

基本的に目に映る物は、緑か茶色っぽい色合いのばかりなのだが…。
そんな中に存在する、鮮やかに赤く染まる物体があった。

ビー玉みたいに、丸くて小さくて…。

そして、仲良く数個ずつが寄り添うように実っている。

恐らくは——サクラランボと呼ばれるものと判断していると思う。

「……。」

近所の田波さんって家の庭にはサクランボのなる木があり：初夏の頃には

お裾分けしてもらったり、狩らせてもらったりしてる。

そう。

つまり僕は：ヤツの姿を見かければ、狩らずにはいられない心身となっているわけだ。

そんな言い訳をしつつ、僕は赤い果実を一つ採ってみた。

……

「ん：美味しい。」

肉厚ながらも柔らかく、それでいてジューシー。

これぞサクランボ：って感じですよ。

そういえば姉さんは、いつだったかこれを『世界一美味しい食べ物だ』と高らかに宣言していた気がする。

気持ちは、わからなくもない：かな？

「食べ始めると、止まんないよね。これって。」

「：ですよね。」

いつの間にか、ジウさんにも食べられていた。

あっ——ケヴィンさんも食べてる。

「んっ？」

僕は、空を見上げる。

上空の方から、何か『ゴゴゴゴ』といった妙な音が聞こえたためだ。その音は、飛行機が発するものと似る。

……

「……。」

やがて、その音が段々こちらに近付いてきた——かと思うと。
遙か空高くに浮かぶ、何かの黒い影を確認をする。

シルエットでしか確認出来ないが。

なんだろう…？ 飛行船？

何かしら人工的な雰囲気を感じることは、間違いないのだが。

「帝国の飛行要塞：アイアン・ソニックだ。」

僕と同じように視線を上空にやったケヴィンさんが、静かに呟く。

「心配しなくていいよ。別に、何かしてくるわけじゃないから。」

ジウさんは喋りながら、サ克蘭ボを二つ同時に口に入れる。

「アイアン・ソニック——ですか。」

なんだか知らないけど、カッコよさそうな名前だ。

しかし、要塞というからには…それなりにヤバイ施設でもあるのだろう。

サ克蘭ボ休憩を挟み、体力を回復させた一行。

登山を再開させ……それから、またしばらくの時間が経ち。

「ふう……。どれくらい進んだかな？」

「頂上まではもうちょい、って所だろう。」

ジウさんの疑問に、ケヴィンさんは額の汗を拭いながら答える。

「ってことは、この辺にあるのかな？ その…何だっけ？」

「地の精霊を祀ってたってという祠だろ。　どうなんだ？　ジイさん。」

「

ケヴィンさんに尋ねられると、ナリアッチさんは何処からともなく不思議な模様が描かれた巻物を取り出す。

これまでも何度か見た光景なので、別に僕らは驚かない。

この辺りに伝わるものが様々記録された、古い文献らしいのだが……。その文面は古い時代の文字で書かれているらしく、僕たち警備所メンバーにはさっぱり解読不可能。

「ウム。祠はどうやら、洞窟の中に造られたようだな……。

その出入り口は、石の扉で閉じられているらしいのお。」

巻物に目をやりながら、ナリアッチさんが言う。

「石の扉あ……？」

「つまり、その扉を探せばいいわけだな。」

……

「ひょっとして…あれじゃないですか？」

なんとなく周囲をざっと見渡したところ。

僕は、山肌に不自然な四角い形状の部分があるのを発見した。
雰囲気的には、かなり石で出来た扉っぽい。

「ふええっ？ どこどこ？」

「確かに…それっぽいよな。 行ってみるか？」

<第21話> 【Detect】

そして、目的の場所に到着。

間近で見ると、その石の扉っぽさは…僕の心中では、もう間違いないレベルまで上がっていた。

「そこに、取っ手部分みたいのがありますね。」

「おっ…本当だな。」

僕が指差した先には、半円形状のくぼみ。
恐らくはここに手をかけ、横にガガーツと動かす仕組みかと思われる。

「なんか、あっさり見つかったなあ。 …ちよつとつまんな
い。」

「……。」

ジウさんが何やら不満な様子だが…。
ま、気にしないでおこう。

「そんじゃ、開けてみるか。」

ケヴィンさんが取っ手に手をかける。
そして、石の扉をガガーツと開く。

……

——かと思われたが。

いつまで経っても、その瞬間は訪れない。

「ぬうつ…？　くそっ…動かねえな。」

彼が必死に力を込めている様は、ビシビシ伝わって来るのだが。どうにもこうにも、扉は動く気配を見せない。

「よしっ。　ケヴィン、交代！」

疲れ切った様子のケヴィンさんをグイッと横に払いのけ、ジウさんが扉の前に躍り出る。

……

「ぐ…ぐぐぐッ。」

顔を赤く染め、必死の形相を見せるジウさん。

「俺に無理だったんだから、お前に出来るワケねえだろ。」

「うむむむ…。　なんつー生意気な扉。」

扉に、生意気も控え目もないだろう——というのはさておき。ジウさんの力も、ヤツには通用しない様子だ。

「ほれ…頼むぞ。　残るは、お前さんしかおらん。」

「……。」

ナリアッチさんの言葉に押され、今度は僕が扉の前に立つ。

そして、取っ手に手をかけると——

”オマエか…。”

……

「ふええっ…開いちゃったよ!」

扉を完全に開けきると、ジウさんから感嘆の声が上がった。

「すげえな、お前。　なんか全然、力入れてねえって感じだったぞ？」

「……。」

感じ——ではない。

僕はほとんど、力を入れる必要はなかった。

何やら、頭の奥の方に変な声が響いたと思ったら…。

石の扉は、その見た目の重厚感からは想像も付かないほどスルスルと横に移動してくれたのだ。

「うわっ…!　なんだこれ!?!」

真っ先に洞窟に足を踏み入れたジウさんが、叫び声を上げる。

その視線は、足元…地面の方に注がれているようだけど。

「…骨?」

そこにあっただのは、何か動物の頭蓋骨のような物体。

それがなんと…洞窟の床一面に、敷き詰められるように置かれている。

「まったく、不気味だな。　んっ…ありゃあ何だ?」

続いて足を踏み入れたケヴィンさん。

その視線は、洞窟の奥の方へと注がれている模様。

僕も洞窟の中に足を踏み入れ、ケヴィンさんの視線の先を追う。すると、そこにあったのは――

「……。」

銅像……？　だろうか。

いかにも強そうな雰囲気を感じる、筋肉隆々な人間をかたどった銅像。

腕が四本も生えているところを見ると……実在の人間がモデルってわけじゃなさそうだね。

洞窟の広さは、だいたい四畳半程度といったところ。

その狭いスペースにあるのは、銅像のある祭壇らしきものと……床に敷き詰められた、動物の頭蓋骨。　あとは――

「うわわわっ!？」

ジウさんの悲鳴と共に、何かがバサバサと音を立てながら洞窟の外へと飛び出していった。

「なぐんだ……コウモリか。」

外へ飛び出た羽の生えてる生物は、確かにコウモリっぽい姿。姿を確認出来たと思ったら、もういずこかへ消えてしまった様子。

「ところでジイさん、バラカの骨とかいうのは……。」

「ああ、これじゃよ。」

ナリアッチさんは、床に置かれている頭蓋骨を一つ手に取る。

「……。」

片手では持ち切れない程の大きさ。
見た感じ、なんとなく爬虫類っぽい気がするが…。
果たして生前は、どんな姿をしていたのやら。

<第22話> 【ツイてねえ】

全員が洞窟の外に出たのを確認すると、僕は祠の石の扉を閉める。これまた、開けた時と同様：驚く程すんなりと作業は終わった。なんかほとんど、扉が勝手に閉まってくれたという印象だ。

「さて、目的は果たしたことだし：さっさと山を下りるか。」
「そうしましょうか。」

ちなみに目的のブツであるバラカとやらの頭蓋骨は、ナリアッチさんが背負うカゴの中に入れられた。ただし、骨が結構な大きさのためか：カゴの蓋がちゃんと閉められない状態のようです。

「ちょっと待って。 ねえ、アレ：なんだろう？」

何かに気付いたように、ジウさんが崖下に見える景色の一部分を指差す。

……

「煙：：か？」

木々が密集し、緑色に染まっている地帯。

そこから上がってる、灰色でモクモクしたものは：

確かに、煙のように思える。

「もしかして、山賊の奴らが…？」

「…かもしれねえな。」

ジウさんとケヴィンさんから、緊迫したムードを感じる。

「行ってみよう！」

「お…おい、ジウ！？ 待てっ！」

弾かれるように駆け出したジウさんに、ケヴィンさんが制止の声を上げたが…。

ジウさんは勢いそのままに、山の斜面を下っていく。

何度か見失いかけたものの、僕らはどうにか

ジウさんの元まで辿り着いた。

彼女は体を屈め、茂みに身を隠すようにしながら

何かの様子を観察しているように見える。

「この野郎！ だから、お前って奴はな…。」

「シーッ…。大きな声出さないでよ！」

…

「……。」

向こうに見える景色。

モクモクと立ち昇る煙と共に…何人かの人影が確認出来る。

遠目からなので、はっきりとはわからないが…。

その肌の色や顔つき…全体の雰囲気から察するに。

彼らが『ゴ布林』であることは、なんとなく推測出来る。

「あそこが…山賊団のアジトってわけか？」

鋭い目つきをし、呟くケヴィンさん。

焚き火を囲むようにして、何か会話でもしている様子の
数人のゴ布林達。

その近くには、テントのような物が三つ見受けられる。

「……。」

山賊団は、全部で六人という話だから…。

まあ、居住スペースとしては充分——と言えるかもしれない。

「おい、ジウ…早まった真似はすんなよ。」

「わかってる。」

ヒソヒソ声で話す、ジウさんとケヴィンさん。

「……。」

ゴ布林達の様子を見て、思うこと。

ベントさんもそうだったけど…向こうに見える三人も、
見たところ、人間に比べ体格が小柄な方に感じる。

ブルルルルル

「んっ…?」「ふえっ?」

何処かで聞いたような音がすぐ近くから聞こえ、
僕らは一斉に自分たちの背後に目をやった。

そこにいたのは…

——Side ケヴィン・ハワード——

身構え、腰に差した剣を抜こうとした瞬間。

ヤツから放たれる衝撃波を喰らい、俺たちの体は吹き飛ばされた。

「ギイツ…!？」

「な…なんダ、コイツらは！」

「ちいっ…!」

俺が体を起こした場所は、山賊共が焚き火を囲んでいたすぐ近く。
他の奴らは…どうやら、少し違う方向に吹き飛ばされたようだ。

「コイツ、剣を持ってやがるぞ！」

「ギイツ！」

山賊共は、棍棒を手にとると一斉に襲いかかって来た。

…

「くそっ！ ツイてねえなあ…ったく。」

腕と背中に一発ずつ喰らったものの、奴らと僅かに距離はとれた。
俺はすぐさま鞘から剣を抜き、奴らと向かい合う。

「おらっ！」

一人に向かって剣を振り下ろしたが、素早くバックステップをされ避けられてしまう。

ガンッ　ゴオンッ

隙を狙われ他の二人から攻撃されるが、なんとか盾で防いだ。

「むっ…!？」

「チッ、他にも仲間がいやがッタか！」

どうやら、ジウとスギヤマが駆け付けてくれたようだ。

奴らは動揺のためか、視点が定まらずにあっちこっちへ目をやっている。

「グアウッ！」

「フン…隙見せやがって。」

死角から素早く近付き、山賊の一人に一太刀を浴びせた。

手応えは充分…。

斬られた傷の部分に手をやりながら、山賊はその場でガクッと膝を着いた。

「こ、この野郎！　覚悟しやが——…ッ!？」

俺に向かい、もう一人の山賊が襲いかかって来たと思った瞬間。

横から飛び出してきたスギヤマが、奴のどてっ腹にパンチを入れていた。

更に、首元に手刀を叩きこまれると…奴は目の焦点を失い、その場に崩れ落ちてしまう。

「……。」

軽く叩いたようにしか見えなかったが……。あれぐらいで、人が気絶するもんか？

「ン…ッ。うるッさいわねえ。」

「何を騒いデやがるかと思ッたら…人間か。」

<第23話> 【剣術】

――Side 杉山榛名――

テントから姿を現したのは、ゴブリンと思われる二人の姿。

一人は、日本刀のような武器を持った鋭い目つきのゴブリン。
ベントさんを含め、これまで見てきたゴブリン達も
結構な目の鋭さだったけれど……それを明らかに上回る雰囲気。

そして、もう一人は…。

かなり豊満な胸をしている様子から、性別は女性であると思うのだが。

その体格と筋肉の量は、これまで見てきたゴブリン達の中でも
ダントツに凄そうだった。

「タダの通りすがり…ッテわけでもなさそうだな。
オマエら、オレ達を潰しに来タのか？」

刀を持ったゴブリンが、淡々とした口調で喋る。
女性の方かというと…気怠そうにテントの中で座ったまま。

「コイツら、手強いぞ！ ゾリル：頼んだぜ。」
焚き火を囲んでいたメンバーの一人が、刀を持つゴブリンに駆け寄り
焦ったような口調で言う。

ギインッ

――刹那。

ゾリルと呼ばれたゴブリンの刀が、ケヴィンさんの剣とぶつかった。
数mの距離をまるで一瞬に失くしてしまったかのような俊敏な動き
…。
攻撃を防いだケヴィンさんも、動揺を隠せない様子だ。

ギイン ギインッ ギンッ

「……。」

素早く…そして縦横無尽に繰り出される、ゾリルの斬撃。
剣と盾を巧みに使い、ケヴィンさんは攻撃を防ぐ。

「よそ見してるヒマあんのか!？」

「…ッ！」

二人の攻防に目を奪われていた隙を狙われ、ゴブリンが襲いかかっ
てきた。

棍棒による攻撃を左腕でガードする。

「ウッ…グッ！」

「……。」

僕のハイキックを喰らい、その場に崩れ落ちるゴブリン。これだけ身長差があれば、打ち込む労力や生じる隙はミドルでもハイでもほとんど変わらない。

となれば当然、一撃で仕留めやすいハイキックで：

——と、そんなことを考えてる場合じゃない。

僕はすぐさま、ケヴィンさんの方に視線を移した。

「ぐっ：わあああっ！」

「ケヴィンっ！！」

……

二人の叫び声が聞こえた———と思ったら。

血しぶきと共に、ケヴィンさんが急斜面を

転がり落ちていく様を目撃した。

「貴様あっ！」

直後、ジウさんは怒りの形相を見せながら、ゾリルに向かい剣を振るう。

しかしゾリルは垂直にジャンプして、その攻撃をなんなくといった様子でかわした。

「……。」

一瞬だけ躊躇したのち、僕はゾリルに向かって走り出す。

奴はジウさんに気をとられており、僕に背中を向けている状態。

「えっ…?」

脇腹に感じる、鋭い痛み。

それが、ゾリルに刀で刺されたため——と気付いたのは、数秒後。

「ハルナくん!?!」

「……。」

どうやら、僕に背中を向けたままで…自分の後ろに向かって刀を突き出してきたらしい。

視界に入らずとも、気配を察知されてしまった……ってこと?

……

「……。」

ゾリルと向かい合う。

僕の血で赤く染まった刀を構えつつ、彼は僕に対しその鋭い視線を浴びせていた。

僕は腰に差していた木刀を抜き、構える。

剣術などというものには、まったく覚えが無いが…。

まあ真剣に対して、素手で闘うよりはマシだろう。

「木刀か…。 ナメられタものダな。」

「……。」

——Side ジウ・リーベンス——

「グッ…！ グウウッ…！」

苦しそうな声。

その声を出しているのは…ゾリルとか呼ばれてた、山賊の一味。

目の前で繰り広げられてる光景に、ボクは目を奪われていた。

その光景は…。

いつか見た、『あの人』の戦いぶりを思い出させてくれるもので。

…

襲いくる攻撃を、時には受け止め…時には受け流し。

そして狙い定めたように、確実に反撃を加えていく。

攻撃も防御も、いや…その動作一つ一つが、正に流れるような動き。

「……。」

ハルナくん。

確か、剣を握ったことなんて一度も無い——って言ってたよね？

「グッ！ しまッ…。」

「……。」

ゾリルの持っていた刀が、ハルナくんの一撃によって弾き飛ばされ崖下の方へと落ちていった。

戸惑うゾリルに向かい、木刀の剣先を突き付けるハルナくん。

……

「えっ…!？」

その瞬間、突然『それ』は起こった。

ハルナくんが突然、その場でガックリと膝を落としたのだ。

よく見れば、ハルナくんの体はブルブルと小刻みに震え…
気のせいかな、彼の足元の地面まで震えているように見える。

「アンタ…こんなガキ一人に、何を手間取ッテンだい？」

そんな言葉と共に、榛名くんの方を睨んでいるのは…

さっきからテントの中でずっと座ったままだった、あの女ゴブリン。

「うわ…っ。」

大きい。

基本、人間より小柄な体つきをしてるっていうゴブリンにしては、
思わず声が出てしまうほどの体の大きさだった。

「あんたが、もしかして…モンリー？」

モンリーという名前は、なんとなく女の人っぽい気がしてた。

そして、今こうして姿を目の当たりにして…。

この人が山賊のボスである——と、ボクは直感した。

「さテ…。久々に、暴れテみようかねえ。」

ボクの言葉を気にする素振りも見せず、モンリーはそう呟くと…

テントの中から、何かを取り出した。

それは…巨大な木槌。

何十キロとか平気でありそうなソレを軽々と持ち上げ、柄の底をドンッと地面に着けた。

「……。」

ボクは無意識の内に、ハルナくんの手を引いて自分の傍へ引き寄せた。

なんだかちよっと、いつもと違う雰囲気な気がするけど…。
でもやっぱり、彼が近くにいるとくれると思うだけで――
ボクはなんかホッとした気持ちになった。

<第24話> 【Unknown】

「逃げ…よっか？ ハルナくん。」
モンリーと睨み合う彼に向かって、小さくそう囁いた。

目の前にいるのが、憎むべき山賊団のボス…ということはわかってるけど。

そんな奴に背中を向けるってのも、なんだか凄く悔しいけど。
でも…。

「あの、ジウさん。」

「…なに？」

「ケヴィンさんの具合が心配です。様子を見に行ってくれませんか？」

「…ふえっ？」

…

確かに、ケヴィン…どうなったんだろう？

あれぐらいで死ぬような奴じゃない——とは思っけれど、
やっぱり心配だよね。

「で、でも…。」

「お願いします。こっちは、大丈夫ですから。」

ボクの方には目をやらず、ずっとモンリーと睨み合ったままでハルナくんは喋ってる。

モンリーの方は……何を考えているのか、まだ動く気配はない。

「お願いします。」

……

「…わかったよ。絶対、すぐに戻って来るからね!」

ボクは大声でそう言い残すと、全速力で走り出した。

ケヴィンが転げ落ちてったのは、確か…あっちの方だったかな？

——Side ???——

「仲間を逃がしテおいテ、自分一人だけデ立ち向かう…か。大した自信じゃないか。」

「……。」

「それトも…犠牲になるのは、自分一人だけにしトこうツテハラかい?」

モンリーの言葉を受けても、榛名の特に反応を示さない。

木刀を構え、ジッとモンリーの方に視線をやったまま、微動だにしない。

「…まあいい。それじゃ、始めようか？」

モンリーが木槌を持ち上げ、振りかぶる。

その武器の巨大さのため、途端にモンリーの全身は木槌が創り出す影で覆われた。

ブウンッ

木槌が振り回され、大きな風切り音が周囲に鳴り響く。

榛名はバックステップをし、攻撃をかわしていた。

ブウンッ ブウンッ

ブウンッ ブウンッ ブウンッ

勢いを止めることなく、木槌を振り回しながら

榛名を追いかけて回すモンリー。

時折体を掠めるものの、榛名はその連続攻撃を巧みに避けている。

「ハハッ！ なかなか素早しッこいねえ。 デカい体してるクセに、
ネズミみたいにチョロチョロしやがッテ…。」

口元に笑みを見せながら、モンリーは見下したような口調で言う。

「ダが——これならどうかな？」

「…ッ！」

……

モンリーは攻撃を止め、木槌を肩の上に担ぐと武器を持っているのは別の方の手——左の手の平を榛名のいる方向に突き出した。

その途端、榛名の身に起こる異変。

全身がまるで鉛のように重たくなり、思うように身動きが取れない。

（これ……。精霊…術…？）

精霊術——。

それは魔力を媒介とし、別世界に存在する精霊の力を自分の意のままに発動させるというもの。

一定以上の魔力・帯魔力、そして精霊を引き寄せる力——
ゆくりよく誘力と呼ばれるものが、発動には必要不可欠。

（地の精霊……。）

無論のこと、榛名には前述のような知識はない。

『榛名には』——だが。

（対象となる物質や空間に、一時的に多大な重力をかけるタイプ……）

「…覚悟はいいかい？」

言葉と共に、モンリーが木槌を空高く振り上げる。

そして、次の瞬間

バギイッ

攻撃を防ぐため、頭上にかざした木刀が折られる。
そして、攻撃の勢いは止むことなく――
榛名の右肩に、衝撃と激痛が走る結果となった。

「アララ……。頭、狙ッタンダけドねえ。」

よく咄嗟にかわせタもンダよ。」

「……。」

「デも…右腕はもう、使いモノにゃならないようダね。」

モンリーが向けた視線の先には、ダランと力無く肩から垂れ下がる
榛名の右腕があった。

「痛いかい？ 安心しな…すぐにトドメ刺シテあげるからさ。」

「……。」

モンリーが手の平を突き出すと、榛名の体に再び
多大な重力がかけられる。

その途端、榛名はガックリとその場に膝を落とした。

（今の状況…。 打破…するためには…。）

モンリーが木槌を振り上げる。

（反重力物質…生成…。）

……

「え…ッ？」

モンリーの顔に浮かぶ、驚愕の表情。

振り下ろされた木槌の先に、少年の姿はなく――
気付けば彼は、モンリーのすぐ眼前まで接近していた。

……

ほぼノーモーションで繰り出された左手のパンチを
間一髪のところでは避ける。

しかし、その直後――脇腹に鈍い衝撃が走る。

「な…グッ！」

（バカなッ…！ 右…腕？）

グラつく意識の中、モンリーはその事実には愕然とする。
自分の目に映ったのは…。

確かに、少年の右拳が自分の腹にめり込む場面。

攻撃を受け吹き飛ばされるモンリーに、榛名はすぐさま間合いを詰めた。

「ヒッ…！」

まるで、未知の生物にでも襲われてるような恐怖感。
地面に尻餅を付いた体勢のまま、モンリーは次の行動に移れない。
そんな彼女に対し、榛名は――

ゴンッ

服の襟を掴み、自分の額を相手の額へとぶつける。
骨と骨がぶつかり合う鈍い音が、互いの鼓膜に響き渡った。

「グッ…！」

額から僅かに出血をし、倒れ込むモンリー。
その意識は、完全に失われている様子だ。

「……。」

榛名の体が、グラリと揺れる。

……

その場に座り込む。
目を閉じる。

そして、静かに…彼も意識を失った。

<第25話> 【巡り逢い、夢の中】

――Side ケヴィン・ハワード――

「こりゃあ、一体……」

眼前に広がる光景を見て、俺は足を止める。

転がり落ちてった俺の元にやって来たのは、あのじいさん。

で、カゴの中から小瓶を取り出して……なんか塗り薬みたいなものを俺が負った傷に塗り込んでくれた。

すると――あっという間に血が止まったんだから驚きだ。

「ハルナくん！ 大丈夫！？」

で、その後にジウも駆けつけてくれたみたいで……。

合流した俺たちは、急いでこの場所まで戻って来たわけだが。

「ハルナくんってば！」

「はい。……大丈夫ですから。そんなに騒がないで下さい。」

スギヤマのやつは、テントに背中を預けるようにして地べたに座っていた。

横っ腹の辺りから出血…。　どうやら怪我してるみたいだ。

「おい、じいさん。」

「ウム…任せておけ。」

スギヤマのことをじいさんに任せると、俺とジウは倒れている山賊共を縄で縛り上げる作業に取り掛かった。一人、二人、三人…四人と。

「これで全員…か？」

すげえガタイをした女ゴブリンを縛り上げた後、誰に言うでもなく俺は呟いた。

「…アイツが、いないよね。」

「ああ。」

俺に傷を負わせ、坂を転げ落ちさせてくれた張本人。ゾリルとか呼ばれていたあの野郎の姿が、何処にも見えない。

ジウの話じゃ、スギヤマのやつがボコボコに打ちのめしてた…って聞いているんだが。

…逃げられたのか？

「…まあいい。何にせよ、俺達だけじゃコイツらを全員連れてくつてのはキツそうだからな…。」

一旦山を下りて、応援を呼ぶことにしようぜ。」

「ん…そうしょっか。」

目覚めてから、どれぐらいが経っただろう。

耳に入ってくるのは、『カチ…カチ…』という時計の針の音。

暗闇の中、ランプに照らされてオレンジ色を帯びた景色を眺める。

頭は…正直、かなりボーッとしている。

独特の匂い。

消毒液とか…そういったものを連想させる。

「……。」

五感から得られる、色んな情報から考えると――。

どうやら僕は今、診療所のベッドで体を寝かしている状態のようだ。

「お目覚めになりましたか。」

頭の中にやけに響き渡る声が、近くから聞こえた。

とても、馴染み深い声。

声を聞いた瞬間、頭の中にはパツとある人物の姿が描かれた。

「…秀輝くん？」

ランプの灯りがかろうじて届く範囲に立つ、その人物。

足元から上は、暗闇でよく見えないけど…。

たとえ上半身が見えずとも、それが誰だかの判別は付いた。

「山賊達は捕えられ、フォーマスの王都まで連行されたようです。」

「えっ…？」

「まあ、そういうわけですから。安心して、体を休めていて下さい。」

…

その人物が、静かに僕の傍へと歩み寄る。

それに伴い、足元しか見えなかった彼の姿が…なんとか首元ぐらいまでは見えるようになった。

「あのさ、秀輝くん。」

「はい。」

「ん」と…。

…

何から聞いていけばいいんだろ。

質問してみたいことが、パツと思ひ浮かぶだけでも十は超えてしまう。

それゆえ僕の頭は——ただいま、少々のパニック状態。

「榛名さん。」

「ん…なに？」

「残念ですが、私とあなたが巡り逢うことになるのは…こちらの世界では、もう少し先になりそうです。」

その言葉が言い終わるかどうかわからない時。

秀輝くんの姿が――全身が、なぜかキラキラと輝き出した。そして、その輪郭が…徐々にぼやけていく。

「ですから、これだけは伝えておきます。」

なんだか…。

心の奥の方が、

「私は決して、あなたを裏切らない。」

とても苦しくて…

僕は――

「あっ…ハルナさん？　目が覚めたんですか!？」

……

ランプの灯りが、一つ増えたな…と思ったら。

それは、手にランプを持ったミューレさんが現れたためだった。

「よかったあ…。」

安堵のため息をつきながら、ミューレさんはベッドの側に置かれている椅子に座る。

「あの…傷の具合は、どうですか？」

「……。」

ミューレさんに尋ねられ、意識を全身に張り巡らせてみる。すると――。

体のあちこちから、悲鳴が聞こえてくる結果となってしまった。

「だ、大丈夫ですか!？」

「…なんとか。」

なんだろう…これ。

まるで全身が筋肉痛という感じで、思うように体が動かせない。そのため、全身を小刻みに震わせる奇妙なダンスをミューレさんに披露するハメとなったわけだが。

「……。」

筋肉痛――という感じじゃない痛みもあるな。

左の脇腹から伝わってくる、ジンとくる鋭い痛み。

これは…そうか。

確か、ゾリルとかいうゴブリンにやられて…。

「お医者様に伺ったところ、傷は決して浅いわけじゃありませんが…内臓には、ほとんどダメージはないだろうという話です。」

脇腹を押さえる僕に心配そうな視線を向けつつ、ミューレさんが言う。

「とりあえず明日一日は、こちらの診療所でゆっくり休んで下さい。ケヴィンも、そうするように言われたみたいです。」

「……。」

ケヴィンさんも……。ま、そうだね。

結構、ズバツとやられていた感じだったもんね。

「ハルナさん……。」

「はい。」

「あんまり、無茶しないで下さいね。」

……

ミューレさんが、僕の手をそっと握ってきた。とても細くて……ちよつとだけ温かい手。

「……。」

彼女の手の温もりを感じ——そして。

これまでに何度も疑問を抱き、心の中で呟いた言葉。それがまた、自然と頭に浮かんできてしまった。

『ここ』は本当に……夢の中の世界なんだろうか？

【キャラクター紹介／第1章】

※注意…第1章（第1話～第25話）における物語の内容が含まれています。

杉山 榛名

本編の主人公。

伯母の片桐まりやの家で暮らし、桜雪高等学校の一年生として生活を送っていたが、ある日突然にオルワデイスで目を覚まし、様々な思惑を抱きつつ奇妙な世界を見て回っている。

ベント

テドラ山の小屋に住むゴブリン。

オルワデイスで目覚めた榛名が最初に出会った人物であり、ドドマに襲われていた榛名を助け、その後、自分の住む小屋へと招待した。

ジウ・リーベンス

フォーマス第七警備所に務める警備員。

ベントの小屋で榛名と出会い、榛名をリシャーナの町まで案内する。

その後、スサンボ山探索のメンバーに榛名を任命した。

ミューレ・ハルクル

フォーマス第七警備所に務める警備員。

理知的で、柔らかな物腰の話し方をする。

体力仕事はあまり得意ではないらしく、主に事務的な仕事を担当している。

ケヴィン・ハワード

フォーマス第七警備所に務める警備員。

ジウにスサンボ山探索のメンバーとして任命され、榛名とも行動を共にする。

ソルベン・セグウェイ

レノン村からリシャーナの町へとやって来た男。

スサンボ山を越える道中に山賊団に襲われ、全身を滅多打ちにされる。

命からがら逃げきったものの、山賊に『大事な物』を奪われたら

しい。

ダルコ・ナリアツチ

ギータタルクに住む薬師。

ある患者の病気を治すための薬の材料『バラカの骨』を手に入れるため、

第七警備所の面々にスサンボ山への同行を求めた。

ゾリル

モンリー山賊団の一人。

刀を武器とし、その腕前には他の山賊たちも信頼を寄せている。

モンリー

モンリー山賊団の頭。

地の精霊術の使い手であり、重力を変化させることによって相手の動きを封じることが可能。

＜第26話＞ 【かざぐるま】

「はあ…。」

窓から射し込む、ポカポカ暖かい陽光。
窓から流れ来る、爽やかで涼しげな風。
そして、チュンチュンうるさ——微笑ましい小鳥の鳴き声。

…

目を閉じ、そんなものだけを感じていれば。

『ここ』はもう、現実と何も変わりなく思えるんだが。

「——にしても、ハルくん。昨日は大活躍だったって話じゃない。」

「……。」

僕のすぐ傍らで、椅子に座っている人物。

座りつつ、持ってきた風呂敷包みを開こうとしている人物。

彼女の名は…ガラナ・フランクフルト。

「山賊団のボスって、霊術士だったんでしょ？」

それを一人で倒しちゃうなんて…ガラナ、感心しちゃうぞっ。」

「……。」

その、やけに美味しそうな名前をした彼女なのだが。
彼女の存在こそ、僕に『ここ』が現実ではないことを示してる、
現時点で一番の材料だった。

「ハイ、これ。」

「…？」

僕の考えなど露知らない様子の彼女から、ある物が差し出された。
細長い棒に、なんだか花のような飾りが付いた…。
いわゆる、風車と呼ばれる物体だ。

……

受け取ろうと思った瞬間。

窓から風が吹き抜け、風車は回転。

「みゆふふ…綺麗でしょ？」

停止時の状態では、赤と白の羽。

それが回転すると…なんと、鮮やかなピンク色を作り出している。

「ピンクはね、聖母チアス様を象徴する色なの。

だから、これをここに置いとけば…っと。」

棚の上にある、小さな花が活けられた花瓶。

その花瓶の中に、ガラナさんは風車を差し込んだ。

「ハルくんはもう、一生安泰ってわけだね。」

「…なるほど。」

聖母チアス様…というのは。

確か、癒しの神とも呼ばれる神様のことだよね。

「そしてこっちは…リゴットじいちゃんからの差し入れ。」

風車に続き、ガラナさんが包みの中から何かを取り出す。

「ジャンっ！ 特製テリヤキサンドだあっ！」

姿を現した物は…。

白い紙に包まれ、中から四角いパンらしき物が飛び出てる物体。

「ハルくんは体おつきいから、大き目なこっちね。」

二つあるテリヤキサンドから、一つが僕に手渡される。

「……。」

もう一つは——あっ…そうか。

確かケヴィンさんも、この診療所にいるんだよね。

…

「あの…ガラナさん。一つお尋ねしたいんですが。」

「ややつ？ な〜に？」

「風車は…ケヴィンさんの分、無いんですか？」

ちよつと気になったので、尋ねてみた。

包みの中に見える物は、もうテリヤキサンドと思われる物体一つだけしか確認出来ないのだから。

「みゆふふ。無いんだなあー、これが。」

「…なぜ？」

「一個しか買ってこなかったからっ！」

「――というわけでして。」

「あのオトボケ野郎……。俺のこと、忘れてやがったな。」

昼食が済んですぐの頃、ケヴィンさんが僕のを訪ねて来てくれた。どうやら彼……怪我の方は、もうほとんど心配なさそうな様子で。

そういえば、ナリアッチさんが山で葉を塗ってくれたとかいう話も聞いているけど……。

怪我の回復具合は、その影響もあつてのことなのか。

「そういや、スギヤマ。昨日の夜なんだがな……第六部隊の奴から、気になる情報を聞いたぜ。」

「……。」

このリシャーナの町には、第六と第七の二つの部隊があるらしく……。昨日――山賊達を山から連行する際には、第六部隊の人達にも協力してもらったと聞いている。

「ま、確かな情報じゃねえんだが……。なんでもガライブっていう村に、

つい最近、ニッポン人がやって来たらしい。」

「……えっ?」

日本……人……?

ケヴィンさんの口から飛び出たその単語には、

反応せずにいらなかった。

「いや待てよ。だから、確かな情報じゃねえんだよ。何しろ、情報をくれた奴ってのが…アイツだからな。」

「……。」

アイツとやらが、何者なのかは知らないけど…。

どうやら、ケヴィンさんからはあまり信頼されていない人物らしい。

「お二人さん…ちょっといいかな？」

扉を開け、病室に入って来た人物。

その声と…そして全身に包帯を巻いた姿は、憶えがあった。

「誰だい？ あんた。」

「俺は、ソルベン。数日前、山賊団に襲われてな…

——で、このザマというわけなんだが。」

ケヴィンさんが尋ねると、ソルベンさんは自嘲するような笑みを浮かべながら答えた。

「あんたらが、山賊団を退治してくれたんだってな。

感謝するよ…。ありがとう。」

「ん…。あ、ああ。」

感謝の意を示されたためか、ケヴィンさんは照れ臭そうに頬を掻く。

……

「そういえば、ソルベンさん。確かあなた…山賊に大事な物を奪われたって「ああ。」

僕の言葉を遮るように相槌を打つと、ソルベンさんは

ズボンのポケットから何かを取り出した。

それは、コイン……。いや……メダル？

とにかくにも、丸くて金属的な雰囲気放つ物体。

「兵士さん達が奪われた荷物をチェックしてるとこへ

立ち会わせてもらってな。で……俺が持っていた袋があったんだ。」

ソルベンさんは喋りながら、僕の手の平の上にメダルを置いた。

「で……袋の中に入れておいたソイツも、無事に見つかったってわけだ。」

鈍い茶色の光沢を持つそのメダルには、何やら

動物らしきものが描かれている。

頭は鳥のように見えるんだけど……四本足で、尻尾もあって……

「大事な物ってのは、これのことなのか？」

「ああ。」

ケヴィンさんに尋ねられ、頷くソルベンさん。

「これは、息子の形見なんだ。」

彼はそう言うと、僕の手の平に置いたメダルを再び自分の手に戻す。

「……。」

ソルベンさんは、懐かしそうな——そして、少し悲しそうな目でメダルを見つめていた。

<第27話> 【道化師と白ウサギ】

太陽も沈みかけ、空がオレンジ色に染まった頃。
僕は、診療所内にある公園をブラブラと散策していたのだが…。

「…んっ？」

公園の一角に、十数人ほどの人が寄り集まっている。

そして、その人たちの視線の中心には…。

遠目からでも『あれっ？』と思わせるような容貌をした人物の姿。

「……。」

近くまでやって来た。

どうやらその人物の顔には、赤・白・緑色のペイントが
されているようで：地肌の色が露わになった部分が、全く見当たらない。

いや——まさかあれが、彼の地肌の色なのか？
この世界ならば、有り得ない話ではないぞ。

「あら、スギヤマくんじゃない。 やっほー。」
「…どうも。」

群集の中から、クルツと僕の方に顔を向け、声をかけてきた人物。金髪でショートカットで…そして、ナース服の女性。名前は確か、シーンさんとかいったか。

「あの…シーンさん。あの人は、一体どちら様で？」

三色の顔した謎の男に視線をやりつつ、尋ねてみる。

「んかね、旅の道化師さんらしいよ。」

「道化師…。」

道化師というと…アレか。

色々と、奇妙奇天烈な芸を繰り広げる人のことか。

ピエロとも呼ばれる人のことか。

…

「……。」

なるほど…。

道理でさっきから、様々な色合いのボールをお手玉してるわけだ。ああいうのは、えっと…ジャグリング？　っていうんだっけ。

「さアさ、お立会いの皆さん。これをご覧下さい！」

黒い鞆の中に、ジャグリングしていた玉を入れ――

その代わりとばかりに、道化師さんが鞆から取り出したのは…。

「…ウサギ？」

それは小さくて、白くて、モコモコしていて…。

恐らくは、ウサギと思われる物体。

ピクリとも動かない様子からすると…ぬいぐるみのように見えるが。

「この子は昼寝が大大だゝい好きで、今もこうしてグッスリマツタリお休み中ってわけなんだけど…。」

ハスキーな声と芝居がかった動作を交えつつ、ウサギのぬいぐるみを地面に横たえさせる道化師さん。

「今からワタシが、この子を叩き起こしちゃいます。」

……

ペシペシと、ぬいぐるみの頬を軽く叩く。

すると――

ぬいぐるみは固く閉じられていた瞼を開け、真っ赤な両の眼まなこを見せる。

「……。」

ぬいぐるみではなかったのか…？

そんな疑問も束の間――僕を更なる驚愕が待ち受けていた。

「ふあゝああ…。 んぬうつ？」

ヤツは、言葉を発した。

いや…それだけじゃない。

ヤツはなんと、その場に二本足で立ち上がったのだ。

「おはよう、ピート。 よく眠れたかい？」

「んんん…っ。」

今の時間帯では、『こんにちは』か『こんばんわ』だろう。

――などという心の声も、眠そうに目を擦るウサギの実に人間臭い仕草に掻き消される。

「とりあえず、皆さんに挨拶しなさい。」

「んぬ…わかった。」

……

「オイラの名は、ピート。 さすらいの白ウサギさ。」

可愛らしい声と容姿のわりに、ちよつと渋めな自己紹介。

——でも、そういうギャップに惹かれるんだよね……人間ってやつは。

「きゃー！ かわいーいー♪」

群集の中から、幼い少女がウサギ…ピートに向かって手を伸ばす。

「フン！ オマエのほうが、よっぽど可愛いぜ。」

身を翻し、その手をサラリとかわすピート。

かわしながら、やけにキザな台詞も言ってくれた。

「ねえウサギさん…どうしてしゃべれるの？」

そう尋ねるのは、少女と同じ年ぐらいの少年。

「ウサギでも、頑張ればしゃべれるようになんだよ。」

少年の疑問に、クールに返答するピート。

「耳なげえなく！ おまえ。」

そう言いながらピートの長い耳を触るのは、また別の少年。

「ウサギなんだから、あたりめえだ！ もうちょい別のところに驚いてくれねえかな。」

その後、『これだからガキは嫌いなんだ…』と
小さく呟いたようにも思えたが。
そこは——うん。無理に追求することはないよね。

<第28話> 【決断】

ここは、待機室と呼ばれる部屋。
待機室というぐらいだから：待機するために造られたんだろう。
そんなことを思いながら、外の風景を眺めていた。

「……。」

今日も、天気は晴れ。
そして――暑い。

「ケヴィンさん。」

「おう：なんだ？」

「暑いですね。」

現在、待機室内で待機しているメンバーは：僕とケヴィンさん。
どちらも、つい数時間ほど前に診療所を退院したばかりの二人。

「あんまり、暑そうには見えないけどな：お前。」

「そうですか？」

見えなくとも、暑いものは暑い。

「二人とも、ご苦労さん。 はい：どうぞ。」
「……。」

警備所の奥から姿を現したのは、リゴットさん。
お盆の上に、何やら液体が入ったコップを乗せての登場だった。

……

目の前に置かれた、その液体を飲んでみた。
冷たい…。

恐らくは、ごくごく普通の水かと思われる。

「それにしても、凄いいねえ…ハルナくん。　今や、町中の噂だよ。」
「何が…ですか？」

「山賊退治のことに決まってるんだろ。」

リゴットさんに尋ねたというのに、答えてくれたのはケヴィンさん。

「そういえば、山賊団のボスは霊術士だったと聞いてただけど…
その話、本当だったのかい？」

「…ええ。　本当ですよ。」

霊術士。

それは、精霊術を使うことの出来る者の通称。

精霊術とは、魔力を媒介にして別世界にいる精霊の力を
こちらの世界で使わしてもらう…といった感じのもの。
いわゆる、魔法みたいなものと考えてよさそうです。

「……。」

あれ…？

いつの間に、こんな知識を得ていたんだろう。

休憩室で読んだ本の中に載ってた——のかな？
確かに、それらしい記述があったようにには憶えてるけど…。

「あの、霊術士っていうのは…やっぱり、珍しいものなんですか？
ちょっと気になったので、どちらに問うでもなく聞いてみた。」

「まあ…そうだろうね。」

「そこら辺にポンポンいるようじゃ、安心して眠れなさそうだしな。」
リゴットさんに続き、ケヴィンさんも口を開く。

「……。」

まあ、ケヴィンさんの言う通りかな。
そう簡単に、そこら辺の人に魔法チックなものを使われては…
ちよっとしたきっかけで、もうなんか——大変な事態に陥ることだろう。

「おっす！ 儲かってまっか？」

「……。」

威勢のいい声と共に、ピョンツと警備所内へ足を踏み入れてきたのは…。

ジウさんと同じく、褐色の肌をした女性。

前髪がやけに長く…片目の視界をかなり奪っているように見えるが。
まあこういう髪型の人、現実にもいるからね。

「おおっ？ あんたやな！ 噂の新人くんとやらは。」

僕の方を見るや否や、満面の笑みを見せる彼女。
それにしても…この言葉遣い。

「ウチは第六部隊の、ヤトフ・ジュニエス。 ま、よろしゅう頼むわ！」

「…はい。 こちらこそ、よろしく。」

差し出されたヤトフさんとやらの手を握り、ガッチリと握手。

「おおっ？ さすがにタツパある分だけ、手も大きいなあ。

うちの手なんか、スッポリ包まれそうやわ。」

「……。」

タツパってのは、え…つと。

多分、背の高さのことだよな。

「スギヤマ…そいつだよ。 昨日、俺の話に出て来た奴は。」

壁に背を預けるようにして立っていたケヴィンさん。

その彼が、ヤトフさんの方を見ながら呟く。

「昨日…というと。」

「ガライブ村で、ニッポン人が見つかった——って話だ。」

ケヴィンさんの言葉を受け、診療所内での会話場面が思い浮かぶ。
そういえば、第六部隊の人…とか言ってたっけ。

「おお、その話か。 もうあんたの方から話してくれたんやな。」
ケヴィンさんの方を見て、口を開くヤトフさん。
その口ぶりからすると…どうやら、話してなければ

今ここで話す気だった——という感じ。

「ヤトフさん。その話ってのは、本当なんですか？」

「うん？　んゝ…どうなんやろな。」

笑みを残したまま、首を傾げるヤトフさん。

「ま…あんたからすりゃ、当然気になる話やわな。

そこで一つ、提案があるんやけど。」

右手の人差し指を立てると、彼女は僕の方に顔を近付ける。

「どや？　ウチと一緒に、ガライブ村へ行ってみいへんか？」

…

「行きます。」

少しの沈黙を挟み、僕は答えた。

「決断早えな…お前。」

「うんうん。男はやっぱ、決断力やで。

よゝっし、決まりや！　明日の朝、出発するで！」

「了解しました。」

「おいこら…。いつものことだが、話が急過ぎんぞ。」

着々と予定を決める僕らに対し、ケヴィンさんは訝しげな顔をする。

「ガライブ村つつたら、結構な距離もあるだろ。

行って帰って来るだけでも、恐らく二日はかかる。」

「……。」

つまりは…片道で一日かかるということか。

それは確かに、結構な距離と言える。

「ハッハッ、そんなの承知の上や。心配はいらん！
前々から、旅の仕度はバッチシ整えてあるで。」

ケヴィンさんの発言に怯むこともなく、自信満々な様子のヤトフさん。

「前々から…？」

「あっ、いや…ま、まあな。知り合いがおることやし、
久々に顔見せに行こかなー…とか思ってたな。」

僕の言葉にビクツと体を震わす反応を見せると、彼女は
なんだか歯切れの悪い口調になった。

……

「お前…なんか隠してねえか？」

「なな、何をおっしゃる！？　ウチが隠してるのは、
年齢とスリーサイズだけで。」

ケヴィンさんに詰め寄られ、一歩後ろに下がるヤトフさん。
動揺してる様が、見てとれる。

「ところで、ヤトフさん…おいくつなんですか？」

「こないだ、24になったばかりや！」

僕が尋ねた質問に、即答してくれる彼女。

……

「ああっ、しもた！？　誘導尋問や！」

「…普通に聞いただけだろ。」

「澄ました顔して、やりよるな。あんだ。」

ケヴィンさんのツツコミを無視し、彼女は僕の肩をポンポンと叩く。

「そういえば、ヤトフさん…スリーサイズは？」
「え〜っとな——…っど!? 同じ手は喰わへんで、新人くん！」

<第29話>

【M a n a S q u a r e】

馬車に揺られながら、僕らは目的地…ガライブ村を目指す。
ちなみにこの馬車は、町長さんからの借り物。

「……。」

あつという間だった。

あれよあれよという間に、準備は着々と進み……現在に至る。

本当に——あつという間。

いや、もちろん…警備所のメンバーと色々話し合ったり、
何を持参していくかなど、それなりに悩んだ記憶はあるんだけど。

なんていうか…。

その辺りの過去の記憶が、うーん…何と言えればいいものか。
あったのに、まるで無かったような…。

”少年よ、何を悩んでおる？ クフフ。”

……

”やはり夢の世界ですから、時間の感覚には多少のズレがあるよう
です。”

”しかし、案ずることはありません。”

”あなたは確かにこの世界に存在し——物語を創り上げている。”

「……。」

この、不思議な感覚。

言葉の一言一句が、頭に刻み込まれていくような…。
こんな芸当が出来る奴は、一人しかいない。

「ニャンニャン、お久しぶり。」

”どうも…クフフ。”

「何日も出てこないものだから、その存在を忘れかけてました。」
”あらら…薄情な人ですねえ。”

何日も…か。

しかし、一日一日をしつかりと生き抜いてきたはずなのに——
うーん…何と言えればいいものか。

”だから、感覚にズレがあるんですってば。”

「ズレ…ですか。」

”おっと、そろそろお別れの時間です。”

”こちらも最近、慌ただしくて…あなたと話す時間がとれません。
教えておきたいことは、まだまだ山程あるのですが。”

「……。」

”しかし、心配はいらないでしょう。”

”あなたは私の予想よりも、遥かに早いスピードで
この世界に馴染んでいつている。”

” 少し——怖いぐらいに。”

「……。」

最後の言葉を聞き終えた瞬間。

背筋に、何かゾクツとしたものが走るのを感じた。

” 今の内に…言っておきましょうか。”

” 夢から覚めたその後。 もしも、あなたが私を求めるのであれば…。
”

” 彼女を連れて、桜雪高校の音楽室へと来るのです。”

「えっ…?」

” ——では、またの機会に。”

石畳が敷き詰められた地帯。

その中心に、大きくて丸い人工池のようなものがある。
更に、その池の中心に見えるのは…。

「……。」

長いヒゲを生やし、ローブを身に纏った老人。 …の石像。
その老人の姿には、見覚えがあった。

あの本に描いてあった『天帝』ヴェンゼス様のイラスト。

それと瓜二つ。

「よっし…！　ガライブ村でニッポン人が見つかるよう、ウチも祈つといたるわ。」

そう言うときヤトフさんは、手を合わせてお祈りのポーズをする。

「……。」

僕もそれに習い、目を閉じて石像を拝んでみた。

ここは、リシャーナの町とガライブ村のだいたい中間地点。

『マナの広場』と呼ばれている場所らしく…その管理は、向こうに見える立派なお屋敷の主人が担当しているんだとか。

「……。」

お屋敷以外にも、民家らしき建物がポツンポツンと見える。

が——村とか町っていうには、その数が少な過ぎるかな。

「お二人とも、昼食の準備が整いましただ。　どうぞ、こちらに。」
耳に飛び込んできたのは、なんか…どっかの方言を感じさせる人の声。

「おっ、おおきに！　ほんなら、ご馳走になるとしよか。」

彼の名は、クアゴさん。

リシャーナの町長さんの家に住む青年で…今回、馬車の運転手として僕らの旅に同行してもらっているお方です。

……

彼に案内され、辿り着いた先。

そこには、木陰に何か絨毯のような物が敷かれており…。
その上には、水筒や弁当箱と思われる物体が乗っかっている。

「ん〜美味しいなあ、この卵焼き。　これ全部、あんたが作ったん？」
「左様でございますだ。」

そして、ランチタイムが始まった。
そよそよと涼しげな風を感じつつ…向こうに見える立派なお屋敷や
ヴェンゼス様の像などを眺めつつ、箸を進めていく。

「この酢豚も、絶品や！　あんた、すぐにもコックさんになれる
わ。」

「お口に合いましたようで、何よりだんべ。」

それにしても…。

見た目、思いつきり黒人と白人——といった雰囲気の二人。
しかしその会話は、日本の方言がしきりに飛び交うという
実にグローバル性を感じる光景。

「……。」

そういえば、酢豚って…中国料理だよね。

そんな事実を思い出し、僕はますますのグローバル性を感じていた。

「スギヤマ。」

「…はい。」

「ちよっと、ジツとしとりや。」

……

よくわからないが、とりあえず言われた通りジツとしてみた。
ヤトフさんの視線が向けられた先は、僕の…肩？

僕は、自分の右肩の上に目をやった。

すると、そこには…見覚えある顔のヤツが。

「よし…ゲットや！」

僕の肩の上から、ヤトフさんの手の中へと強制移動されたもの。
それは、茶色くて硬そうで…大きな角がある――
いわゆる、カブトムシと呼ばれる生物に間違いなさそうだった。

＜第30話＞ 【閃光の魔獣】

ハンバロストの森。

ガライブ村をグルリと囲むように広がっている森林地帯。

太陽がオレンジに染まり始めた頃、僕たち一行はこの森に差し掛かり…

そして——異変は起こった。

「クアゴさん？」

「お…おいっ！　しっかりしいや！」

悲鳴を聞き、慌てて馬車を飛び出した僕とヤトフさんの前に飛び込んできた光景。

そこには、腕と足から出血し…地面に倒れているクアゴさんの姿があった。

「……。」

「アレって…まさか。」

二匹の動物が、生い茂る草の上に立っている。

青白い毛並みをした…オオカミのような姿をした動物。

「氣い付けや、スギヤマ。　アイツ、もしかすると…。」

ヤトフさんがその言葉を言い終える直前――
二匹の動物は、同時に動き出した。

ガサガサと草を掻き分けながら、僕らの周囲を
一定の距離を保つように動く動物たち。

すぐに襲い掛かってくる雰囲気ではないが……敵意――あるいは警戒
心を

持たれている様子は、手に取るようにわかる。

……

「……。」

クアゴさんの様子に気を配りながら、僕とヤトフさんは
それぞれ一匹ずつを監視するような態勢をとる。

特に言葉を交わしたわけでもないが……

そこはやはり、同じ警備員同士だから成せる業なのかも。

刹那――僕が監視していた方の動物が動きを見せた。
こちらに向かい、駆け寄って来る。

「……。」

それなりの体格をしている割に、そのスピードはなかなかのもの。
だが、この程度ならば……襲い掛かってきたところで、
その動きを見切ることは充分に可能。

「……ッ！」

互いの距離が、数mまで縮まったとき。

突如、それは起こった。

動物の全身から、強烈な青白い光が発せられ――
一瞬ではあるが、僕は完全に隙を見せてしまった。

……

間一髪、飛びかかってきた動物の攻撃を避ける。
地面に着地した動物は、すぐに追撃――とはいかず……
走り去り、再び一定の距離を保つように離れた。

「……。」

「やっぱ、間違いなさそうやな。」

何かを悟ったように呟くヤトフさん。

ふと彼女の方を見ると、いつの間にやら……その手には
ヌンチャクのような武器が握られている。

「あいつは、ウスケス。見ての通り、厄介な能力を持った魔獣や。」

「……。」

「でも……この辺りにウスケスがいたっちゅうのは、もう何百年も前の
話のはずやのに……。」

ヤトフさんの言葉に耳を向けている最中、ウスケスとやらは動いた。
二匹が同時に、僕たちの方へ向けて駆け寄って来る。

……

「うッ!？」

「……。」

眼前で繰り広げられる光景。

二匹のウスケスは、それぞれがジグザグに走りながら一つの紐を撚り合わせていくようにして、こちらに近寄っている。そして時折、交差する二匹の体から強烈な光が発せられ――

「……。」

「ヤバイな！ このまま近寄られたら……。」

二匹が同時に発する、青白い光。

先ほど一匹が発していた時と比べると……その度合いの差は、明らかに。

それを目に受ける度、数秒の間、視界が完全に奪われてしまう。

……

――陣形を崩す必要がある。

そう判断した僕は、足を前へと踏み出した。

前へ飛び出した僕に対し、二匹のウスケスがピタリと動きを止める。

刹那……僕に向かい、二匹が飛びかかって来るのを確認。

それと同時に、視界は真っ白になった。

グオウウツ

「……。」

確かな手応えと、苦しそうな獣の唸り声。

僕の打撃を受けた一匹のウスケスが、地面に倒れ込む。

…焦りが出たのだろうか？

地面から足を離れた後に光を発したところで、
例えば視界を奪われようとも…その後の動きは、
大体の予測が出来る。
それが、この結果というわけだが。

「……。」

まだ、もう一匹いる。

油断は出来な

バシィイツ

風切り音のすぐ後、何かを叩くような音が聞こえた…かと思うと。

もう一匹のウスケスの体が吹き飛び、木にぶつかる様が見てとれた。

「……。」

振り抜いた腕をスッと引き、こちらに視線をやるヤトフさん。

どうやら、あのウスケスの惨状は…彼女の手に握られた

ヌンチャクによって引き起こされたものらしい。

<第31話> 【霧深き村】

色々あったが…とにかく、ガライブ村へと到着。

辺りはもうかなり薄暗くなっており、お天道様が沈みきるのも時間の問題というところだろう。

まずは、今晚の宿を確保。 …ということで、ヤトフさんの知り合いの

イシエンダさんとやらのお宅を目指す僕ら。

ヤトフさんを先頭にし、僕はクアゴさんに肩を貸しつつ、その後を追う。

「……。」

リシャーナの町と比べると…。

失礼ながら、明らかな田舎臭さを感じざるを得ない。

木造建築。

わらぶき屋根。

そして何より…家屋と家屋の間隔が、広いこと広いこと。

花毬町よりも、ずっとか田舎臭い。

そして、これはハンバロストの森に入ってから気になっていたことだが…。

この辺りはどうやら、なかなか霧が濃い地帯の様子で。

田舎臭さと霧が合わさり：なんだかやけに幻想的なムードを感じる。

……

「ハロハロ！ お客さんやで〜！」

ドアを叩きつつ、家の中に向けて叫ぶヤトフさん。

彼女の話によれば、この家には自分の友人と：もう一人、そのお婆さんが住んでいるというが。

「あん？ そのバカっぽい能天気な声は：誰だっけ？」

ドアを開け、姿を現した人物。

ボサボサの紫がかった色の髪を弄りつつ、怪訝そうな目でヤトフさんを見ている。

「ぬおうっ！？ 久々に訪ねてきてやった親友に対し、その態度は何たるや！」

「うっせーな。こんなあっちい日に、てめえの暑苦しい声なんざ聞きたくねえんだよ…。」

「なんやと！？ フフツ：おもしろいわ。今日こそあんたに、

ウチの偉大さっちゅうもんを教えてやるわ。」

そう言うヤトフさんは、腰に装着していたヌンチャクを――

「あ、あり…？」

「はじめまして、イシエンダさん。僕はヤトフさんの知り合いで…杉山榛名といます。」

「んっ？　…ああ。」

オロオロした様子のヤトフさんを尻目に、僕はボサボサ髪の女性に声をかけた。

「この人、つい先程なんですが…森で獣に襲われて、怪我を負ってしまっているんです。」

言葉を紡ぎながら、隣で少し息を荒くしているクアゴさんを見る。

「少しの間でも構いませんので…こちらのお宅で、休ませて頂くことは出来ないでしょうか？」

…

「…かまわねえよ。　入りな。」

何か見定めるように僕とクアゴさんを数秒見つめた後、彼女はそう言って、ドアを目一杯まで開いてくれた。

「ありがとうございます。」

「おいっ…新人！　あんた、その右手に持ってるモンは何や！？」
ペコリと一礼し、敷居を跨ごうとしたところにヤトフさんの大きな声が鼓膜を震わす。

「ヌンチャク…ですけど。」

「そんなもん、見ればわかるわ！」
そんなら、聞かないで下さい。

「だから、何であんたがそれを…！　いつの間にとったんや！？」
「ああ…ったく！　てめえは少し黙ってろ！」

大きく振りかぶった、イシエンダさんの左腕。
そこから放たれた一撃が、ヤトフさんの脳天を直撃した。

イシェンダさんの住まいに上がしてもらい、
大体の事情説明を終えたところ。

「へえ、ニッポン人を探して…？　　ってか。」
「はい。」

今僕らがいる部屋は、畳張りで…囲炉裏のある部屋。
畳の上に敷かれた布団には、クアゴさんが横になっている。
そして、その隣では——ヤトフさんが気絶している。

「ん…。　　悪いがそんな話、アタイは聞いたことないねえ。」
「……。」

「ああ、関係あるかどうかわかんないけど…：最近この村じゃ、
妙な噂が広まっててさあ。」

それにしても、この部屋の純和風な雰囲気…。
日本のことを全然知らない者たちが作り上げたものには、
到底思えるはずもないのだが。

ま…細かいツツコミをしても仕方がないのが、この世界。

「満月の夜になると、黒いローブを纏った変な奴が
村の中をうろついてるってんだよ。」

「……。」

「しかも、そいつが現れると…骸骨やら人魂までもが、
村の中をうろつき出すっていうぜ。」

それはまた：随分とホラーな話だ。
しかし、黒いローブを纏った奴――か。

「ニッポン人ってえのは：その黒いローブを着た奴なのですか？
布団の上のクアゴさんが、久しぶりに口を開く。

「ンなもん、知るか。残念だけど、アタイは黒いローブの奴も、
骸骨も人魂も見えてねえんだ。」

……

「ハルナさん、ここは他の村人にも話を聞いてみるっぺ。」
クアゴさんの口から、もったもな意見が飛び出す。

「なんやら、この村に只事じゃないことが起きてる気がするべ。
ハルナさん：調査の程、よろしくお願いしますだ。」

「……。」

クアゴさんは、この村の出身者だと聞いている。
当然、村にこんな奇怪な噂が流れているとすれば：
気になって仕方ないことだろう。

——Side ???——

今から、約三百年前——。

この地は、フィロメロという小さな国が治めていた。

フィロメロの皇族たちには、ある概念があった。

それは…人種差別。

自分たちと同じく、肌の色が白い者を優遇し——

そして、肌の色が黒い者に対しては、冷遇な態度をとる。

この地に住む原住民は、ルオネ族といい…彼らは全て黒人であった。

自分たちを奴隷同然に扱う皇族の者たちに対し、

彼らは不満を募らせる日々を続けていた。

やがて——反乱は起こった。

ルオネ族を中心に、皇族に不満を覚えていた者たちが結集し…

一発の爆弾を合図に、戦争が始まった。

ルオネ族の中には、闇の精霊術を扱える霊術士が多数存在した。

そのため、人員や武器の数では劣る反乱軍であったが…
皇軍に対し、決して劣勢な戦況は見せていなかった。

激しい戦闘が続く中、異変は起こる。

両の勢力に関する者たちの中に、奇妙な病気に侵される者が出てきた。

手足に痺れが出たり、頭痛や目まいを感じ…。

そして——ある時突然、フツと糸が切れたように心臓が止まる。

この奇妙な病気は、あっという間に国中の者たちへ広がった。

戦争に関する者から、ただの旅人に至るまで——

あらゆる者たちが、一日に何百何千というペースでその命を失っていった。

この病気は『獄眠病』と云い…一般的な病魔とは違い、
細菌などにより引き起こされるものではない。

それは——闇の精霊術の一つ。

闇の精霊の力を借り、術者が標的と定めた人間に対し…

前述のような体の異変を起こす。

一種の呪いとも云われ、古来から禁断の術と呼ばれていたものだ。

ルオネ族の誰かが、その術を使用した。

そう考えるのが妥当であったが…一つ、疑問が残る。

なぜその術者は、皇軍だけでなく、自らの味方や一族の者たちにまで、

禁断の術をかけてしまったのか。

これは今もって、謎のままとされている。
一つだけ確かなことは、この地で凄惨な戦いが繰り広げられ……
そして——多くの命が失われたということ。

——Side 杉山榛名——

ザーザーと鳴り響く水音。

どうやら外は、なかなかのどしゃ降りらしい。

もう夜もとっぷり暮れてしまったが……この天気では、
お月様が確認出来る気配はなさそう。

つまりは、ヤツの姿も確認出来ないということか。

「なんや、辛気臭い話やったな。」

「……ええ。」

僕らに背を向け、洗い物をする後ろ姿。

ヤトフさんが言う辛気臭い話というのは、彼女がしてくれたもの。

彼女の名は……ノナ。

何を隠そう、イシエンダさんの祖母——つまりはお婆さんらしいが。

「なあ、思うんやけどさ。 例の黒いローブを着た怪しい奴ってのは……」

ひよっとして、ルオネ族っていうのの亡霊とちゃう？」
真剣な表情をして、ヤトフさんが口を開く。

「そんなふうに言うヤツも、村の中に結構いるよ。でもさ…
なんで三百年も前に死んだ人間が、今になって村に現れるわけよ？」
腕組みをしたイシエンダさんが、言葉を返す。

「そりゃもちろん、成仏出来へんから…。」

「だったら、もっと昔から現れるもんじゃないか？」

「――魔王じゃよ。」

ヤトフさんとイシエンダさんの会話に入り込む、別の声。
それは、どうやら洗い物を終えた様子のノナさん。

「魔王が、わしらの世界に近付いて来とる証拠じゃ…。」

魔の瘴気に晒され…この地に住まう靈魂たちが、力を付けてきとる。

「……。」

魔の瘴気…か。

限られた妖魔のみが発することの出来る、正体不明の波動。
その効力は、実に様々あるらしいが…。

夜が明けてから、さっそく僕は調査を開始した。

とりあえず、家を訪ねるのは面倒なので：道端にいる人や畑で作業している人などを中心に、聞き込みをしていった。その結果――

合計、30人の村人に聞き込みをしたところ。

自身が黒いローブの怪しい奴：あるいは、骸骨や人魂を見たという人。

その数、12人。

家族や友人が見た：という人も含めると、27人。

そして、話を総合すると：

黒いローブの怪しい奴というのは、身長が180cm程度であり：体格的には、男性と考えるのが妥当な雰囲気。

髪の色は金髪だった――などという話も出ている。

「おいーっす。調査の方、はかどっとるか？」

「……。」

少し濡れた草むらに座り、これまでの調査状況を確認しているところに

ヤトフさんがヒョイと顔を覗かせた。

「んーっ？ な、なんや：？ このヘンテコな文字。」

僕が持つノートに書かれた文字たちを見ると、

彼女は怪訝そうな表情を見せる。

「えっと、これは：僕らの国、日本で使われてる文字なんですよ。以前に妙な手紙を見つけた時の、ジウさんやケヴィンさんの反応が脳裏にフラッシュバックする。」

ヤトフさんにとっても、この日本語文字は読解不能なものらしい。

「ほほう…。　　っちゅうことは――あんたやっぱり、
本当にニッポン人やったんやな。」

「まあ、そういうことです。」

言い方からして、これまでは疑いの眼差しを向けられてたっぽい。
ま…仕方ないといえば、仕方ないことか。

「それはそうと、ヤトフさん。」

「んっ…なんや?」

「この村に日本人がいるという話は――結局、どうなんですか?」
僕がその疑問を投げかけた途端、彼女の顔の筋肉が
明らかに引きつった気がした。

「あ、ああ…そうやな。　　そこんどこ、どうなんやろな?」

「……。」

疑問形に対し、疑問形で返さないでほしい。

「そもそも、その話…一体、誰から聞いたんですか?」

「えっ?　　えーっと、えとえと…誰からやったのでしょうか?」

…

「……。」

なんだか、引っかかるんだよな。

どうも、何かを隠してる感が否めない…この人。

<第33話> 【探索】

「これ——何ですか？」

目の前に差し出された、皿の上の乗ったモノ。
それを指差し、僕は疑問符を浮かべていた。

「何って…見てわからんのかい？ スイカじゃよ。」

僕の疑問に、ノナさんが首を傾げつつ答えてくれる。

「…スイカ。」

……

皿の上に乗ったモノを、改めてよく観察してみる。

確かに…一見したところ、僕の頭の中に思い浮かんだ
最初の単語は『スイカ』だった。

しかしながら——。

その果肉の部分が、どう見ても青…ないしは群青色っぽく見える。
そのため、これがスイカであることに疑問を持ってしまったわけだ
が。

「ハルナさんの国にや、無かったんですかい？」

「ま…とにかく食べてみ。甘くてウマいし、毒も入ってへん。」

「……。」

皆の好奇の視線を感じる中、僕は恐る恐るソレをかじってみた。

……

「甘くて、美味しいです。」

食べた感想を簡潔に述べる。

「うんうん…：しかしな、新人くん。そんなチマチマした食べ方じゃ、

男として失格やで！」

そう言うや否や、ヤトフさんは両手で持った青いスイカをガバババツ…と。

大きく開いた口で、あつという間に平らげてしまった。

「フツ…：どんなもんや。ほら、あんたもやってみい。」

何かをやり遂げた——という表情をしたヤトフさんが、そんなお誘いの言葉を投げかけてくれる。

「スギヤマ、気にすることないぜ。こんな奴の真似してたら、バカがうつるだけだ。」

「オラも…：ああいう下品な喰い方は、どうかと思うだ。」

口の周りを青く染めた彼女に対し、冷やかな反応を見せるイシエンダさんとチアゴさん。

「バカ…：。下品…：。」

……

「うわああああん！ どうせうちらは、バカで下品な女や〜！」

泣き叫びながら、家を飛び出すヤトフさん。
様々な思いを巡らせつつ、僕はその後ろ姿を見ていた。

「ガキか…あいつは。」

「情緒不安定な年頃なんだべ。仕方ないだ。」
そんな彼女に対し、やはり冷めた印象の反応を見せる二人。
情緒不安定って…彼女はもう、24歳と聞いているのだが。

ヤトフさんの探索を兼ねた、村の散策。

のどかで自然味溢れる雰囲気になつとブーツとなりつつ…。
とにかく、そこら中を歩き回っていた。

…

何かがサガサ音がするので、そこへ向かってみる。
すると…茂みの中に、カウボーイハットを被った
何者かの後ろ姿を確認出来た。

ベージュ色のマントを身に纏ったその格好は、

この村の雰囲気と少々食い違う。

カウボーイハットもあつてのことか…どこことなく、
西部のガンマンのような印象を受けるが。

「あの、すみません。」

「——んぎっ!？」

声をかけてみたところ、やけにビックリした様子でその人物はこちらを振り返った。

「な…なんだあ？ お前！」

「それは、こっちの台詞です。」

年齢は、二十代から三十代ぐらいだろうか。無精ヒゲを生やした、長髪の男性…。

「俺か？ ククッ…この俺こそ、世界を股にかけるトレジャーハンター。」

その名も、ビルカンブ様よ！」

『ババーン』という効果音が聞こえてきそうな威勢の良い自己紹介をする、謎の男性。

「僕は、杉山榛名といいます。 ちょっと探しものがありました…昨日から、この村を訪れているんですが。」

彼に続いて、僕も軽い自己紹介を済ます。

「スギヤマ…か？ 変わった名前だな。 って——なに！？」

僕の自己紹介を聞くと、ちょっと不思議そうな顔をし…直後、男は焦りの表情を見せる。

「お前も、黒の鍵を探してやって来たのか！？」

…

黒の鍵…。

「なんですか？ それ。」

いきなり飛び出たワードに、僕は少し困惑しつつ尋ねる。

「なんだ、知らないのか。 ま…そりゃそうだろうな。
この俺様でさえ、嗅ぎ付けるのに何年かかったことか…。」
「……。」

よくわからないが、凄そうな物に思える。

自分のことをトレジャーハンターとか言ってたぐらいだから…
それはもしや、お宝と呼べる物なのだろうか？

「何なんですか？ その…黒の鍵っていうのは。」
「てめえなんぞに教える義理はない！ じゃあな、ベイビー。」

ビルキャンプさんとやはらは、足早に僕の脇をすり抜け、茂みの外へと
出る。

そして、そのまま立ち去る——…かと思いきや。
クルツとこちらを振り返り、口を開いた。

「言っとくが、お宝があると思って…下手な探索するのは
止めといった方がいいぜ。」

「素人が見つけられる代物じゃねえだろうし。 何より…
黒の鍵は、強力な呪い付きのアイテムだって話だからな。」

…

「じゃあな、ベイビー！」

話を終えたビルキャンプさんは、数秒の間、僕の瞳をジッと睨んだ。
そして——今度こそ、僕の傍から立ち去っていく。

「……。」

…うゝん。

良い人なのか悪い人なのか、いまいち判断しにくい言動だったな。

＜第34話＞ 【プレゼント】

——Side ???——

「ル〜ラララ〜…♪」

「今は辛く〜…悲しみが〜背中を重たくしても♪」

「いつか僕らも〜…空高く羽ばたけ〜るさ♪」

……

「上手ですね、歌。」

声をかけられたヤトフは、ハッとされたように顔を上げる。

「…スギヤマか。」

彼女が今いる場所は、村を見下ろせる小高い丘の上。
青々と茂った草の上で、体育座りをしている。

「お世辞はええって…。 上手なわけないやろ。」

見るからに暗い表情を榛名に向け、彼女は言葉を紡ぐ。

「この歌うたってる人はな、すんごく綺麗で高い声しとるんや。ウチのこんな声じゃ…似ても似つかれへん。」

「そうなんですか。」

小さく相槌を打つと、榛名も草の上に腰を下ろす。

…

「でも、別に…高いからって、綺麗な声だとは限らないと思いますよ。」

ヤトフの方に首を向け、話をする榛名。

しかしヤトフは、膝を抱え込みながら虚空を見つめたままだ。

「少なくとも、僕は好きですよ。 ヤトフさんの声。」

「…えっ？」

その言葉が。

やけにはつきりと、自分の心に響き渡るのを彼女は感じた。

「…ホンマに？」

「はい。 ホンマに、です。」

すぐるような目を向ける彼女に対し、榛名は穏やかな口調で返事をした。

それはまるで、親が子供に言い聞かせているようにも感じる。

…

「…アハハ。」

膝を抱えていた両の腕を放し、彼女は斜め上方向に視線をやる。

「ウチも結構、好きかもな。 あんたの声。」

そして…澄んだ青空を眺めながら、ポツリとそう呟いた。

「あんたの声聞いてると、なんや…頭ん中のモヤモヤがこう、パァーッとなくなってく気がするわ。」

「……。」

……

「アハハハ！ これでウチら、両想いになったわけやな。」

静かに流れる空気に耐え切れなくなったかのように、
彼女は大きく明るい声で言った。

「もう、そこで黙ってジッと目見つめるなんて…やめてくれへんか？」

なんや、変な雰囲気になってしまいうろ！？」

「…そうですか？」

——Side 杉山榛名——

「おうおう…よう喰いよるわ。 スイカが好物ってのは、本当な
やな。」

「……。」

僕らが食べたスイカの皮に、ピッタリと密着して離れない生物。
その生物——カブトムシを観察しつつ、ヤトフさんが何やら
ブツブツ独り言を呟いてるのが耳に入ってくる。

彼女の話によれば、そのカブトムシは、ここまでの道中に立ち寄った
あの、マナの広場……？ だっけ。
あそこで捕まえたものを袋に入れて、ここまで連れて来たものらしい。

「なあ、ハルナさん。」

「はい。」

「今夜はもしかすると、満月が拝めるかもしれないっぺ。」

畳の上で正座し、なぜか木片を彫刻刀みたいな物で削っている
クアゴさんと言葉を交わす。

ちなみに、ノナさんとイシエンダさんは……ついさっき、自身が営む
リング畑に向かう——と言って、二人して外へ出掛けていった。

「もしそうならば、オラも一緒に村の探索に参りますだ。」

「……怪我の方は、もう大丈夫なんですか？」

申し出をしてくれた青年に対し、その体に巻かれた包帯を見ながら
尋ねる。

「心配にや及びません。　こう見えて、体は丈夫な方だと思ってま
すだ。」

「……。」

……ふむ。

まあ確かに、そんな重傷とも思えない傷ではある。

昨日今日の彼の挙動を思い返しても…それ程辛そうな感じはなかったし。

「ならば、お願いします。」

「へいつ。任せておいて下せえ。」

なんだか彼の言葉遣いを聞いてると、自分が時代劇の偉い人になってその家来と話をしてる——みたいな錯覚に陥る。

現実じゃ、自分にこんなペコペコ頭を下げてくれる人…いないからね。

「それはそうと…。今は一体、何をやってるんですか？」

「ああ。これですかい？」

チラッと僕の方に視線をやり、一瞬だけ手を止めたが

彼はまた、すぐに木片を削る作業に没頭していく。

「実はもうすぐ、弟の誕生日があるんですだ。プレゼントは何がええもんか、ずっと悩んでおりまして…。」

…

「そのの見事な木彫り細工を見まして…。で、これなら喜んでくれるんじゃないかと思った次第で。」

「…なるほど。」

居間にある棚に飾られた、ライオンを模したと思われる木彫り細工。それなりに大きく、そして完成度の高そうな作品なので…昨日から気にはなっていた物だが。

「……。」

棚にある物体と、クアゴさんの手にある物体を見比べてみる。
サイズのいえば、クアゴさんが持つ物体は……棚にある物体の、
およそ四分の一か五分の一程度に思える。

まだ、大まかな全体像を彫り出してる段階だとは思うが…。
なかなか、将来に希望が持てそうな雰囲気を感じる。

「なんか、手馴れてる感じですけど…。　　こういうの、得意なんで
すか？」

「へいっ。　　こう見えて、手先は器用な方だと思ってますだ。」

……

「……。」

僕は残念ながら、こういうのは苦手な部類に入る。

やること自体は嫌いじゃないんだけど…。

ま——誰にでも、得手不得手ってものがある次第で。

<第35話> 【誘われし者たち】

「……。」

空を見上げる。

真っ暗な闇の中、キラキラ輝く星たち。

そして——ポツカリ浮かぶ、丸いお月様。

「まだ、暗くなって間も無いってえのに……

人の気配が全然ありやせんね。」

右手にランプを持ったクアゴさんが、周囲を見渡しながら呟く。

「やはり、例の黒いローブの奴ってえのに怯えてるんですかね？」

「……恐らくは。」

今夜はまた、一段と霧が濃い。

暗闇の中漂う、モヤモヤした白い霧は……これまた、幻想的とか。

幻想的なのはいいが——視界がかなり悪くなってるのが、辛いところ。

「あんれ？ ハルナさん、あそこに誰かいるようだべ。」

「えっ……？」

クアゴさんが指差した先に視線をやる。

霧の中、確かに人型をしたシルエットが確認出来る。

しかし…。

なんだかやたらと、細身な体型にも思える。

背はそれなりにある様子なのに、その手足の細さといったら――

「……。」

「ひいっ!？」

接近し、その姿をはっきり視認したと同時。

クアゴさんは悲鳴を上げ、ランプを落としそうだった。

……

骸骨。

眼前に立つ物体を現わす言葉は、その一言に尽きた。

「ハ、ハルナさん…。」

クアゴさんがキョロキョロと慌ただしく視線を彷徨わせながら、震えた声で僕の名を呼ぶ。

「……。」

一体、二体、三体…。

様々な方向に、いくつもの骸骨。

それらは、まるで操り人形のように手足…そして
体全体をフラフラとさせながら…。

しかし、確実に僕らの方へ近付いてくる。

「逃げましょう。」

静かにそう告げ、僕はクアゴさんの腕を掴む。

——そして、走り出した。

……

スピードは大したことないので、いくら数で圧倒されているといっても

逃げるのはそう難しいことでもない。

…と黙っていたのだが。

「……。」

さっきまでのフラフラした態度とは一変。

骸骨達は手を前に突き出しつつ、僕らとほぼ同じスピードで走りながら

こちら目がけて群がろうとしてくる。

「クアゴさん。しばらく、ジッとしてて下さい。」

「へっ？ お…おわわっ!？」

僕に抱きかかえられ、驚きの様相を見せるクアゴさん。

そして僕は、再び走り出した。

……

「…しつこい。」

どれぐらい走っただろうか。

辺りに民家らしきものが見当たらなくなってきたことから、既に村を離れた場所にいることはわかるのだが。

……

「ん……。もう少し……。かな。」
追われるまま森の中へと入り込み、しばらく。
後方に目をやれば、追ってくる骸骨達の数はいつの間にやら、もう五体にも満たない程度になっていた。

……

「なんとか、逃げ切ったみたいですね。」
クアゴさんの体を下ろし、ホッとため息を吐く。

「はい。　けんど……。随分と薄気味悪いところに来てしまいましたなあ。」

周囲に目をやりながら、クアゴさんは訝しげな顔で呟いた。

「……。」

あちらこちらに、木々は生えているものの……。
単なる森の中——と一言で片付けるには、ちょっと異質な雰囲気。

ヌチャヌチャと、やけに湿った様子の地面。

視界を奪う、村の中よりも更に酷い濃さを持った霧。

そして…。

なんだか耳に、妙な音が鳴り響いてくるような気もするのだが。

「走ってきた方角から考えますと…。もしかすると、

ホエール湿原まで来たのかもしれないですだ。」

「ホエール…湿原。」

湿原っていうと…アレか。

よくわからないけど、とにかく湿っぽい場所のことだと思う。

「ルオネ族の集落があつたと云われる場所ですだ。

村の者たちの間では、『冥府の入り口』とも呼ばれておるようで。」

「……。」

冥府…。

確か、地獄のことだったよね。

つまりは——地獄の入り口。

” 閻魔えんまに誘われし者たち…。”

” 汝らの魂…貫い受ける…。”

「……。」

重たく低い声が、どこからともなく聞こえた——次の瞬間。

僕の眼前で、奇妙な光景が繰り広げられた。

クアゴさんの背後に、突如として黒い：渦？　のようなものが現れ。その渦から、人間の手のようなものが見えた――かと思うと。

クアゴさんの腕を掴んだ『それ』は、あつという間に彼の全身を渦の中へと引き摺り込んでしまった。

「クアゴ：さん？」

黙って、その光景を見つめることしか出来なかったのは：

異常な事態に、どう対処すればわからなかった――という理由だけではない。

……

金縛り。

そう表現するしかない、この束縛感。よりによって、こんな時に…。

「――ッ！」

いつの間にか、僕のすぐ傍に誰かが立っている。

ボロボロの汚れた衣服を身に纏った…。

全身の皮膚が、まるでミイラのように干からびている人物。

「……。」

本来ならば、驚天動地する場面だろうが…。

あの蠢く骸骨たちを散々見せつけられた後ということもあってか、それほど心にさざ波は立たない。

……

「クアゴさんを…どうしたんですか？」

少しの沈黙を挟んだのち、僕は『奴』に向かってそう尋ねていた。

「彼を、返して下さい。」

特に明確な証拠があるわけでもない。

しかし——直感的に悟っている。

先ほどの事態を引き起こしたのが、誰であるか。

”救いたくば…”

”救いたくば…一度この場を離れよ。”

”代わりの生贄を連れ…再び戻るがいい。”

”さすれば…あの男を返そう。”

奴の背後に、先ほどと同じような黒い渦が出現。

そして、そこから腕がニュツ…と飛び出たかと思うと

クアゴさんと同じように、奴もまた渦の中に引き摺り込まれる。

……

「……。」

なんとなく——ではあるが。

渦の中へ引き摺り込まれる瞬間、奴は笑っていたように見えた。

《Episode》 [Second Battle]

「ツタく…あの野郎。」

彼は、開け放しとなっている小屋のドアの方を見て呟いた。

そのドアについて先程入っていったのは、一人の少年。

この山の中を、手荷物の一つも持たず彷徨っていたという奇妙な雰囲気のある少年だ。

(…?)

少年の後を追うため、扉に向けて足を踏み出した途端。
何かの気配を感じたベントは、背後を振り返った。

…

「なん…ダ？」

彼の目に映った光景。

そこに存在する、黒い霧のようなもの。

それはまるで、人の姿を形作っているようにも思えた。

「……。」

正体は何であるかは、想像も付かない。

ベントは手に持った出刃包丁を構え、霧を睨み付ける。

”あなた……。”

（――ッ！？）

”あなた……じゃない。”

頭の中に直接響くような、奇妙な声。

周囲をキョロキョロと見回すが、音の発生源らしきものは見当たらない。

そして再び黒い霧に視線を戻した――その刹那。

「グッ！？」

霧はまるで意思を持っているかのように動き出し……ベントへと急接近し、

彼の首をその黒い両手で締め始めた。

”あなた……じゃない。”

（ウッ……グッ……！）

頭に響く意味不明な言葉に、凄まじい力で首を締め上げる黒い霧状の手。

ベントは混乱しながらも、とにかくその手を振りほどこうとする。

……

” えっ…？ ”

「ハア…ハア…。」

呼吸を整えながら、ベントは再び黒い霧に向けて構えをとる。
その手に持った出刃包丁には、鮮血が付着していた。

” なぜ…？ ”

” なぜ、私を傷付けることが…？ ”

…

” まさか…。 ”

” あなたで…正しかった？ ”

” しかし、そうならば―― ”

「……。」

妙な声は、途切れた。

その瞬間、黒い霧も姿を消してしまったようだ。

「…今のは？」

首に残る確かな感触と、包丁に付いた鮮血。
それらの事実から考慮するに、今起こったことが
夢や幻であったという風には思えなかった。

<第36話> 【Dawn】

闇に包まれていた空間に、僅かな明度が出てきた。

しかし、残念なことだが――

それと相反するように、僕の心には暗雲が立ち込めてきた。

……

周囲を探索すること、およそ数時間。

彼の安否を確かめることは、未だ叶わずにいる。

「……駄目だ。」

木の幹に背中を預け、呟く。

このまま探索を続けていても、彼を見つけることは出来ない。

そんな確信にも似た想いが、頭の中にある。

「……。」

一旦、村まで戻る……か？

ヤトフさん達も、心配しているだろうし。

まあ、その心配を取り払う術ってのは……今の僕に無いんだけど。

「あんたら、あの湿原に足を踏み入れたのか…？」
しゃがれた声で言いながら、ノナさんは僕を訝しげな表情で見つめる。

「なんたることを…。いかな理由があれども、あそこにだけは近寄ってはならぬ…！」

……

「まあまあ、ばあちゃん。不可抗力ってヤツだろ…？」
緊張感漂う空気の中、次に口を開いたのはイシェンダさん。

「仕方がないじゃん。コイツ、この辺りのこと全然知らねえみたいだし。」

まだ太陽も昇り切っていない早朝。

囲炉裏を囲むメンバーに、先程起こった出来事を話し始めたのは…
数十分前のこととなるだろうか。

「それよりも心配なのは、クアゴって奴のことだ。

すぐにでも、助けに向かった方がいいんじゃないか？」

「……。」

それは勿論、助けられるものなら助けに行きたいところだが…。

「アタイがその『代わりの生贄』ってヤツになってやろうじゃん。
さ…そうと決まりゃ、準備に取り掛かろうぜ！」

畳からバツと立ち上がると、家の奥の方へと歩いていくイシエンダさん。

「イシエンダ、あんたあ…本気かい？」

「こんな話聞かされて、黙って見過ごすわけにやいかねえだろ。」
複雑そうな顔で声をかけるノナさんに、首だけそちらに向けて返事をするイシエンダさん。

しばらくして、イシエンダさんは囲炉裏の部屋へと戻ってきた。

その手に握られているものは――

「これを使うのは、何年ぶりになるかな。」

「……。」

長い棒の先に、鋭く尖った石が取り付けられてる…槍のような武器。先端の石と思われる部分は、真っ黒に染まっている。

「コイツは、狩人だった親父がいつも使ってた槍だね。」

この槍頭の部分は…なんと、黒曜石で出来てるんだぜ。」

イシエンダさんは、どこことなく誇らしげな口調で手に持った武器の解説をする。

「骸骨だかミイラだか亡霊だか知らねえけど、コイツにかかりやどんな獲物だってイチコロさ。」

「……。」

頼もしいお言葉ではあるが…。

亡霊チックな相手には、そもそも物理的な攻撃手段が通じない気が。

……

「おい、こら。」

「あぎゃッ!？」

イシエンダさんが、槍の柄でヤトフさんの後頭部を突いた。突かれたヤトフさんは、呻き声を発しつつ前のめりになる。

「さっきから、何をボケッとしてんだ！ おめえもさっさと準備始めたらどうだ。」

「え、えっと…。 やっぱ…ウチも行くん？」

後頭部を擦りながら、ヤトフさんが小さな声で尋ねる。

「ああ？ まさか、行かない気でいたのか…？」

普段より数倍、ドスを効かせた声。

女性ながら、その迫力はかなりのものです。

「い…行きます行きます！ 行かせてもらいます！」

「ホエール湿原は、こっから南東の方角だな。」

手の平に乗せた方位磁針を見て、イシエンダさんが呟く。

「……。」

方位磁針が示す南東の方角。

そこに目をやれば、言わずもがな——生い茂る草木で溢れた地帯。

「そーいや、あんた…昨日から一睡もしてないんだよな。 大丈夫

か？」

「：まあ、平気ですよ。」

言われてみれば、そうだった。

：しかし、一晩や二晩の徹夜ぐらいで根を上げるような僕じゃない。
今の状況を考えれば、寝てるわけにはいかないし。

「それじゃ、出発しましょう。 おおよその道のりは
憶えていると思いますから：僕が先頭を行います。」

二人にそう声を掛けた後、僕は森の奥に向かい一步を踏み出した。

「あの：顔色悪いみたいですけど。 大丈夫ですか？」

「へっ？ あ、ああ：心配あらへんよ。」

僕の問いかけに、ヤトフさんは苦笑いして答える。

イシエンダさんの家を出た時から——いや：

もっと、ずっと前から気になっていたことだ。

この村にやって来てからというもの、日を追うごとに

彼女の表情に影が差してきているような気がしてならない。

「お前やつぱり、ビビってんだろ。」

「むっ：そんなことあらへん！」

「ま、しょうがないよな：。 バッタに驚いて、腰抜かすようなヤ
ツだ。」

骸骨やミイラなんて見たら、その場で気絶しちまうかもな。」

「バッタって：あ、あれは子供の頃の話やろ！？」

しかもあれは、トノサマバッタやったやんか！」

「トノサマだろうとヒメサマだろうと、バツタはバツタだろ。」

「いや、そこが違うんやって！ あれはまあその、なんちゅうか…。」

「……。」

——まあ、この件は後回し。

今はとにかく、クアゴさんを助けるのが先決だ。

<第37話> 【狩人の子】

「うへえ…こいつは凄いな。」

「全然前見いへんわ。 スギヤマ、ちゃんとおるか？」

恐らく、既にホエール湿原に足を踏み入れたのだろう。

地面の感触が、かなり水っぽいし…。

この霧の濃さは、他の二人から見ても、やはり異常なものらしい。

「この辺りのはずです…問題の場所は。」

足を止めると、僕は静かにそう告げた。

この匂い…この雰囲気。 はつきりと記憶に刻まれている。

…

「しかし、こっから”面白い…。”

僅かの沈黙を挟み、ヤトフさんが口を開いた刹那。

彼女の言葉を遮るように、低く重たい声が空気を震わす。

”これより…魂狩りを始める。”

”業深き者共が…安らかな眠りにつかんことを…”

その瞬間——ヤトフさんの背後に、黒い渦が出現した。

——Side ???——

「なっ…きゅ、急になんや!？」
強く腕を引っ張られ、思わず転びそうになったヤトフは
不審げな顔をして榛名を見つめる。

「わっ! あ、アレは…あん時の!？」

榛名の視線の先を辿ってみた彼女は、大きく目を見開いて叫んだ。

そこにあったのは、黒く不気味に流動する渦。

その渦から突き出しているのは…青白い肌をした、人の腕のような
もの。

腕はまるで何かを求めるように、ブラブラと動いたり
手で何かを掴むような仕草を見せていた。

「おッ!？ なんだコイツ？」

続いて声を上げたのは、イシエンダだった。

彼女の肩に、黒い羽で全身を覆った鳥のような生き物の姿がある。

……

すぐさま手で払い除けようとする、鳥は宙へと舞い上がり——
その鋭いクチバシを突き出すと、彼女に向かい急降下してきた。

(痛ッ：！)

僅かに掠っただけであったが、イシエンダの右腕には数十cm程度の切り傷が出来ている。

「イシエンダさん！ 大丈夫ですか？」

「ああ：まあ「お、おい！ 見てみい！」

ヤトフが叫びながら指差した先に、三人の視線が集中する。
そこには――

霧に包まれながらも、その黒い翼を羽ばたかせる様が確かに見てとれる：五つの影。

一つ一つの大きさは、人間の子供ほどであった。

「……。」

「こっち来るで！」

「：…どうやら、やる気みてえだな。」

グキヤーツ

グキヤアーツ

五羽の鳥が鳴き声を上げながら、三人へ向かって一斉に滑空してくる。

三人は軽くアイコンタクトをとった後、それぞれが戦闘の構えをとった。

「アタイに傷付けてくれたのは：お前だな？」

自分を標的と定めたらしい二羽の内の一羽を睨み、イシエンダは言い放つ。

……

二羽の動きを的確に読み、攻撃を避けた後——距離をとろうとした一羽の黒い鳥に、間髪入れず槍を突き出した。

槍は翼を貫通し、黒い鳥はバタバタと狂ったように翼を動かす。

グキヤアアーツ

（まずは一匹……）

翼からどうにか槍を抜くことは出来たものの、コントロールを失った黒い鳥は、すぐさま地面に落下した。

——Side イシエンダ・ブアミ——

「おいっ！ そっちに一匹いったぞ！」

さっきアタイを狙い襲ってきた黒い鳥の一匹が、今度はヤトフに目掛けて飛んで行く。

「お：おわわっ！？」

ほんの数cmというところまで近寄られたが、どうにか触れられる前に体を横へずらしたようだ。

「こんなにやろ……！」

鳥に向かってヌンチャクを振り下ろしたが、その攻撃は空を切る。そんなアイツに対し、別の黒い鳥が空高くから急降下してきた。

ゲッ——気付いてねえな!?

ドンッ

「な…何すんや!? アホ!」

「どっちがアホだ! 助けてやったんじゃねえか。」

「何も、蹴飛ばすことないやろ!」

顔を泥で汚したヤトフが、目を吊り上げて非難してくる。
仕方ないだろ…。

sonだけ、ギリギリの状況だったんだからよ。

グキヤアーツ

「おっ…と。 甘いね!」

大きく口を開け、アタイに向かってきた黒い鳥。

それに対し突き出した槍が、見事にヤツの翼をぶち抜いた。

「…よし!」

ああ、この感覚——

父さんと一緒に狩りをしていた頃を思い出す。

「なんだ…結局、五匹ともアタイが仕留めちまったのか。」

最後の一匹の胴体から槍先を抜いたところで、アタイは呟いた。

「凄いですね、イシエンダさん。」

「あかん…。　ウチは、こういうチョコマカ動き回る奴は苦手やわ。」

スギヤマとヤトフが、感心したようにアタイを見る。

まあ二人とも、特に怪我らしい怪我をしてないところはなかなかのもんだな――と思うけど。

やっぱ野生の生き物相手となりゃ、仕留めるのはアタイが一番上手いみたいだ。

”手並みは拝見させて貰った…”

”次は…。我が相手となる…”

…

さっきも見たあの奇妙な渦巻きが、虚空に現れたかと思うと…。そこから、汚れた灰色のローブを身に纏った、何者かが姿を現す。

「コイツが、噂のミイラさんってわけか。」

全身が干からび、骨に皮がへばり付いてるだけのような姿。

生気というものは全く感じられないが…。なんだ？　この威圧感は。

「しかし…大層な武器持ってやがんな。」

両手でしっかり握られているのは、刃先がとんでもなく巨大な鎌。どう見ても、畑仕事に使うモンじゃねえな。

「…クアゴさんは？」

スギヤマが一步前に踏み出し、ミイラに対して声を掛ける。

” 知る必要はあるまい…。”

” …汝らはもう、閻魔の腹の中…。”

ミイラの体が、フワリと宙に浮かんだ。

ローブの裾が風で揺れたかと思うと――宙に浮いたその状態のまま、奴はアタイ達の方へと近付いてきた。

<第38話> 【渦】

――Side 杉山榛名――

――射程範囲に入る。

そう感じた瞬間、僕は動いた。

……

すれ違いざまに、ボディーブローを打つ。

確かな手応え……はあったが。

思っていた感触とは、やや違っていた。

普通に考えれば、衣服の布っぽいような感触とかがあるはずなのに。
まるで何か……スポンジを殴ったような。

「――ッ！」

殺気を感じ、すぐさまその場にしゃがみ込む。

その刹那――さっきまで自分の頭部があった場所を
大きな鎌の刃が通過していった。

……

カウンターを狙うという策も、チラッと頭の隅に浮かんだのだが。ここはとりあえず、サイドステップをして距離をとった。

「……。」

凄いスピード。

まるで、武器の重さを感じていないかのような。

「おいこらっ！ 何を勝手に一人で突っ込んでんだ！」

やや離れた位置にいるイシエンダさんの怒声。

「こういうヤバそうな奴とは、慎重に戦え！」

「……。」

そう言われましても…。

頭より先に、体が動くんだから仕方ない。

バシィッ

「ん…？」

何かを叩くような音がして、僕はイシエンダさんから視線を外す。そして、音のした方向に目をやれば…。

ベシィッ

ヤトフさんの振り抜いたヌンチャクが奴に当たり、再度同じような音が周囲に響き渡った。

「うわッ…と！」

奴が、その干からびた手をヤトフさんに向けて伸ばす。しかし彼女は、それをひらりと避け…奴の動きに注意を払いつつ、

僕の傍らへと駆け寄って来た。

「なんや、アイツ？ 思いっきり叩いたっちゅうのに…全然ダメーシ受けてへんみたいや。」
眉を潜ませながら、ヤトフさんが呟く。

「……。」

何か、見えないものに身を包んでいる…？
そんな風にも思えてならない。
つまり、何かこう——バリアー的なもの。

”…^{レマニクル}黄泉魔法…。”

”^{デスラケイジ}屍骨操…。”

奴の口から、聞き慣れない妙な言葉が紡がれる。
まるで何か…呪文を唱えたようにも思えたが。

「うッ！？」 「これは…！」

ヤトフさんとイシエンダさんが、同時に声を上げた。
彼女たち、そして僕の目が向けられてるのは…
自分たちが足を付けている、そのぬかるんだ地面。

…

——まるで、ホラー映画のワンシーンだった。

次から次へと、泥の中から骸骨が這い出てくるのだから。

「二人とも、しっかりして下さい！」

その異様な光景に目を奪われてか、ブーツと立ち尽くしてる様子のヤトフさんとイシエンダさんに声を掛ける。

すぐに二人は、ハッとしたように武器を構え直した。

——Side ヤトフ・ジュニエス——

「フッ！」

ウチが放った一撃を受けると、骸骨は乾いた音を立ててバラバラになる。

続けて、襲い掛かってくる三体の骸骨に照準を合わせる。

「次から次へと……うっとおしいやっちゃな。」

……

回転させたヌンチャクを使い、骸骨達を

近寄って来た順番に倒していく。

どいつもこいつも……二、三発の攻撃を受ければ、もう動かなくなる。張り合いの無いやっちゃ——と言いたいところやけど。

「しかし……どれだけおるんや？」

まだ距離はあるものの、ウチに向かって近寄って来る骸骨共は少なくとも十体はおる感じ。

もちろん、ウチだけやない。
イシエンダやスギヤマも、群がってくる骸骨共を相手に
必死で戦つとる様子が見える。

「加勢したるか…！」
四方八方から襲い掛かる骸骨に、軽快なフットワークを見せつつ
戦うスギヤマの元へと駆け出す。

「…なあっ!？」
突然、骸骨の群れの中から飛び出したスギヤマ。
そのスギヤマが、なぜかウチに向かって勢いよくタックルしてきた。

…

モロに受けてしまったウチの体は吹き飛び、
数m先の地面に尻餅を付いて着地した。
ぬかるんだ泥の感触がお尻に伝わり、どうにも気持ち悪い。

「スギヤマ！ 何すん——
文句を言おうとした口が、その光景を見て固まった。

スギヤマの足元にあるもの。
あの渦は…！

「…あっ！」

ウチがどうしようか迷ってる間に、渦から手が飛び出してくると…
その手がスギヤマの足首を掴み——あっちゅう間に、

全身を渦の中へと引き摺り込んでしまった。

「そんな…！」

——またか。

またウチは…こんな…。

「……。」

悔しさが込み上げ、視界が滲む。

自分のことが、情けのうて仕方なかった。

……

地面に膝を付けたまま何もしないウチに、骸骨たちが一斉に集まり寄って来た。

首や肩や、腕、足…至るところに、冷たい骨の感触が伝わってくる。

「くっ…そォ！」

骸骨たちに体を押さえつけられ、身動きが出来ないところにあの渦がすぐ目の前に現れた。

渦から青白い腕が飛び出し、ウチの首根っこを掴む。

……

イシエンダが、何か叫びながらこっちへ駆け寄って来る。
でも——もう間に合わへん。

「…ごめんな。」

誰に対して呟いた言葉か、それはよくわからへんかった。

その意味を考えてる内、黒い渦の中へと引き摺り込まれ――意識が遠ざかっていくのを感じた。

＜第39話＞ 【Projection】

——Side ???——

私は——死ぬのか。

この、人気もない密林で。

「ハアツ……。ハア……。」

獄眠病に侵された者には、自らの死を予感する事が出来ると云う。
症状の悪化などから判断されるものではない。
もっと直感的な……。——それは、神の啓示に近いものとも噂される。

「神……か。」

ならばこれは……神が定めし運命だというのか？
このような……惨めな幕切れこそ、我々には相応しいと……？

……

それも、そうかもしれぬ。

「……。」

この戦争を始めた事に、後悔は無い。

彼らの愚行の数々に対し、我らが謀反を起こす決意を固めたのは至極同然の事であろう。

――だが。

我らもまた、罪を犯し過ぎた。
人を傷付け過ぎた。

「……。」

ある日のことだ。

侵攻は順調に進み、その夜は同胞たちと共にささやかな宴を楽しんでいた。

やがて宴も終わり、皆が寝静まった頃……。

私はどうにも寝付く事が出来ず、散歩に出掛けた。

私は、忘れる事が出来ない。

逆さ吊りにされ、ただ成すがままに己の体を傷付けられながら……
一瞬だけ彼が私に向けた――あの目を。

忘れる事が出来ない。

幾人もの数で暴行の限りを尽くし、何かに取りつかれたように四肢を動かし続ける、彼らの――あの目を。

そして私は、逃げ出した。

それから…ただただ、何かに怯える日々を送った。

「……。」

狂ってしまったのは、私の方なのだろうか？

わからない。

私は、臆病者…？ 裏切り者…？

わからない。

わからない。

もう、何も…わからない。

——死ぬのか。

息絶える。

私は…此処で。

——無念。

無念…だ。

「……。」

今のは…何だったんだろう？
なんだか、とても不思議な感覚だった。

例えるなら——そう。

ドラマや映画に出てくる登場人物に、心が乗り移っていた…とでもいうか。

でも『感情移入』という言葉じゃ、とても表現しきれないぐらいの感覚。

……

「まあ、それはそうとして。」
僕は一体…今、何処にいるのだろうか？

辺りは、見渡す限りの真っ暗闇。

その暗闇ぶりは、夜中に電気を消した自分の部屋の暗闇ぶりとは次元が違うレベルのもの…。 正に『無』——って感じ。

地面に立っているような…。

それでいて、フワフワ宙に浮いてるような。

これもまた、不思議な感覚。

……

「…さて。」

どうしたものかな。

正直言って、いま僕は…かなりヤバイ状況に立ってる気がする。
冷静さを取り戻すにつれ、そのヤバさを肌でビシビシと感じてる。

「……。」

体内時計では、既に30分が経過。

しかし…全くと言っていいほど、状況には変化が見られない。

もしかすると、僕はもう…死んでしまったのだろうか？

この30分の内、そんなことを考えた時期もあった。

他のことを考えた時期もあった。

……

なんだか、体に力が入らない。

生気が無くなっていく…とも言えいいのか。

自分の中にある、何かしらのパワーが消えかかっている。

このままでは——マズイ。

そう思っても、体が自由に動いてくれない。

……

「…えっ？」

不意に気が付いた。

僕の眼前に、黒いマントを身に纏った何者かがいることに。

全部で、五人。

全員共に黒いマントを身に纏い——更に、白い仮面を被っている。

「……。」

仮面は、顔の上半分だけを隠すタイプのもの。

そのため、鼻から下の部分は丸見えとなっているのだが…。

五人の内、僕は一人の男に注目する。

ある人にとっても似た雰囲気を感じるからだ。

——僕の父さん。

……

こちらを向いていた五人が、一斉にクルリと後ろを向いた。

そして…僕に背を向けたままで、歩き出す。

その姿が、遠ざかっていく。

”彼らこそ、勇者の影。”

”魔王に辿り着きたくば、彼らを求めよ。”

”それが、この世界の理由。”

「……。」

——この感じ。

頭に直接、声が響いてくる感じ……。もう何度目になるか。
慣れてきてしまってる自分が、少し怖い。

……

「……んっ？」

遥か彼方に、何か……。

光だ。

光が見える。

それが何の光であるか、などと考えるヒマはなかった。
自然と体が動き出し、引き寄せられるように……僕は光の方へ走って
いく。

<第40話> 【光明】

「おおっ、スギヤマ！ 無事やったんやな！」

光の元へと辿り着くと、ヤトフさんの大きな声が耳に入ってきた。

「お二人も、無事なようで…何よりです。」

光の中にいるヤトフさんとイシエンダさんの姿を見て、

僕はホッとため息を吐きつつ言った。

「無事…って言えるのかな？ この状況。」

「……。」

イシエンダさんのその眩きも、もつともに思える。

こうして三人が揃ったところで…今の状況を打破する術が
特に浮かぶわけでもない。

というか、状況から判断するに――

ヤトフさんもイシエンダさんも…やっぱ、あの黒い渦に
やられてしまったんだらうか？

「あの…こちらの方は？」

光の中には、僕ら以外の人間の姿もあった。

仰向けに横たわっている――四十代くらいと思われる男性。

白装束を纏ったその格好は、巡礼者とか聖職者といったものを連想させる。

そして、気になるのが：首に掛けられている、三つの鈴が付いた首飾り。

周囲を照らす光は、その鈴達から発せられているようにも見える。

「さあね……。何度も呼びかけたんだが、目え覚ます気配はなかったよ。」

「でも、息はしとるみたいやで。」

二人が言葉を言い終えるかどうか――というところ。

白装束の男性が、ゆっくりと目を開いた。

……

「大丈夫ですか？」

「：ああ。」

僕が呼びかけると、男性は僅かに戸惑った様子を見せたが：体を起こしつつ、応じてくれた、

「君達は：？　なぜ、こんな所に？」

男性が、僕らの顔を見回しながら尋ねてくる。

他の二人と軽く目を合わせてみたが、二人とも

困ったような視線を返してくるだけ。

どうやら、このメンバーの中で：今の状況をきちんと説明出来る者はいないらしい。

「そうか…。それは恐らく、黄泉魔法の一種だろう。」

ここに至るまでの一連の経緯を話してみたところ、
男性の口からそんな言葉が飛び出した。

「黄泉魔法は、地獄に存在する特殊なエネルギーを用いて発動する…
精霊術と似たような技法だ。」

僕らの様子を見て、黄泉魔法とやらを知らないと判断したのか、
男性は続けて説明をしてくれる。

「よくわかんないけどさ。結局、ここは何処なんだよ？」
イシエンダさんが、腕組みをしながら尋ねる。

「それは…私にもわからない。『閻魔の腹』と呼ばれているが…
恐らく、地獄の何処かにあたる場所だろう。」

「じ、地獄!？」

男性の言葉を聞いたヤトフさんが、驚きの声を上げる。

…

「あなたは…どういった経緯で、ここに来たんですか？」
少しの沈黙を挟んだ後、僕は男性に対して質問をした。

「それが…よく憶えていない。思い出せないんだ。」
視線を下に落としながら、男性は答える。

「何か——恐ろしいものを見たような気がするのだが…。」

「いいですよ。無理に思い出すことはありません。」

「…ああ。」

男性が頭を抱え、苦しそうな表情をし始めたので僕は腕を掴んで制止に入った。

「……。」

恐ろしいもの…か。

どちらにせよ、彼をこんな場所に送り込める能力を持った奴だ。あのミイラと同様、只者ではないだろう。

『導かれし者が危機に面した時、この鈴を鳴らせばその音は、空高く天の国まで届く。』

「この天使の鈴には、そんな言い伝えがある。」
首飾りに付いた鈴に手をやりながら、彼はそう話した。

彼の話によれば、『天使の鈴』と呼ばれるその首飾りは代々彼の家に受け継がれてきた物だという。
僕らの周囲を照らすこの光も…詳しくはわからないが、その鈴に込められた、聖なる力によるものらしい。

「導かれし者…というのとは？」

「少なくとも、私でないことは確かだよ。」

僕が疑問を口にする、彼は自嘲気味に笑いながら首飾りを揺らして、鈴を鳴らした。

……

「ここに来てから、もう何度も鳴らしてみたがね。」

ハハッ：この通り、何が起きるでもない。」

チリンチリンという鈴の音が鳴り止むと、彼はそう言葉を続けた。

「ほんなら、ウチに貸してえな！　もしかすると、ウチかもしれんで。

導かれし者っちゅうのは。」

「……。」

ヤトフさんが差し出した手に、彼は小さな笑みを浮かべながら無言で首飾りを手渡した。

……

辺りに、涼しげな鈴の音色が響き渡る。

しかし：特に何が起こるわけでもなかった。

「ヤトフさん。　今度は、僕がやってみます。」

「えっ？　おし：やってみい！　新人くん。」

——予感があった。

僕は目を閉じ、精神を集中させると：

受け取った首飾りをゆっくりと揺らしてみた。

……

「な、なんや？」

「光が：強く：！？」

目を閉じていても、はっきり感じられる。

鈴から発せられる光が、次第に大きくなっていくことを。

…

誰か…。

この鈴の音が届くのなら、僕の声に耳を傾けてほしい。
誰か――

<第41話> 【天の国のお嬢様】

——Side ???——

「お嬢様！ ……やっとお目覚めですか？」

「…うん？」

「まったく、ワシが少し席を外した隙に居眠りとは…
本当に油断ならない方ですじゃ。」

彼は呆れたような顔をして、目の前の少女に言葉をぶつけた。

世話係、フパウグ。

『ヒポンティ』という稀有なカバの獣人族であり、その体格は
目の前にいる少女とは比べ物にならない程の大きさをしている。

「お嬢様！ 聞いておられるのですか！？」

「あっ…う、うん。」

そして、ついさっきまで深い眠りの中に落ちていた

椅子に腰掛けている長い金髪の少女。

コリンという名のその少女は、ここ天上界では著名な人物と云える。

「さあ：目が覚めたのなら、勉強の続きと参りますぞ。
居眠りした罰として、勉強時間は30分延長ですじゃ。」
「なにゃッ!? そんなの、聞いてないよ〜!」

「口答えするのなら、おやつのレストランまで
没収させてもらいますぞ。」

「なっ：!?!? そ、それだけはお許しを!」

……

二人のこういった言い争いは、日常茶飯事だった。
いつものように、コリンは渋々ながらも
フパウグの言葉に従おうという姿勢を見せる。

「それでは、219ページを開くのですじゃ。」
「……。」

しかし、今回は少し様子が違った。
本のページを開こうとしたコリンの手が、ピタリと止まったのだ。

「お嬢様？」
「……。」

毎日のように顔を付き合わせているフパウグは、感付いたようだ。
何か様子がおかしい――と。

……

「ごめん、フパウグ。 ちょっと行ってくる!」
そう言うや否や、コリンは椅子から立ち上がり：
あっという間に部屋から飛び出てしまった。

階段を駆け下り、一直線にその部屋へ向けて走り出す。
途中、何事かといった様子で屋敷の中の住人達に
呼び止められそうになるが、そこは全て無視している。

「……。」

部屋の扉の前に立ち、コリンは軽く息を整える。
そして、一度深く深呼吸をし…その扉を勢いよく押し開いた。

「ノックもせず入って来るなんて…礼儀を知らない子ね。」

何かの書類に羽根ペンを走らせていた手を止め、
彼女は来訪者に向かって言い放った。

「母上…。 あ、あの…。」

「今は、お勉強の時間の筈でしょう？ 早く、自分の部屋に戻りな
さい。」

うまく口が動かないコリンに、彼女は憮然とした態度で接する。

「母上！ 折り入って、お願いがあるのです！」

「…お願い？」

「今すぐに、下界への扉を開いてくれませんか!？」

……

彼女は羽根ペンを筒の中に収め、コリンに鋭い眼差しを向ける。
するとコリンは、一瞬ビクッと小さく体を震わせた。

「何を言い出すかと思えば……」

言葉を紡ぎながら彼女は立ち上がり、コリンのすぐ傍まで歩み寄る。
「私も忙しいの。冗談言ってる暇があるのなら、早く戻りなさい。」

「……冗談なんかじゃ、ありません。」

その威圧感に耐え切れず、視線を床に向けながらも
コリンは必死で言葉を絞り出した。

「行かなければ……。どうしても、行かなければならないのです！」

……

「一体……どうしたと言うの？」

彼女の心に、困惑の念が湧き上がる。

これ程まで自分に対して、娘が激情した姿を見せるのは
もしかすると、今回が初めてのこともしれなかったからだ。

「誰かが、助けを求めているのです。」

誰か、きっと——私の大切な人が。」

「……。」

突拍子もない話。

ましてや、あのコリンが言い出した話。
簡単に信じることは出来ない。

ヴエンゼクト
「神聖魔法。」

そう思いながらも、コリンの母——アロネンデは、魔法の詠唱へと入った。

それと同時に、二人が立つ屋敷の庭園内には
独特の張り詰めた空気が広がり始める。

オーゴエール
「天地連結。」

「……。」

庭園内にある虚空に、直径2mはあるかと思われる、青い光の渦が発生。

数年振りに見たその光景の迫力に、コリンは息を呑む。

……

「どうしたの、コリン。 急ぎの用事なんでしょ？」

「えっ、あッ……。 は、はい。」

「くれぐれも、扉の位置は忘れないようにね。」

……

「母上：行って参ります。 それと——ありがとうございます。」

黙って光の渦の方に目を向けているアロネンデに、

コリンは意を決した口調でそう言い残す。

そして、渦に向けて駆け出した。

「この扉の停滞維持をお願いします。 それと……あの子が帰ってきたら、

すぐ私の元へ来るように――と。」

「∴かしこまりました。」

従者に命令を下すと、彼女は屋敷へと歩みを進める。

胸にある言いような不安など、微塵も感じさせないようなしっかりした足取りで。

<第42話> 【愚宴樹】

——Side 杉山榛名——

彼は、ニフレイという名前らしい。

そして、なんと…自分は天上界で暮らしていた天使だという。

しかし——そんな話に驚いていたのも束の間。

続けて彼がしてくれた話。

それは、この『閻魔の腹』についてのことだった。

この空間に入ってしまった場合…通常の人間ならば

30分と待たずに、魂が闇と同化してしまう。

要するに——死んでしまう。

僕ら4人は、この不思議な光の中にいるため

その…魂が闇と同化していくスピードというのが、
急激に抑えられているらしいのだが。

「少し前に、人間の魂が一つ消えていく気配を感じたよ。
恐らくは…それがクアゴという男のものだろう。」

ニフレイさんは渋い顔をして、話をこう締め括った。

「……。」

「そんな……。」

鈴の音が響き渡る中、重苦しい雰囲気が漂う。

「つちゅうことは、あいつも……。」

「……あいつ？」

ヤトフさんがガツクリとうなだれながら呟いた台詞に、
イシエンダさんが反応を見せる。

……

「こうなったら、もう隠しててもしゃあないな。」

実は、つい数日前に……ウチの友達も、同じ目に遭つとるんや。」

他のメンバーの顔をざっと見渡した後、ヤトフさんは喋り出した。

「よく知らへんけど、ここら辺には凄いお宝が眠ってる……
とか言われてな。その友達に誘われて、ウチとそいつで
この湿原まで足を踏み入れてしまうたんや。それで……。」

「……。」

ヤトフさんの話を聞き、心の片隅にあったわだかまりが
サラサラと消えていく思いだった。

彼女に見られた、違和感ある言動の数々は……そういうわけだったの
か。

「おい、ちょっと待てよ。」

イシエンダさんが、何やら苛立ったような声を出した。

「ひょっとして…お前も言われたんじゃないか？」

『代わりの生贄を連れて来い』ってさ。」

「そ、それは…。」

イシエンダさんが尋ねると、ヤトフさんは怯えたような反応をする。

「きゃッ…！」

「そういうことかよ。」

イシエンダさんが服の襟を掴み、ヤトフさんを思い切り引き寄せる。
その目には、明らかな怒りの色が感じられた。

——Side ???？——

「うわぁッ…この空気。」

『扉』をぐり抜けた先。

下界のホエール湿原へと降り立ったコリンは、
鼻と口を軽く手で覆いながら呟いた。

「あんまり、長居はしたくないね。」

不快感を見せながらも、その表情には凜としたものが窺える。
言葉を言い終えると同時——彼女の背中の翼が開いた。

…

目を閉じ、心を落ち着けると…はつきり聞こえてくる、鈴の音。誰とも知れないが、自分に助けを求める音。

「…行こう！」

コリンの翼がはためき、その体が宙に浮き上がる。

そして、音がする方角に向け、彼女は移動を開始した。

「だ…誰ッ!？」

移動を開始してから、僅か数分。

泥の上を歩く人影を見て、コリンは目を見開いた。

フードの付いた黒いローブを身に纏い、おぼつかない足どりで歩みが続けている、その人物。

すぐ傍にいるコリンの存在には、まるで気付いていないような様子だ。

（生きては…いるみたいだけど。）

青白い肌に、虚ろな目。

その表情からは、まるで生氣を感じられない。

（でも、邪悪な気も感じられない…かな？）

この一帯に漂う、強烈な『負』の気配。

それに侵されている様子が、全く見られないということだ。

「…ごめん。 あたし、先急ぐから。」

そう言い残すと、何か引っ掛かるものを感じながらもコリンはその場を立ち去った。

頭に鳴り響く鈴の音に導かれるまま、湿った空気の中を移動していく。

そんな中、彼女はあることに気付いた。

「段々：強くなってる。」

音のする方へ近付くたび、負の気配が増している。

それに比例するかのように、霧の濃さまで増しているようだ。

「……。」

この先に、何かがある。

それだけは間違いないようだった。

「これ……。」

彼女の眼前にそびえ立つもの。

それは、巨大な枯れ木。

真っ黒な樹皮で覆われ、無数に生えた枝は

グニャグニャと不規則に伸びている様が窺える。

その姿を目の当たりにし、コリンは不気味と思わざるを得なかった。

「これ、まさか：愚宴樹？^{ぐえんじゆ}」

彼女の口から、そんな言葉が洩れる。

愚宴樹とは、嫉妬や憎悪といった負の感情が

一つの木に蓄積されていくことで生まれる、変異植物。

そこから発せられる特殊なオーラには、邪悪なものを引き寄せる力があるとも云われている。

「ここら一帯のイヤな空気は、これのせい……ってわけか。」
呟きながら、彼女は木の周囲を歩き始める。

……

「……なんだ？　これ。」

丁度、木の裏側に回り込んだところ。

幹の真ん中に、大人一人が楽に入れそうなほどの穴があった。

「うッ!？」

その穴から流れ出す空気を感じ、コリンは反射的に後ずさった。

「この感じ……。まるで、地獄にでも繋がってるみたい。」

自分の口から出たその言葉に、彼女はあることを思い出す。

愚宴樹には、地獄に存在する『閻魔の腹』と呼ばれる場所へ繋がる扉を創り出すものもある。

いつだったか本で読んだ知識を思い出し、彼女は再び穴に目をやった。

……

「鈴の音……。この穴の奥から、聞こえてる。」

しっかりと耳を澄ませて音を聞いた後、彼女はそう確信した。

……

「ここまで来たら、行くしかないか。」

穴の中へ飛び込むことに対する、不安…恐怖。

コリンを襲うそれらの感情は、尋常なものではなかった。

しかし、それらを含めたとしても——もはや、彼女の頭には穴の中に飛び込むという選択肢以外は存在しない。

右手に持った杖をしっかりと握り締めると、彼女は穴へ向かって足を踏み出した。

”面白い客が…来たものだ…”

「——ッ!？」

すぐ傍に何者かの気配を感じ、コリンは周囲を見渡す。

霧の中、目を凝らせば…彼女の目に、ユラリと宙を漂う人影が映った。

<第43話>

【Shine Magic】

——Side コリン・イメラ——

風切り音と共に、鎌の刃が首元目掛けて振り下ろされる。
身を屈めてそれをかわすと、あたしは空中へと舞い上がった。

「……。」

汚れた灰色のローブを着て、鎌を持ったミイラの姿。
その体からは、愚宴樹と似た負の気配を感じる。

「あなた…誰？」

どう見ても、普通の人間には見えない。

魔法の類で操^{たぐい}られているのか、あるいは——

” 我は…ルオネ族。 名は…フアナデイン。 ”

ルオネ族？

どっかで聞いたことあるような…ないような。

” その聖なる魂…貰い受ける…。 ”

ヤツの体に、どす黒いオーラが集まり始める。
そのオーラはやがて、幾つもの触手のような形状をとり――
あたしに向かって、その触手を伸ばしてきた。

……

空中を変則的に飛び回りながら、触手を避けていく。
でも…この数とスピードで来られちゃ、逃げ回るのにも限界があり
そう。

「ヴェンゼクト神聖魔法。」

杖の先端の宝珠に、魔力を集め始める。
宝珠が白く輝き出す。

「ネスタ光刃！」

杖の先端に現れた光の刃で、触手を薙ぎ払った。
刃に触れた触手は、跡形も無く消滅する。

「誰だか知らないけど…。」
触手を薙ぎ払いつつ、あたしはミイラに向かって滑空していく。
「邪魔するんなら、容赦しないよ。」

早くしないと――
早くしないと、先輩が…。

ガキイイツ

振り下ろされた鎌とあたしの杖がぶつかり合い、鈍い音が鳴る。
あたしはすぐさま体勢を整えると、光刃^{ネスタ}を相手の胴体目掛けて振り
払った。

……

”…黄泉魔法^{レマニクル}。”

後ろに下がり、サッとあたしの攻撃をかわしたミイラ。

直後——何かの魔法の詠唱に入る。

黄泉魔法^{レマニクル}？

こいつ、やっぱり言うか…地獄と関わりあるヤツか。

”屍骨操^{デスラケイジ}。”

「…ッ！」

地面から突然、何体もの骸骨が姿を現す。

前からも、後ろからも、横からも——八方塞がりというヤツだ。

一体の骸骨が、あたしの体に触れようかという瞬間。

あたしは翼を羽ばたかせ、上空へと浮きあがった。

「こんな術…あたしには意味無いよ。」

案外、頭の悪いヤツね。

「——えっ？」

いない。

あたしが目を向けた先に、アイツの姿はなかった。

「しまっ…！」

ブウンッ

背後からの攻撃を、間一髪で避ける。

でも：マズイ！

あたしが体勢を立て直す前に、ヤツはもう鎌を振り上げていた。

「うぁッ！」

首を狙われるかと思い、防御の姿勢をとっていた。

しかし——狙われたのは、翼。

ドシャアッ

翼を斬り落とされた痛みと共に、結構な高さから

地面の上に叩き付けられる。

地面はぬかるんでいるから、落下のダメージはあまりないけど…。

「痛ッ…。」

傷から感じる鋭い痛みは歯を食いしばりながら、

あたしは体を起き上がらせた。

痛みでなんだか頭がクラクラするあたしに向かって、

泥にまみれた骸骨達が近寄って来る。

あのミイラは、高見の見物とでも言わんばかりに

さっきいた場所から動こうとしない。

「…ヴェンゼクト神聖魔法。」

凄くピンチ。

ピンチだけど——チャンス。
ヤツは、完全に油断している。

……

「無辺光ッ！」
リハナテイス

リハナテイス
無辺光。

闇を掻き消す光系魔法の中でも、最上級の魔法。
練習以外で使ってみるのは、これが初めてだけど——

”これ…は…?”

「ハアッ…ハア…ッ。」

全身から力が抜け落ちたような疲労感。

あたしは両手を膝に付いて、なんとか呼吸を整える。

もう動く気配がなくなった骸骨達の間を抜けながら、
愚宴樹の近くへと歩み寄っていく。

そこには、地面に倒れているあのミイラの姿があった。

……

杖の先で、チヨイチヨイと触ってみる。

全く、何の反応も無い。

「まあ…このコリン様に…かかれば………こんなものね。」

動かなくなったミイラを見下ろしながら、呟いた。
息が切れてるんで、あんまりカッコよくなかったけど。

「そ、そうだ!」

こんなヤツのことを気にしている場合じゃない。
あたしには、まだやるべきことがある。

愚宴樹にある穴の中を覗き込む。

何度見ても、寒気がするような…暗い、暗い穴。

「あれっ?」

なんだか、さっき見た時よりも…穴が小さくなってるような。
もしかして——さっき、無^{リハナ}辺^{テイス}光を使ったせい?

いや…そんなこと気にしてる場合じゃないよね。
今はとにかく、急がないと!

<第44話> 【脱出】

——Side 杉山榛名——

「……。」

空気が、これ以上無いくらいに重苦しい。

光の中にいるけれど、周囲にある闇が心に侵入してきそうな…
そんな雰囲気さえ感じる。

……

まあ、話を要約するのなら。

ヤトフさんが言っていた、この村にニッポン人がやって来たという
情報は

真っ赤な嘘だったらしく…。

そして、そんな嘘を吐いて僕をこの村に連れて来た理由が——

「ヤトフさん。」

「……。」

傍に近付き話しかけると、彼女はビクッと肩を震わす。

そして、気まずそうな表情で僕に顔を向けた。

「そんな顔しないで下さい。僕は、怒ってなんていませんから。」
「……。」

「事情が事情ですからね。ヤトフさんの行動、正しいとは言いませんが……」

「気持ちには、充分にわかります。」

目を逸らし、やがて俯いてしまった彼女に向けて自分の気持ちをしっかりと伝えていく。

「アタイはわからないね。友達助けるためだったら、見ず知らずの奴の命ぐらくれてやる……ってか？」
さっきと変わらず、苛立ちを隠せないような口調でイシエンダさんが話し始める。

「クアゴって奴も、お前のそんな身勝手な思いのせいで死んじまったようなもんだ。……ったく。」

「それはまた、別問題ですよ。」

言葉を返した僕に向かって、イシエンダさんは少し驚いたような顔を見せる。

何か言いかけようと、口が開きかけたように見えたが……複雑そうな表情をして、彼女は僕から目を逸らした。

「ウチ……どないしたらええんやろ？」

今にも零れ落ちそうなくらい目に涙を溜めながら、ヤトフさんが呟く。

「僕が決めてもいいんですか？」
そう問いかけると、彼女は少しの間を挟んだ後

僕を横目で見ながら、コックリと小さく頷く仕草を見せた。

「おい：君達。　　なんだか、首飾りの様子が変だ。」
久しぶりに口を開いた、ニフレイさん。

彼の言葉を受け、僕らは一斉に鈴が付いた首飾りの方へと目をやった。

フワフワと宙に浮いていた首飾りが、まるで意思を持ったかのように
ゆっくりと空中を漂い始めている。

相変わらず、チリンチリンと涼しげな音を鳴らしながら。

「これって…。」

僕は、ニフレイさんを自分の背中に乗るように促す。

彼は少し困惑気味な様子だったが…

特に何も言わず、僕の誘導に従ってくれた。

首飾りが、空中を移動していく。

それに伴い、首飾りを中心とした光の空間も動き始める。

「光の中から体が出ないように、気を付けて下さい。」

「あ…ああ。」

傍にいたイシエンダさんに注意をし、続けてヤトフさんの姿を探す。

「ヤトフさん！」

「へっ？　わっ…わ、わわっ!？」

見るとヤトフさんは、今にも光の空間から
体はみ出そうになっていた。

「なにポケットとしてやがんだ！」

「ゴメン。」

イシエンダさんが慌てて駆け付け、ヤトフさんを引っ張ってくる。

「まずは、テメエの命から守っていかないと。死んじゃったら、謝ることも…償うことも出来やしねえ。」

「…うん。」

二人の様子を見て、大丈夫そうだと判断した僕は正面に向き直り、歩き始める。

…

首飾りは、まるで僕らを何処かに案内しようとしているかのように闇の先へ先へと向かい、移動していく。

——予感があった。

この首飾りが導く先には、きっと…。
きっと、誰かが待っている。

「こっちこっち！ こっちですよ、先輩！」

誰かが、叫んでいる。

向こうに見える…光に包まれた、金髪の少女。

その側には――何だろう？ 闇の中、ポツカリと開いた複雑な色合いをしている穴のようなものが見える。

「誰だ？ アイツ。」

「……。」

イシエンダさんから疑問の声が上がリ、僕はみんなの顔に目をやる。しかし…その答えを知っていそうな人間は、いない様子。

「さあ、早く！ ここから脱出して下さい！」

少女はそう叫びながら僕の背中を押し、闇の中にある謎の穴の中へ入るよう促す。

「あの…あなたは？」

「説明は後です！ まずは脱出！」

少女の剣幕に、とりあえずは言う通りにするべきだと判断。

僕は意を決し――ニフレイさんと共に、穴の中へと飛び込んだ。

……

青紫色の、なんだかグニャグニャとした奇妙な空間。

ほんの数瞬、それを感じた後

「……。」

気が付けば、周囲の景色は一変。

ぬかるんだ地面と濃い霧が立ち込める…恐らくは、ホエール湿原の

何処かと思われる場所に立っていた。

「わっ！ …とつとと。」

後ろを振り向くと、ヤトフさんが体のバランスを崩したのか地面に手を付いている場面があった。

そして、彼女の後ろに——何やら、巨大な枯れ木らしきもの。

そして、その幹にある…大きな黒い穴。

…

その穴から…イシエンダさん。

続いて、あの金髪の少女が出てくる様が見てとれる。

出る——というより、飛び出るといった表現が正しいかもしれない。

「凄い…。ウチら、元の世界に戻ってこれたん？」

「…みてえだな。」

ヤトフさんとイシエンダさんが、辺りの様子を見回しながら言葉を交わす。

「ところで、あなたは…？」

脱出も終わったことなので、改めて金髪の少女に声をかける。

「説明は後です！ 早く、ここを離れましょう！」

<第45話> 【君から始まる物語】

湿原と森を抜けた僕らの前に、澄み渡った青空がある。
どうやら、何処かの丘の上にでも出たようだ。
ガライブ村の家々も、薄い霧を通して確認出来る。

「それじゃ…あたし達はここで。 皆さん、お元気で。」
金髪の少女——コリンさんとやらが、口を開く。

ここまでの道中に、少しばかりだが話は聞かせてもらった。
彼女も、ニフレイさんと同様…天上界に住む、天使であるということ。

鈴の音が聞こえたので、慌てて駆け付けてくれたということ。

「じゃ、行きましょう。 おじさん。」
「…ああ。」

二人共かなり疲れた様子を見せながら、僕らに背を向ける。
コリンさんの背中にある、切断された翼の傷跡は…特に痛々しく見える。

「ああ、そうだ…。 ちょっと待ってくれ。」
そう呟きながら、ニフレイさんが再び僕らの方を振り返った。
首に掛けた首飾りを外しながら、こちらに歩み寄って来る。

「この天使の鈴は、君が持っていてくれないか。」

「…えっ？」

「この鈴に変化をもたらしたのは、恐らく君の力だと思う。だとしたら君は…私の命の恩人だ。」

彼は言葉を紡ぎながら、首飾りをそつと僕に差し出した。

僕は自然と、飾りに付いた三つの鈴に目を奪われてしまう。

「だから、まあ…お礼というところかな。」

「……。」

彼の気持ちを汲み、首飾りを受け取る。

するとなんだか、不思議な力が体に流れ込んでくるような気がした。体の中に光が満ちていく——とでもいうか。

「行ってしもたな。」

「…はい。」

まだ聞きたいことは、色々あった気もするのだが。

なんだかうまく口が動かず、そのまま彼らを見送ってしまった。

「天使ってのは、ホントにいるもんなんだな。」

「…はい。」

そういえばニフレイさんの背中には、翼らしきものは見当たらなかった。

天使といえど、必ずしも翼が有るとは限らないのだろうか…？

そこどころ、どうなのだろうか。

「はぁ…。」

「…ふう。」

「……。」

ヤトフさんもイシエンダさんも、気が抜けたようなブーツとした顔で何を見るという感じでもなく、遠くに視線をやっていた。

それに習い、僕も丘の下に見える村の家々をブーツと眺める。

「ほな…帰ろっか？」

ヤトフさんが眠たそうな目を向け、僕らに言った。

「そうだな。婆ちゃんも心配してるだろうし。」

…

「なにブーツとしてんだ。行くぞ、スギヤマ。」

「あっ…はい。」

イシエンダさんに腕を引っ張られ、僕は足を踏み出した。

——その時。

「……。」

森の方で、何かが動いた気配がした。

何か、人影らしきものが見えたようにも思える。

「おい、どうした？」

「…いえ。何でもありません。」

ノナさん、イシェンダさんに挨拶を済ませた僕たちは村の隅に止めてある馬車の元へとやって来た。

僕らの姿を見るなり、二頭の馬がヒヒヒーンといもなく。

「そういえば、考えてみたら……。」

一頭の馬の体を撫でながら、ヤトフさんは口が開いた。

「ウチらだけじゃ、馬車動かすんは無理とちゃう？」

「……ですよね。」

僕も、さっきから言おうかと思っていたところだ。運転手であるクアゴさんが不在の今、僕らに果たしてこの乗り物を操ることが出来るものなのか——と。

「適当にやったら、なんとか運転出来るもんかな？」

「……。」

どうだろうか。

なんとか出来ないこともない……という気もするが。何しろ、一日かかる距離だからね。

「というか、まず……帰る道筋、わかります？」

「ン」。多分、あっちの方へバーツと行けばいいと思うんやけど。

「僕」の質問に、遥か彼方を指差しながら答えるヤトフさん。

「……。」

彼女のアバウト過ぎる発言に、僕は再び考えを巡らす。
やはり、誰か——第三者の助けが必要な気がしてならない。

「あっ…そうや！ スギヤマ、その鈴でもういっぺん
天使さん呼んでみたらどうや？」

ヤトフさんが閃いたとばかりに、僕が身に付けてる首飾りへと目をやる。

「しかし…ついさっき、助けてもらったばかりですよ？」

「ええやんか。 ついさっき助けてもろたんなら、オマケで
もういっぺん助けてもらお。」

……

二人の後ろ姿。

翼の傷跡——隠しようのない疲労感。

記憶に刻まれたその光景を思い出し、胸が痛む。

「……。」

やっぱり、オマケで助けてもらうってわけにもいかない。

ここはなんとか、僕らの力で乗り切らなければ。

「村の人の中で、馬車を扱える人がいないかどうか…探してみましよう。」

僕がそんな提案を話すと、ヤトフさんは眉をひそめる。

「うーん…おらへんと思うで？ こんな田舎じゃ、馬車なんて
使ったことあるヤツおらへんって。」

「僕なら、運転出来ますよ。」

「…えっ？」

突然の第三者の声。

僕とヤトフさんは、同時に声がした方へ振り向いた。
そこにいたのは――

白いワイシャツに、迷彩柄のズボンを着た男性。

身長は：180cmぐらいあるだろうか。

右腕に何か、黒っぽい衣服のようなものを抱えているようだが。

「だ、誰や？ あんた。」

ヤトフさんが、男性に尋ねる。

「僕は…。」

” 出会いと別れは、表裏一体なもの ”

髪は金髪。

金髪…ではあるのだが。

どうも顔立ちは、外国人っぽく感じられない。

ひょっとして――

” 一つの別れが、一つの出会いをもたらし ”

「僕は、慎吾といいます。」

” 物語は続いてゆくのです ”

気が付けば、森の中で倒れていた。
それまでの記憶はない。

どうして自分が、こんな場所にいるのか。
そもそも、自分は何者なのか。

何一つわからぬまま、森の中を彷徨い続けていた。
憶えているのは…自分の名前だけ。

「……。」

馬車の小窓から、彼の背中を見つめる。
記憶を失くしたと語る男——シンゴさん。

見る限り、馬車の運転はキチンと出来ているようだ。
道筋はわからないのか、たびたび停止しては
僕らに道を尋ねてくるようだが。

「なんか、怪しさ爆発って感じのアンちゃんやな。」
あぐらをかいて座ってるヤトフさんが、訝しげに口を開く。

「スギヤマ…ちゃんと見張っとり。目え離すと、何しだすかわからへん。」

「…はい。」

ヤトフさんに言われずとも、僕は彼から目を離す気にはなれない。それはもちろん、彼が素性不明な男だから…というのも、理由の一つだが。

それ以上に――

「あの…シンゴさん。」

馬車の停止中。

僕はヤトフさんの目を盗み、彼に話しかけた。

「あなた、ひょっとして…日本人じゃないですか？」

そう質問してみれば、彼は驚いたような顔をして僕の方を振り返った。

「僕も、そうなんですよ。」

ここから先の台詞は、言うのに多少躊躇する。

しかし、思ったよりも自然に言葉が続けることが出来た。

「ある日突然、朝起きたら――こんな世界にいたんです。」

「えっ…!？」

…

「僕も…僕も、そうなんだよ!」

彼は大きく目を見開き、感極まったように言った。

「あの日は、仕事長引いちゃってさ。 帰ってくるなり

ベッドにダイブして、んで眠っちゃったら…。」

「目を覚ました時は、この世界にいた——と？」

僕の問いかけに、彼はウンウンと頷く。

『あの日』という表現をしてるからには、恐らくこの世界に来てから少なくとも一日以上の時間が経過している——と考えてよさそう。まあ、時間の感覚は色々と変になってるらしいから…

一概には言い切れないんだけど。

「…何をコソコソ話しとんのや？」

背後から聞こえたヤトフさんの声に、僕はすぐさま振り返る。

「なんや、道忘れてしもたん？ そんならそうと、はよ言いや。」

苦笑いを浮かべながら、彼女はシンゴさんに近付く。

今の話は…聞かれてないよね。

「ここは右行って——次の分かれ道も、また右や。

そっからしばらくは、一本道。ほんなら、よろしく。」

「…あいよ。」

ヤトフさんの言葉に、シンゴさんは誤魔化すように笑みを浮かべる。

「この話は、また後で…。」

「うん。その方がよさそうだね。」

彼女が馬車の中へ戻ったのを見届けた後、言葉を交わす。

「それにしても…どうして、馬車の運転なんて出来るんですか？」

僕も、馬車内へ戻ろうかと思った寸前。

聞かずにいられなかったので、聞いてみた。

「いや…もちろん、やったことなんてないよ。でも、こうして手綱握ってみたら…いつの間にか、コツ掴んじやったみたいでさ。」
ニツと笑いながら、シンゴさんはおかしそうに答える。

「それは凄いですね。」

なんとも、物覚えが早い人だ。

確かに、思い起こせば…出発した当初は、なんだかジグザグに走ったり

ペースの緩急が激しかったり—といった感じがあったような。

——Side ヤトフ・ジュニエス——

「なあ、スギヤマ。」

「はい。」

「そんで結局、ウチ…どないしたらええん？」

心の準備を済ませてから、ウチはスギヤマに話しかけた。

道が荒れとるんか、なんや馬車はガタガタ揺れながら走っとるけど…。

ま——静か過ぎるんもキツイから、別に気にせんでええか。

「……。」

「…えーっと。」

袋の中に手をつっ込んで、何かを探しとるスギヤマ。
…何を出すつもりやろ？

……

数秒経ち、スギヤマが袋から取り出した物。
遠目からじゃようわからなかったので、近寄って見てみる。

「なんや…ライオン？」

「正解です。」

それは、ライオンみたいな形に作られてる木彫り細工。
見たところ、あんまり良い出来って感じはせえへんけど。

「これは、弟さんにプレゼントするために…クアゴさんが
作っていたものなんですよ。」

ウチの目をジッと見つめながら、スギヤマは話す。

「リシャーナまで帰ったら、僕はこれを持って…クアゴさんの家を
訪ねようかと思っています。」

「……。」

「その時に、ヤトフさんも一緒に来てほしいんです。」

正直、聞いてて辛い話や。

でも不思議と、話をすんなり受け入れとる自分もおる。

「もちろん、行かしてもらおうで。」

「ありがとうございます。」

……

「って——それだけ？」

妙な沈黙を挟んだ後、ウチは首を傾げる。

「それだけだと、不満ですか？」

「いや、不満ちゅうか……うん。」

それやったら、あのクアゴっちゅう奴のために何かしたことはないけど。

スギヤマに対して、何か償いしたことにはならへんような…。

「それじゃあ、もう一つ。 お願いします。」

ちょこっと考える仕草を見せた後、スギヤマは右手の人差し指をピンと立てながら言った。

「辛い時は、遠慮なく僕に話しかけて下さい。」

「…へっ？」

「今回の事絡みで悩んでる時でもいいし、それ以外の時でも構いません。」

とりあえず…何にしろ、一人で抱え込まないこと。」

…

しっかりと——。

気持ちがかもってるって、しっかりと伝わってくる話し方。ウチもゆっくり…しっかりと、その言葉を受け止める。

「あんた、ホンマに変なやつちゃなあ…。」

目頭が熱くなるんを堪えながら、からかうように言う。

「よく言われます。」

相も変わらず、無表情なままのスギヤマ。
でも、なんか…今は微笑んでるように見えた。

【キャラクター紹介／第2章】

※注意…第2章（第26話～第46話）における物語の内容が含まれています。

杉山 榛名

本編の主人公。

伯母の片桐まりやの家で暮らし、桜雪高等学校の一年生として生活を送っていたが、ある日突然にオルワデイスで目を覚まし、様々な思惑を抱きつつ奇妙な世界を見て回っている。

ヤトフ・ジュニエス

フォーマス第六警備所に務める警備員。

ケヴィンを通して榛名に日本人の情報を伝え、その後共にガライブ村へと行くよう促した。

武器はヌンチャクを使用している。

クアゴ・ロジック

リシャーナの町長の家で、馬車の運転手を担っている青年。
手先が器用らしく、料理や木彫り細工などが得意。

満月の夜、骸骨の群れから逃げて辿り着いたホエール湿原で
ファナデインと遭遇。 閻魔の腹へと引き摺り込まれた。

イシエンダ・ブアミ

ヤトフの友達で、ガライブ村に祖母と二人で暮らしている女。
父親は狩人だったらしく、幼い頃は自身も狩りを行っていた様子。
榛名から謎のミイラの話聞かされると、かつて父親が使っていた
黒曜石の槍を持ち出し、共にホエール湿原へと向かった。

ノナ・ブアミ

イシエンダの祖母。

フィロメロやルオネ族についての話を榛名たちに聞かせた。
ガライブ村で起こっている異変を『魔の瘴気』の仕業と考えてい
る。

ファナデイン

ルオネ族。

灰色のローブを纏い、体はミイラのように朽ち果てている。
レマニクル
黄泉魔法に加え、宙を自在に動き回ったり

バリアのようなものを張っていたりと、多様な能力を持つ。

ニフレイ・スナーロ

天上界に住む天使。

何者かの手によって、閻魔の腹へと送り込まれたらしい。

鈴の付いた首飾り『天使の鈴』を持っており、それが榛名たちを閻魔の腹から抜け出すためのキーアイテムとなった。

コリン・イメラ

天上界に住む天使。

鈴の音に導かれるまま地上へと降り立ち、ファナデインを撃破。その後、閻魔の腹にいる榛名たちを救出した。

＜第47話＞ 【リアリティ】

――Side 杉山榛名――

「あれから、もう一週間かぁ。」

青く澄んだ空を見上げながら、シンゴさんが呟く。

「この町での暮らしは…もう慣れましたか？」

すれ違う人々の姿をなんとなく観察しながら、僕は尋ねる。

市場は今日も、賑やかな様子だった。

「うん。 なんとか、うまくやってるよ。」

「そうですか。」

シンゴさんは、村長さんの家に住み込みで働いている。

村長さん達からすれば、彼はクアゴさんの居なくなった穴を埋めるような感じの存在となっているようだ。

「っていうか君だって…この町に来て、まだ間も無いんでしょ？」

「まあ、そうですけど。」

「なんか…すっかり馴れ親しんでる感じがする。 凄いな。」

出会ってから毎日、僕はこうして彼と話す時間を作っている。
年齢の差は結構あれど、そこは同じ境遇に遭ってる者同士――
打ち解けるまでに、大した時間は掛からなかった。

「……。」

それにしても……どういことだろう？

こうして、彼と一緒にいる時。

なぜか知らないけど、頭の中にある人物の姿が浮かぶ。

顔、身長……性格、雰囲気。

どれもこれも、決して似ているとは思えないんだけど。

なぜだろう。

どうしてこんなに――父さんが頭を過ぎるんだろう。

「おはよう！ ハルナ兄ちゃん。」

元気の良い声で挨拶をしてきたのは、一人の少年。

先のとんがった帽子を被った、いかにもやんちゃそうな子供だった。

「うん、おはよう」

「んーと……こっちのおじさんは？」

僕が挨拶を返すと同時、彼の視線はシンゴさんへと向かう。

「お、おじさん……。」

「この人は、僕の友達のシンゴさん。」

何やらシヨックを受けてる様子のシンゴさんを気にしつつ、

僕は少年の質問に答えた。

「シンゴさん？ えっと、それじゃあ……」

「うん。 クアゴさんに代わって、屋敷で働いてるのは…この人。」

少年の表情が、複雑そうなもの変わる。

が…数秒もしない内、彼はまた頬をほころばせた。

「ぼく、セラッタといいます。 よろしく、シngoさん！」

見ているこっちまで元気になりそうな笑顔で、少年は言い放つ。

——強い人だ。

「うん…。 こっちこそ、よろしく！」

シngoさんもまた、一瞬だが複雑そうな顔をした。

しかし、すぐさま満面の笑みを浮かべ、少年に挨拶を返した。

勘のいい彼のことだ。

セラッタくんが何者であるかは、もう察しているんだろう。

この少年が…クアゴさんの弟だったこと。

「ねえ、その手に抱えている物…なに？」

シngoさんが、少年の腕に抱えられた物体に目をやる。

見たところ、何か丸っこい…布？ のようなもの。

「ボールだよ。 これで、サッカーするんだ。」

「へえ…サッカー？」

少年の返答に、シngoさんは少し驚いたような表情。

こんな物をボール代わりにして、サッカーをすることにか…

あるいは、サッカーというものがあること自体に驚いたのかも。

「僕らも、入れてもらっていい？」

そんな言葉が、自然と僕の口から飛び出していた。
それを聞いたセラッタくんは、嬉しそうに僕の顔を見上げる。

「ついてきて！ こっちに、広い空き地があるんだ！」
セラッタくんが、その言葉と共に走り出す。

……

「行きましょう。」

「…うん。」

穏やかな笑みを浮かべるシンゴさんと、顔を見合わせる。
そして僕らは、少年の後を追って走り出した。

しかし、今更なんだが…困ったことになった。
何がって、それは——シンゴさんの存在だ。

幾度となく考え続けた疑問。

『ここ』が、夢の世界であるか否か。

今一度、僕はしっかりと考えてみることにした。

「……。」

まず、考えられること。

それは、彼もまた…僕の頭が創り出した、単なる虚像であるという
説。

この説が当たっているならば、『ここ』はやはり夢の世界だという可能性が高くなってくる。

アレもコレもソレも、ただ夢の中で起きた出来事——となる。

「……。」

でも僕は、正直言って…この説を信じる気になれない。

理由は単純だ。

彼の存在が、あまりにリアリティ溢れるものだから。

ベントさん、ジウさん、ミューレさん——

この世界で出会った、様々な人たち。

その中でシンゴさんは、別格のリアリティを感じさせる人なのだ。

「ハルナくんってば！」

「……。」

突如、耳元で大声が発せられた。

宙に浮かんでいた意識が、一気に体に舞い戻る。

「まったくもう！ 何度呼んでも、反応ナシなんだもん。」

「…すいません。」

振り返れば、そこにはジウさんとミューレさんの姿があった。

どうやら二人の存在を感じとれないほど、考え事に没頭していたらしい。

「えっと、何か御用なんですか？」

「いや…別に。休憩室覗いたら、キミが本棚の側でボーッと立ってるもんだからさ。何してんのかな〜と思って。」

ふむ…。

何もせずブーツとつつ立ってるといのは、僕にとっては別段珍しいことではない。

ブーツとつつ立ってるわけだから、何もしてないわけじゃないんだし。

「そうだ。ボク達、今から戦闘の訓練するつもりなんだけど…よかったら、キミも付き合ってくれない？」

「戦闘——訓練？　ですか。」

「どうせヒマしてたんでしょ？　ほら、行こ行こっ！」

返事も待たず、ジウさんは腕を引っ張って僕を連行していく。いつものことだが、強引な人だ。

「ハルナさん、あの…いいんでしょうか？」

「ええ、まあ。構いませんよ。」

考え事ばかりしては、やがて煮詰まることも多い。頭だけじゃなく…体も動かしてやらないとね。

<第48話> 【練成】

警備所内にある練成場。

建物の内部にあるものの、天井は無く吹き抜けの構造となっており…一見したところ、中庭といった感じもする。

目を引くのが、幾つも設置されているカカシのような人形。

恐らくは、アレを相手にビシバシやる…っていうのが基本的な訓練風景なのだろう。

「まずは、ボクとミューレが対戦するからさ。

ま、ボクの手並みを見ててよ。」

「…わかりました。」

適当な場所に円柱状の座席があったため、僕はそこに腰を下ろす。直射日光を浴びていたためか、石の座席は結構な熱さがあったが…まあ、このぐらいは我慢しよう。

ジウさんとミューレさんが、それぞれ武器を構えて向き合う。

ジウさんは木刀。

ミューレさんは、2 m程の長さがある…単なる木の棒のような物。いわゆる、棒術というヤツだろうか？

「そんじゃ、いくよー!」

威勢の良い声と共に、ジウさんが動き出す。
一歩、二歩、三歩、前に足を踏み出し――

カアアン

横に薙ぎ払った攻撃は、しっかりと棒でガードされてしまう。
ジウさんは横に小さくステップし、体勢を立て直す。

ガシッ

今度は、斜めに振り下ろすような斬撃。
しかしそれもまた、ミューレさんはしっかりとガードする。

「……。」

繰り返しられる攻防。

ジウさんが攻撃を打ち込み…ミューレさんがそれを捌く。
ひたすらに、そのパターンの繰り返し。

どちらにも、それなりの余裕が感じられる。

やろうと思えば、ジウさんはずっと強烈な攻撃が出来るだろうし…
ミューレさんだって、防御だけでなく攻撃に転じることも出来るだろう。

「……。」

徐々に、二人の様子が変わってきた。

動きが激しく：よりスピーディになっている。

ジウさんの攻撃を往なしたミューレさんが、ようやく攻撃に転じるような動作を見せる。

ジウさんの側面に回り込むように足を滑らせると、隙だらけの背中に向けて棒を振り下ろす。

ベシィッ

「：あ痛たッ。」

ジウさんはバックステップで距離をとると、攻撃を当てられた背中の真ん中あたりを擦る。

「よーっし。そろそろ本気でいくよ！」

一撃を喰らって火が点いたのか、口元に僅かな笑みを浮かべるとジウさんは勢いよく足を踏み出す。

ガコオンッ

最初に見せたのと同じような、横の薙ぎ払い。

しかし、ぶつかり合った木の音は：明らかに違っている。ミューレさんの体が、一瞬ではあるが硬直した。

ガアンッ　ベシィッ

素早く――流れるような二段斬り。

いつだったか：カエルの怪物を相手に披露していた、あのX字斬りだ。

それをどうにか防ぎきったものの、ミューレさんの顔には明らかな焦りの色が見られた。

「ハッ！」

体勢が崩れたミューレさんへ追い討ちを掛けるように

ジウさんは真上から振り下ろす斬撃を放つ。

ミューレさんが棒を掲げ、その攻撃を防ぐ——かと思われた瞬間。

ジウさんは攻撃の軌道を後ろにずらし、武器同士の衝突を避けると…
振り下ろすのをピタッと止め、そのまま木刀を前に突き出した。
棒のすぐ真下を通り、木刀の剣先がミューレさんの鼻の頭に触れる。

……

「ふう…っ。 参りました。」

「へへっ♪」

ミューレさんが敗北宣言をし、ジウさんは屈託ない笑みを浮かべる。
どうやら、決着が付いたようだ。

「さアさ、次は君の番だよ。」

「…はい。」

ジウさんに促され、僕は木刀を手にとって座席から立ち上がる。

「あの時の戦い見る限り、君ってば相当な腕前だよね。
クウ…ッ、なんだか燃えて来るなあ！」

「あの、ジウさん…そのことについてなんですが。」
やる気満々といった様子のジウさんに、僕は口を挟む。

「あの時のことなんです。実は僕…よくわからないんですよ。」

「ふえっ？」

言葉を紡ぎながら、過去に思いを馳せる。

あの感覚と…高揚感。

「なんと言いますか、勝手に体が動いていたというか…。

僕が剣術について全くの素人というのは、確かなことなんですよ。」

そう——それは確かなこと。

幼い頃、チャンバラごっこのようなものをやった経験は
無きにしても有らずだが…。

その経験がああ感覚に繋がるとは、どうしても思えない。

「うーん。 そりゃまた、ミステリアスな話だね。」

ジウさんは顎に手をやると、難しそうな表情をする。

しかしそれは、すぐにパツと晴れやかなものに変化する。

「まあいいじゃんか。 とにかく、一戦一戦！」

こういうのは、やってみなきゃわかんないもんだよ。」

「……。」

ジウさんとはかくもう、一戦やりたくてしょうがない様子。

根っからの勝負好き…ってヤツだろうか。

「ハルナさん、駄目なら駄目とはっきり断った方が。

ジウは、手加減という言葉を知らない子ですし…。」

ササツと僕の元へ駆け寄ってきたミューレさんが、囁くように言う。

「大丈夫ですよ。 ミューレさんの敵、討ってみせますから。」

彼女に対し、そんな言葉が自然と口から洩れる。

僕も結構、勝負好き——なのかも。

<第49話> 【思いも寄らぬ】

――Side ジウ・リーベンス――

剣の握り方や構えを見る限り、全然サマになってない。
やっぱり、素人なんだろうか…？

「まずは、君の方から打ち込んできていいよ。
ボクはとりあえず、防御に徹してるからさ。」

「…わかりました。」

ボクが言った提案に、コクリと頷くハルナくん。
ま、何はともあれ――お手並み拝見。

カーン

記念すべき一撃目。

下から掬い上げるように放たれた払い斬りを防いだ。

カーアン

続け様に放たれた薙ぎ払いを防ぐ。

その直後、ハルナくんは体を後方へとずらし、距離をとった。

「……。」

んゝ、なるほど。

太刀筋は決して悪くないんだけど……これは、素人レベル。

あのゴブリンと戦ってた時とは、全然違う。

ゴォオンッ カァン

でも…パワーは凄いや。

それも、力み過ぎてるわけじゃない。

抜く所は適度に力を抜く、絶妙な加減をしている。

「ハルナくん。そろそろ、ボクからも仕掛けるよ。」

「…はい。」

ブンッ

足を踏み込み、手始めに軽い斜め斬りを放つ。

彼は表情一つ変えず、その攻撃をサツとかわした。

いや…表情変わんないのは、いつものことなんだけど。

ブウンッ カァンッ

続けて放った二連撃。

一つはステップでかわし、もう一つを刀身で防ぐ。

「……。」

…う、うゝん。

結構、紙一重で避けたり防いだりしてるようにも見えるんだけど。表情が無いもんだから、焦ってるとかそうじゃないとか…全然わかんない。

「――わッ!？」

気付けば目前まで迫っていた薙ぎ払いを、木刀を盾にして防ぐ。ちょ…ちよつとヤバかった。

「ハッ!」

体勢が直りきってないハルナくん目掛け、武器を突き出す。

突き攻撃。

特に素人じゃ、どう対処していいものかパニックになりがちな攻撃だ。

僅かに体を硬直させた後、ハルナくんは素早く横っ跳びした。

でも、攻撃は完全に避けきれず、腕に軽くヒットしちゃったみたい。

「大丈夫? ハルナくん。」

ボクが問いかけると、ハルナくんはコクリと頷く。

打っては打ち返し…の激しい攻防が続く。

もちろん、主導権は基本ボクが握っているんだけど。

でも――

ハルナくんは時々、思いも寄らない攻撃…動きをしてくる。

素人が行き当たりばったりにするような、変なものじゃない。

『その手があったか!』って、思わず感心しちゃうような動きだ。

……

それに、一つ気付いたことがある。

体もそうなんだけど、彼の目の動き――

ビククリするぐらい……動いていないんだよね。

ほとんど、ボクの顔とか首の周辺しか見ていない。

腕とか足とか――武器とか。

普通の人なら、絶対目が行っちゃうようなトコを見ていないんだ。

……

でも、ボクの動きは……しっかり見切られている。

不思議だ。

まるで、心を読まれちゃってるみたい。

「ハルナくん。」

「はい。」

ある程度お互いの距離が広がった時を見計らい、彼に声をかける。

ボクもハルナくんも、息は上がってるし……汗びっしょりだ。

「ちょっとだけ……本気でやってもいい?」

知らず知らずに口元が緩むのを感じる。

――ワクワクしてるんだ。　なんだか、凄く。

「いいですよ。」

その返事が言い終わるかどうかという瞬間――
ボクはもう、彼に向かって駆け出していた。

ガシイインッ

地面スレスレから振り上げた払い斬りが、彼の木刀に防がれる。
渾身の一撃に、ハルナくんはすぐさま体勢を立て直すことは出来ない。

「ハアアッ！」

雄叫びと共に、真上から真下に振り下ろす斬撃を放つ。
その先には、彼が構えた木刀があったけど――それは承知の上。

バシイイッ

強烈な衝突音がした後。

さっきまで彼が手にしていた木刀が、空中に舞っているのが見えた。

弾き飛ばされた木刀が、地面に落ちる。

それと同時に、ボクはハルナくんの顔へ切っ先を突き付けていた。
「へへっ、ボクの勝

勝利宣言を言いかけたところで、思わぬ衝撃が体を走る。

武器を握っている右手。

ハルナくんが――蹴り上げた？

手から離れ、宙に舞い上がった木刀をポカンと見つめるボク。
そんな僕の目の前に、バツと大きな握り拳が出現した。

「勝負あり……ですかね。」

……

えーっと。

今の状況を簡単に言ってみると。

ボクが勝ったと思った瞬間、ハルナくんがボクの右手を蹴り上げて。そんでもって、寸止めのパンチをしてきて…。

「って——ズルいよ!? ハルナくん!」

やっと状況が理解出来たボクは、彼に向かって叫ぶ。

「こういうのって普通、そんな素手で闘ったりとか…ナシでしょ!」

「でも別に、剣だけで闘うとは聞いてませんよ。」

「いやいや…! でもさあ!」

<第50話> 【Tearful】

——Side 杉山榛名——

「ん…美味しい。」
スプーンを口に運んだ数秒後、呟く。

今日のメニューは、黄色いご飯に色々と海鮮系や野菜類の入った
パエリアっぽい料理。
トマトベースの味付けに、辛味を効かせた感じのスープ。 …など
など。

基本的に、和のテイストが入った料理というのは
あまり出てくる気配が感じられないものの…。
お米が食べられるっていうのが、日本人の僕としては嬉しい限り。

「うん、ウマイ。」

「……。」

隣の席から視線を感じたので、僕は目を向けてみる。

「どうしました？」

「うん。 ハルくんってば、ご飯の時にいつも

美味しいとかウマいとか言ってるなあ……って思ってる。」「ガラナさんは、微笑みを浮かべながら僕を見る。

「僕の場合、どれだけ美味しいもの食べても……美味しいって気持ち、表情には出せないものですから。」

頭の中に自然と、過去の食事風景が思い浮かぶ。

『どう、美味しい？』と問いかけてくる——母さんの懐かしい声。

「だから、こうして言葉にしておかないと。」

「……ふん。 さっすがハルくん♪」

……

「にしても……ジウちゃんと何かあったの？」

お茶を一口飲み終えた後、ガラナさんは再び僕に話しかけてくる。その視線の先には、僕を睨み付けているジウさんの顔があった。

「ちょっと、戦闘の訓練をしただけです。」

僕の視線に気付いたのか、ジウさんはプイッと顔を背けてしまう。

「へえーっ。 で……負けちゃったんだ？ ジウちゃん。」

しかし、ガラナさんのその言葉に反応したように

彼女は再びこちらを振り向いた。

「負けてないよ！ あれは、そう……！ なんていうか……。」

テーブルをバンツと叩き、興奮気味に喋るジウさん。

「と、とにかくハルナくん！ 近い内に再戦だからねっ！」

「……了解です。」

ジウさんの熱い申し出に、僕は了解の意を示す。

特に断る理由もないし——断ったら、どうなるか怖いし。

「みゅふふ。　な〜んか、面白いことになってるね♪」
「……。」

心底楽しそうな笑みをするガラナさんを見つめながら、僕は心の中で一つため息をついた。

ステンドグラスを通して差し込む陽光は、瞼を閉じていても綺麗だと感じれるものだ。

闇の中、何も見えずとも感じとれる光……。希望の光っているのは、こういうものなんだろうか。

「このところ、毎日ですね。」

黙祷を終えて立ち上がった刹那、神父さんから声がかかった。神父さんは、視線をゆつくりと二人の間で彷徨わせる。

「事情は伺いませんが…あなた達の真摯な祈りは、必ずや神の懷にも届いていることでしょう。」

「…はい。」

神の懷——か。

別に、そんなものに届く必要はない。
届いて欲しいのは…

「あの、神父さん。　ちょっと…変なこと聞いてもいいですか？」
「はい。　どうされました？」

僕は神父さんの後ろに見える、淑やかそうな女性の像に目をやる。その像は、ヴェンゼス様の姿を模したものと聞いている。

マナの広場にあったものは、髭の生えた老人であったのだが……尋ねてみたところ、どちらもヴェンゼス様で間違いないらしい。まあ、神様なんてのは……大体そんなものなのかな？

「あの像の顔なんですが——なんだか、その……以前に拝見した時と違っているように見えるんですが。」

その言葉を聞いた神父さんは、驚いたような目で僕を見る。

「わかるのですか？ あなたにも。」

神父さんは、スツ……と静かに後ろを振り向く。

……

「ヴェンゼス様は、泣いておられるようです。」

僕らに背中を向けたまま、神父さんは肅々とした様子で言葉を紡ぐ。

「私は……見ました。神が涙を流しておられる様を。」

……

「何か、悪い事が起こる前兆なのでしょうか……。」

しばしの沈黙を挟んだ後、複雑な表情をした神父さんが僕らの方に向き直った。

「うーん…。　ウチは別に、変わらへんかった気がするけどなあ。」
「そうですか。」

タツツル橋の上で、ヤトフさんとしばしの歓談。
教会を出た後は、いつからか、こうするのがパターン化してしまっている。

「でもま、神父さんが言うとりんや。　無視も出来んわな。」

「……。」

「あつ…ゴメンゴメン！　もちろん、あんたが言うからってのもあるで！」

彼女が焦ったようにフォローを入れる様を観察しつつ、
橋の下に流れる川へと視線を落とす。
透き通るような水の、綺麗な川。

「おっ？　あっちでガキ共が、なんかやとるで。」

ヤトフさんの言葉を受け、彼女の視線を辿る。
その先にあったのは――

「チャンバラごっこかあ。　ウチも昔は、よくやったもんや。」
「……。」

男の子二人が、木の枝で戦闘している風景。
戦闘とはいっても、それほど緊迫したムードはない。

「あんたんトコに、ジウって奴おるやろ？」
「います。」

なぜか唐突に、ジウさんの名前が挙がる。

「あいつは昔から強かったで。　剣の腕前やったら、男連中でも

そうそう齒が立つ奴はおらへんかった。」

「…そうなんですか。」

……

男の子達を相手に、怯まず立ち向かっていくジウさんの姿。
なんていうか、容易に想像出来る。

「普通の劍使わせたら、一流の腕前なんやけどなあ。
あんなぶつとい劍…無理して使うことあらへんのに。」

「……。」

そのぶつとい劍について、持ち主から多少の話は伺っている。
なんでも、ジウさんが尊敬する凄い劍士の方から
譲り受けたものなんだとか。

その方の名前は、シャズナというそうだが…
あまり詳しい事情までは聞かされていない。
ちなみに、劍にも名前があり——古代の伝説に登場する
『ゲイラーダ』という龍と同じ名前だそうだ。

<第51話> 【夜空ノムコウ】

——Side ???——

彼は目を覚ました。

暗闇の中、月明かりだけが照らす部屋の中で。

……

ほんの数秒間。

彼の頭に、目まぐるしい程の葛藤が駆け巡る。

やがて——現実を知る。

「……。」

意識が覚醒してくれば、外から聞こえる虫達の鳴き声に耳を傾ける。
涼しげに鳴り響くメロディ。

彼は体を起こした。

このままの状態で再び眠りに就くことは、
非常に困難であると判断したためだ。

眠れない…。

眠りたくない…？

帰りたい…。
帰りたくない…？

……

暗闇が包む兵舎の中を歩く。
何処へでもなく視線を漂わせながら。
ゆったりとした足どりで。

「……。」

彼は、壁に手の平を付けてみる。
伝わるのは、硬く冷たい石の感触。

（ここに…あるんだよね。 やっぱり。）

辿り着いた場所は、警備所内にあるテラスだった。
ほとんど無意識の中——彼の足が選んだ場所。
彼は自然な動作で、大きな机の四方を囲むベンチの一つに腰掛ける。

「…ふう。」

ため息を一つ。
ついた後、顔を上に向ける。

……

「…夜空。」

少し欠けた月と、黒いパレットに散りばめられた、煌めく星の数々。
花毬町の夜に見られるものとは、違う光景がある。

（そういえば……）

”この星の名は、オルワデイス。”

”夢の中に存在する、無数の星の一つ。”

心の中、記憶から呼び出される言葉。

彼がこの世界に来て、間もなくに植え付けられ声。
思い出している。

……

（あの星のどれかが……地球だったりするのかな？）

少年はふと、そんなことを思った。

答えは出る筈もない。

答える者など、いる筈がない。

何故なら――

「やあ、何してるんだい？」

「……。」

「あの、リゴットさん。」

「何だい？」

「いきなりですけど…御家族の方たちとは、どうしてるんですか？」

黙って僕の向かいのベンチに座ってしまった、リゴットさん。

彼のことを気にしつつも、黙って星を見続けた僕。

微妙な雰囲気だったので、僕から声をかけてみたわけだが。

「息子の二人は…召集令があって、今はフォーマス王都に暮らしている。」

妻には、もう7年前に先立たれてしまったよ。」

「……。」

どうやら、あまり良い質問ではなかったらしい。

あっけらかんと話している様子だが、胸中は複雑なものかと思う。

「次男の方は、元から警備所に勤めてた兵士だったんだが…

長男の方は、単なる服屋の店主だったからね。

兵士としてうまくやっていけるか、心配してるんだよ。」

「……。」

…ふむ。

服屋の店主が、いきなり兵士になりなさい——と。

戦争はやはり、理不尽さを生むものなのか。

「君の方はどうなんだい？」

「…えっ。」

「兄弟とかは、いるのかな？」

今度は逆に、リゴットさんから質問を受ける。

僕の質問にはきちんと答えてもらったので、ここは答えざるを得ない場面。

「妹が一人います。 2歳年下の。」

「へえ…。」

「両親は、ずっと前から行方不明になっているんですよ。」

だから今は…親戚の家に、妹と住まわしてもらっています。」

リゴットさんの顔が、少し強張る。

まあ、こんな話を聞かされたのなら、当然の反応か。

…

少し重たくなった空気を変えるため、僕はベンチから腰を上げる。

そしてリゴットさんに背中を向ける形で、なんととはなしに庭に咲いてるヒマワリへと視線をやった。

「大きいね。 君の背中は。」

背後から、リゴットさんの言葉が聞こえる。

「それはまあ。 体全体が大きいものですから。」

「いや、そういう意味じゃなくてね。」

ヒマワリにやっていた視線を、リゴットさんへと戻す。

「どんなものを背負うことになっても、君は歩いていける。」

なんだか…そんな風に思えるんだよ。 不思議と。」

柔らかな笑みを浮かべながら、彼は言葉を投げかける。

「……。」

——よくわからない。

よくわからないけど、何だか凄く褒められた気分。

「アハハ…ごめんごめん。何言ってるんだろうね、急に。」

「…いえ。ありがとうございます。」

僕はまた、はっきりと感じている。

この世界に来たことが、決して不運ではなかったこと。

「……。」

視線をまた、空に移した。

ジッと見つめれば、意識が星と星の間に吸い込まれていきそうで…。
それが少し怖くて——

<第52話> 【異変】

「おはようございます。」

「おーっ。 おはよう、榛名くん。」

朝のパトロール最中、見知った顔と出くわした。

ゴロー：ではなく、レモンを連れて散歩中という感じのシンゴさん。
そういえば、『シンゴ』ってのはどういう漢字で書くんだろ？

「散歩中ですか。」

「うん。 見ての通り。」

ここは、町の中心部にあるキホロ公園なる場所。

砂場、滑り台、シーソーにブランコ：果ては噴水まであるという、
中々にイカした雰囲気のパークです。

「レモンも、おはよう。」

挨拶しながら、軽く頭を撫でてみる。

するとレモンは、『ワウッ』と挨拶を返してくれた。

「ケヴィンさん？ どうかしました。」

振り返ると、なぜか困ったような顔をして

僕らから後ずさりしているケヴィンさんの姿。

「いや、まあ…ちよつとな。」

その刹那——ケヴィンさんに向かって、レモンが吠える。
「ウッ!？」

……

「もしかして、犬…苦手なんですか？」

「どっちかつつうと、苦手だ。」

クールな装いを見ているも、ケヴィンさんの顔からは
『早くここから離れようぜ』的なオーラをビシビシ感じる。

「バウッ！」

「——ッ!？」

犬の鳴き声がしたと思った瞬間、腕を引っ張られる感覚。
どうやら、ケヴィンさんが咄嗟に掴んできたらしい。

「あり？ 今の…。」

ケヴィンさんが、訝しげにレモンを見る。

なぜ訝しげなのかといえ…さっき鳴き声がしたにも関わらず、
レモンは特に口を動かした様子がなかったからだ。

「すいません。 今のは、僕の声です。」

シンゴさんが、笑いを堪えたような表情で言う。

それを聞いたケヴィンさんは、ポカンとしたような表情。

「……。」

なかなか、お茶目な人だ。

というか…上手いな。 犬の真似。

「……にしても。なんていうか、平和だねえ。」

大きな欠伸を挟みながら、ガラナが呟いた。

そして服のポケットをゴソゴソと漁り、何かを取り出す。

「もうじき魔王の軍勢が、あたしらの世界にやって来る……らしいけど。」

彼女が取り出したのは、三つの丸いお手玉。

赤、青、黄色とそれぞれ違う色をした彼女お手製の物だ。

「なんか、実感湧かないんだよね。正直なところ。」

ガラナは、独り言なのか私に言ってるのか

よくわからない口調で喋りながら、ポンポンとお手玉を始める。

「……。」

私も、正直なところ——そうかもしれない。

妖魔や魔王といった存在がいることは、古くから伝わっていること。

その存在によって滅ぼされた国が、沢山あることも知っている。

でも……うーん。

「ここ五十年近くもの間、妖魔が目立った事件を起こしたこともないし。」

あなたの気持ちもわかるんだけど……。」

お手玉の様子を眺めながら、ガラナに向かって喋る。

「わかってくれるから、ミューちゃん。」

返事はしたが、私には目をやらず、お手玉の方ばかり見ている彼女。ポンポンポン…と。よく見れば、凄い手さばきかも。

「でも文献を見る限り、妖魔が持つ力は、やっぱり相当なものよ。準備を怠れば、大変な被害になると思うわ。」

「んんっ？」

ガラナが突然お手玉を止め、出入り口の方を見つめた。

私も、そちらへ視線をやってみれば…。

三十代か四十代ぐらいかと思われる、簡素な格好をした男性と女性がいた。

「どうされました？」

二人共、見覚えのない顔だった。

それと…どうやら女性の方は、幼い子供を背負っているみたい。

「き、聞いて下さい！　ワ、ワシらの村が、怪物に…怪物にッ！」

「あんた、落ち着きなよ！」

汗びっしりの必死の形相で喋りだした男性を、女性がたしなめる。

「あたしら、レノン村に住んでる者です。　実はあたしらの村に、どえらいことが起こってしまいました…。」

男性をグイッと後ろに退かせると、今度は女性が喋りだした。

女性から聞かされた話をまとめると、こんな感じだ。

レノン村に突如として、巨大なイノシシのような怪物が現れた。その怪物は家屋を破壊し、田畑を荒らし回り：見境なく人を襲った。そして僅か一日足らずで、村は壊滅状態に追い込まれたというのだ。

「イノシシのような怪物……。それって、ドドマのことかな？」

「とんでもない！ 確かに似ている気はしますが、サイズが：体のサイズが、明らかに違い過ぎます！」

独り言とも思えるガラナの呟きに、男性が大きな声で反論した。

「あれはきっと、ドノブイですよ。」

女性が何かを思い出すように俯きながら、ポツリと呟く。

「ドノブイ……。」

ここら一帯では、有名な話。

古くから、テドラ山に住む怪物——ドノブイ。

その怪物が出るというものだから、テドラ山は三十年程前から人が踏み入ることを禁じられていて……。

「ともかく！ 村にはまだ、逃げ遅れた者がいるかもしれません。どうか一刻も早く、その、どうにか……！」

「わ、わかりましたから。奥さんも、落ち着いて下さい。」

……

「隊長を呼んで来ますので……詳しい話は、またそれからお願いします。」

女性の肩に手をやり、なんとか落ち着かせると

私はそう告げて椅子から立ち上がった。

<第53話>

【Visit Again】

——Side 杉山榛名——

その騒ぎが町中に広がるまで、大した時間は掛からなかった。山の向こうから逃げてきたという人達が、次から次へとひっきりなしにこの町にやって来るのだから。

やって来る人達の中には、怪我人も大勢いた。

たちまち、町にある診療所は一杯となり…人手不足。

そんなわけだから、医療の知識が豊富だというガラナさんを始めミューレさん、リゴットさんもお手伝いに借り出されている。

「……。」

馬車の窓から見える空には、灰色の雲がかかってきている。

なんだか、これから先の不安を暗示しているみたいで、嫌な感じ。

「そういえば…どっちの山を越えてくつもんなんっすか？」

「決まっているだろう。テドラ山だ。」

ケヴィンさんの問いかけに、隊長さんがすぐさま答える。

「もしもドノブイの仕業だとすれば、山に何かしらの痕跡が見つけられるかもしれない…。」

続いて口を開いたのは、五十代くらいの淑やかな感じの女性。

「そういうことだ。」

彼女の言葉に頷きつつ、隊長さんは相槌を打った。

女性の名は、ラージン・アンセフ。

何を隠そう…フォーマス軍治安維持部隊、第六警備所の隊長さん。綺麗で、大人な女性って感じの人です。

「でも、ドノブイが山に戻って来てて…バツタリ遭遇してしもたら？」

「そんな時はそんな時だよ。そしたらむしろ、丁度いいじゃん！そこでやつつけちゃえば、万事解決なんだからさ。」

ヤトフさんが心配そうに言った台詞に、ジウさんはあっけらかんとした様子で言葉を返す。
相も変わらず、シンプルな思考をしている人だ。

「ウフフ。勇ましいわねえ、ジウちゃんは。」

「言っとくが、勇気と無謀は違うぞ。」

「あら…似たようなものじゃないかしら？」

隊長さんとラージンさんの、大人なムードの会話。

勇気と無謀の違い——か。

改めて考えてみると、その境目はよくわからないかも。

「無謀を繰り返す内に、勇気を知る…。」

「ふえっ？」

「そんな気もします。」

……

「む……っ。 難しいこと言うね、キミは。」

僕がボソツと呟いた独り言に、ジウさんは手を顎にやって悩ましの表情をしてしまう。

「何はともあれ、命は一つしかないんですから。 とりあえず、命の危険を感じる程の無謀はダメですよ。」

僕は人差し指を立てて、ジウさんにしっかりと言い放った。

「ハ……イ。 ホント、真面目だなあ……ハルナくんは。」

やがて馬車は、テドラ山の麓へと到着。

僕ら第七警備所の面々は、荷物を持って馬車から降り立った。

「ここで一旦、お別れだね。」

「……。」

シンゴさんが穏やかな笑みを向け、僕に声をかけてくれる。

馬車はこれから、ヤトフさんとラージンさんを乗せてフォーマスの王都へと向かう予定だ。

もちろん、運転手であるシンゴさんとも、ここでお別れ。

「……また会いましょうね。」

「うん。 会えるよ、絶対。」

彼の言葉には、力強いものを感じた。

でも、それでも…何か言いようのない不安に駆られる。

僕と彼は、離れ離れになる運命なのだ――と。

心の中の誰かが、そう呟いてるような気がして…

馬車が走り出した。

手綱を握るシンゴさんが、チラッと振り返ってこちらを見る。

彼のその寂しそうな笑顔が、心に深く残った。

「……。」

――胸が痛い。

彼と離れ離れになることは、僕にとって予想以上に辛いことだと気付く。

……

「そんなしんみりした顔しないの！ 別に、今生の別れってわけじゃないんだからさ。」

背中をポンツと叩きつつ、元気な声を投げ掛けてくれるジウさん。

「…僕は元から、こんな顔です。」

今生の別れ。

勿論、そんなわけがない。

僕が…そうさせなければいい。

「出発するぞ。」

隊長さんの静かな号令を受け、僕は歩き出す。

そうだ。今は、立ち止まってる場合じゃない。

眼前にそびえるのは、緑に覆われた山。

僕がこの世界で、初めて目を覚ました場所。

「…何が待ち受けるか。」

呟いた言葉は、ただ風の中に溶け込んでいくだけだった。

僕らは山に登り始めた――が。

やはり、ろくに整備もされていない山道を歩くのはキツイ。

隣のスサンボ山で一度慣らしたものではあるが…それでも、やはり。

「おッ!？」

声がして後ろを振り返れば、ケヴィンさんが驚きの様相を見せている。

すぐに状況を察した僕は、彼に手を差し伸ばした。

「つと…悪いな、スギヤマ。」

「どういたしまして。」

ここら辺りは結構な急勾配のようなので、油断すれば彼のように足を踏み外したりする危険も高い。

僕も気を付けないと。

「い…ッて。」

ケヴィンさんが、しかめっ面で自分の左肩を抑える。
どうやら、さっきの踏み外しで軽く打ちつけてしまったようだ。

「大丈夫ですか？」

「ああ。大したこたねえ。」

他の人間ならともかく、ケヴィンさんには山賊団との戦いで負ってしまった傷跡がある。

痛みがまた、ぶり返したりしなければいいのだが。

山賊団…？

…肩の傷？

「……。」

頭の隅に、違和感が生まれる。

なんだか——何かが引っ掛かる。

しかし今は、ゆっくり考え事に浸る暇はなかった。

<第54話> 【山の住人】

「ね、ね、ハルナくん。確か、この辺じゃなかったっけ？」
「何がですか？」

山の中腹付近を登っていると、前を歩くジウさんがクルッと振り返り、僕に話しかけてきた。

しかし、隊長さんの結構なペースについていくためには腰を据えて話をする暇などなく、ジウさんはすぐに前を向き直す。

「ほら、あのほら…なんとかってゴブリンの小屋だよ。」
「……。」

言われてみれば、そんな気もする。

この世界で目覚めた僕が、初めて出会った人物——ベントさん。いや、初めて出会ったのは…ニャンニャンの方になるのか？

”お主ら、何をしておる？”

「えっ？」

「…ッ!？」

突如として耳に飛び込んできた、聞き慣れぬ声。

僕らは一斉に周囲を見渡し、声の主を探す。

”何処を見ておる。こっちじゃよ。”

そのしゃがれた声がもう一度聞こえ、僕らは同時に側にある一本の木の上へと視線をやった。すると、その木の枝に何か：

”お主ら、何ゆえこんな場所に「ふえっ！　タ：タコが喋ってる！？」

声の主が何かを言いかけたが、ジウさんのリアクションに妨げられる。

そう。ジウさんが言っているように、声の主の正体とは：見たところ、タコとしか思えない生き物だった。

ヌメヌメしてるし。

足が八本あるし。

美味しそうだし。

「見てよハルナくん！　タ、タコが：。」

「タコでも、頑張れば喋れるようになるんだよ。」

「：ふえっ？」

いつだったか聞いた覚えのある、とあるウサギ人間の台詞をアレンジして言ってみた。

もちろん、ウサギ人間の存在を知らないであろうジウさんがそれを聞いてポカンとするのは当然のこと。

”そう驚くではない。　わしは、古くからこの山に住む精霊じゃ。”

”もっとも：人前に姿を現すなど、何十年振りになるやもしれぬが。”

”

「……。」

山に住む精霊……か。

まあ今更、そのぐらいで驚くつもりはないけど。

——しかし、一つ気になる点がある。

「山の精霊なのに、どうしてタコなんですか？」

そこが疑問だった。

山登りをしている途中、タコと遭遇したという話は残念ながら、僕はまだ耳にしたことがない。

” わしは元々、海の神に仕えていた精霊じゃからな。その話をすると

三日三晩はかかるかもしれぬが……聞きたいか？”

「結構だ。俺達は、急いでるものでな。」

僕ではなく隊長さんが返事をし、その言葉を言い終えるまでもなく止めていた足を動かし始める。

「行くぞ、お前ら。」

「……。」

ちよっぴり気になる話ではあったが、さすがに今の状況で

三日三晩を無駄に過ごすわけにはいかない。

隊長さんを先頭に、第七警備所の面々は再び歩みを始めるのだった。

峠も越え、更に歩み続けること……しばらく。

あのタコをはじめ、山中で見かける様々な光景——そのどれにも興味を示す様子がなかった隊長さん。

しかし今、眼前に広がる光景を見て、彼はピタリと足を止めている。

「なんだよ、これ……」

ケヴィンさんの、喉の奥から絞り出すような声。

……

まるで、巨大な嵐でも通り過ぎたかのように——
木々という木々がなぎ倒されている。

その範囲はパツと見ただけでも、山の十分の一ぐらいはあるだろうか。

「……。」

熊ですらそう簡単に倒せそうもない大木でさえ、
ポッキリと完全にへし折られている。

一体彼らは、何に襲われたというのだろうか？

「ボヤツとしてる暇はない。 さっさと山を下りるぞ。」

凜とした隊長さんの声が聞こえ、その顔を見る。

彼は既に、いつもの落ち着いた……そしていかつい表情に戻っていた。

「きゃあぁッ！」

突然、ジウさんの甲高い悲鳴が響き渡った。

すぐさま僕は、彼女の視線の先を辿ってみる。

「あれは…。」

大きな岩の陰から、ノソリと姿を見せる何者かがいた。赤みを帯びた黒っぽい体をしている…どこかで見たような生物。目に付く特徴は――二つのハサミと、長い尻尾。

「なんだあ…！？ でっけえサソリか？」

「……。」

ケヴィンさんの言う通り。

奴を現わす言葉は、『でっけえサソリ』をおいて他に無いだろう。

……

「わ…わわっ！ 来たよ、こっち！」

その巨体に似合わない俊敏な動きで、あっという間に僕らとの距離を詰めてきた巨大サソリ。

ジウさんとケヴィンさんが、多少慌てた様子ながらも剣を抜いて構えをとった。

僕も動きやすい姿勢をとり、奴の動向を注意深く観察する。

「……。」

光を反射して、奴の尾の先がガラリと光る。

サソリの尻尾といえば、毒針が付いてるというイメージだが…よくよく見ると、なんだか針というより刃という感じがする。

ブンッ

風切り音と共に、僕の足首の辺りを何かが通り過ぎる。

それがサソリの尻尾だと気付いたのは、鋭い痛みを感じた後だった。

「スギヤマッ！」

どうやら奴は体を一回転させ、その尻尾を振り回してきたらしい。

「…大したことはありません。」

下手にその場を動かず、僕はケヴィンさんに返事をした。

咄嗟に身をかわしていたため、直撃は避けられた。

だがそれでも、服から血が滲む程度の出血…。

切れ味は、なかなかのものだ。

「たあっ！」

ジウさんの掛け声が聞こえた刹那——サソリは一瞬ビクリと体を震わせ、

サササツと僕らから距離をとる。

「大丈夫！？ ハルナくん。」

「ええ…ちよつと血が出てるぐらいの傷です。」

ジウさんが浴びせた一太刀に、奴は明らかにダメージを受けている様子。

とはいえ、まだ致命傷という程ではない。

「でも、でもさあ！ サソリって、毒とかあるんじゃない？」

「……。」

<第55話> 【惨状】

次の瞬間だった。

巨大なサソリは体をしならせると、僕ら3人とは見当違いの方向へとジャンプした。

その先にいたのは――

「隊長ッ！」

ケヴィンさんが叫び、弾かれるように動き出す。

僕とジウさんも、そのすぐ後に続いた。

斜面に体を押し付けられ、サソリの足やハサミでガッチリと体を固定されている隊長さん。

体の下には地面、上にはサソリ……と逃げ場がない状態。

「……。」

――と思ったのも束の間。

次の瞬間にはサソリが吹き飛び、その下敷きになっていた隊長さんが至って冷静そうな顔を見せる。

ブンッ

サソリが体を回転させ、尻尾を振り回す。

明らかに攻撃の射程範囲に入っていた隊長さんが、素早く鞘から剣を引き抜く姿が見えた。

……

宙を舞うのは、サソリの巨大な尻尾。

言わずもがな：隊長さんの斬撃により、体から切り離されたものだ。

ザンッ

隊長さんの剣が、サソリの胴体に深々と突き刺さる。

巨大なサソリの全身が、感電したかのようにビクビクと震えた。

「すまんな……。虫ケラと遊んでる暇はねえんだ。」

刺さった剣を引き抜きながら、隊長さんがポツリと言う。

サソリは傷口からドクドクと血を流し：正に虫の息といったところだ。

「心配はいらん。ありゃ、毒の無いヤツだからな。」

「ふえっ？ そ…：そうなんですか？」

慌てふためくジウさんだったが、隊長さんの一言を聞いてピタッと動きを止めてしまう。

そんなジウさんの様子など興味なし——といった感じに隊長さんは正面へと向き直り、再び歩みを始める。

「ほ…：本当なんですかあ！？」

ジウさんがまたも慌てふためいた様子を見せながら、

ズンズンと先に進む隊長さんの背中を追いかける。

……

「ま、とりあえずは安心みたいだな。」

「…はい。」

ケヴィンさんと言葉を交わしつつ、僕も歩みを進める。

毒…本当に無いのだろうか？

あの隊長さんが、冗談を言う場面とも思えない。

しかしサソリっていうのは、種類に関わらず毒を持っているという話を

どこかで聞いた憶えがあるのだが…。

「……。」

まあ…あんな種類のサソリは、地球上にはいなさそうだし。

となれば、その辺りの常識も当てはまらないのか。

程無くして、山越えは終わった。

結局、あの場所から山を下り終えるまで…山中の木々がなぎ倒されている光景は、ずっと続いていた。

お陰で、見通しがよかったのも事実なんだけど――

「わあ…とうとう降り出してきちゃった。」

天を見上げ、そこから落ちてくる水滴を手の平に受けながらジウさんがやや憂鬱そうに呟いた。

それに触発されたかのように、他のメンバーも揃って天を見上げる。

……

「レノン村は、すぐそこだ。行くぞ。」

「…はい。」

ポツポツと水滴が降りかかってくる程度で、

どしゃ降りというレベルには程遠い。

しかしまあ…夏場の天気は、とにかく変わりやすいもの。

それなりの覚悟はしておかないと。

雨がやや激しくなったのを感じてきた頃。

僕らは目的地——レノン村へと到着した。

話によれば、例の怪物によって壊滅的な被害を受けたらしいが…。

「酷いもんだな…こりゃ。」

目の前に広がる現状を見て、隊長さんが静かに呟く。

……

聞いていた話と寸分たがわぬ、確かな惨状がそこにあった。

家屋のほとんどは、原形がどんなものだったか分からない程

バラバラに壊されており…もはや人が住む場所ではなくなっている。

「ボンヤリしてる暇はない。すぐに調査を行うぞ。」

隊長さんの号令がかかり、ボンヤリしていた様子のジウさんと

ケヴィンさんは、ハツとしたように引き締まった顔をする。

「まずは、生存者の搜索だ。手分けしてやるぞ。」

そう言い終えると、隊長さんは村の中へと足を踏み入れた。

「……。」

『LENONE』と恐らくは村の名が書いてある看板が、地面に落ちている。

それを見ると、なんだか僕はとても悲しい気持ちになった。

手分けして、それぞれが村の中の生存者を探す。

目を凝らしながら…雨の音に負けぬよう大声で呼びかけながら、僕はひたすらに村の中を駆け回った。

やがて、指定されていた場所で他のメンバーと合流し——それぞれが自分の成果を発表する。

僕は結局、全く成果なしという結果に終わったわけだが…。

「ん…っと。みんな、逃げ出しちゃったのかな？」

ジウさんが濡れた髪に手をやりながら、小さく呟く。

「もしくは、瓦礫の下で息絶えちゃったか——どちらかだろうな。」
続いて発された隊長さんの言葉に、ジウさんとケヴィンさんは
決まりの悪そうな表情を見せる。

「さて…この調査は終わった。次は、ウエルホの村に向かう。」
一つのため息を挟んだ後、隊長さんが次の指示を出す。

ウエルホの村とは、このレノン村のすぐ側にある村落のことらしい。
レノン村のこの有様を見た以上…当然ながら、そっちの村の様子も
探ってみる必要があるということだ。

「お…おい！」

考えを巡らしている中、ケヴィンさんの声が耳に響く。

「どうされました？」

「ほら、あそこ…誰かいるぞ！」

ケヴィンさんが指差した先に、僕らの視線が一斉に集まる。
そこには確かに…瓦礫の上に立つ、一つの人影らしきものがあつた。

＜第56話＞ 【Monster】

「あ…あなた達は？」

僕らの姿を確認した彼は、恐る恐るといった様子で第一声を発する。

「ボクらは、リシャーナの町の警備員。キミは…この村の人？」

ジウさんがそう言葉を返すと、彼は安心したように表情を緩めた。

スラッとした体型の、細身の少年。

年齢は多分、僕と同じくらい…だろうか？

中性的な顔立ちをしているが、体格や雰囲気から男性だと判断出来る。

「いえ、僕は…ウエルホの村から来ました。」

か細い少年の声は、しっかり耳を傾けて聞かないと

雨音に掻き消されそうだ。

「凄い怪物が、この村を襲つてると聞いたものですから。

この村には、僕の兄とお父さんが住んでますし…。」

…

どこへともなく視線をやる、少年の悲観な表情から予想出来る。
きつとまだ、その二人の行方はわかっていないのだろう。

「でも、この有様だと…。」

「悪いが：俺たちが見た限り、村にそれらしい人間は見当たらなかった。」

少年の言葉を遮るように、隊長さんは静かに言い放つ。

……

「ウエルホの村の方は、まだ無事なんだな？」

重たい沈黙を挟んだのち、隊長さんが彼に向かって尋ねる。

その質問に、少年はコクリと頷いた。

「：案内してくれんか。一度も行ったことがないんで、

ウエルホは大体の位置しかわからねえんだ。」

隊長さんは少年の肩にポンツと手をやり、目線を合わせて言う。

ブオオオオッ

——その刹那だった。

凄まじい重低音が、雨音を蹴散らすかのように空気を震わす。

みんなが一斉に振り返った、音の先。

そこには、巨大な黒い影があった。

「：現れたようだな。怪物が。」

「……。」

怪物。

その単語が、これ程までにすんなり心に浮かんだことは
僕の過去に例がない。

そこにいるのは、濃い緑色の毛に覆われた、巨大なイノシシ。色合いはかなり違ってはいるが、全体的な雰囲気はあの『ドドマ』と非常に似通っている。

額部分から、一本の角が突き出ている特徴も一緒だ。

ただ、問題は――その大きさ。

大型トラック…？ ダンプカー…？

何か見覚えのあるものと照らし合わせようと、僕の脳内がせわしなく動いている。

「来るぞ。」

隊長さんは静かに告げると、少年を抱きかかえるようにして弾かれたように走り出す。

その光景を見た僕の体は、自然に次の行動に移った。

――Side ジウ・リーベンス――

次の瞬間――ヤツの巨体がすぐ傍を通り過ぎ、一陣の風を感じた。背筋を冷たいものが走り、体が思うように動かない。

「大丈夫ですか？」

「う…うん。 まあ。」

危なかった。

ハルナくんに助けてもらわなかったら、ボクは間違いなくあいつの突進をモロに喰らっていたところだ。

……

ハルナくんが起き上がり、向こうに見える怪物を見据える。ボクもなんとか、震える体を自力で立ち上がらせた。

「あの、ハルナくん…ありがとう。」

「どういたしまして。」

少し離れた場所で、隊長やケヴィンが体を起こす姿があった。隊長の傍らには、あの男の子もいるみたいだ。

ブオオオオッ

「ッ…！」

ビリビリと、お腹の奥にまで響き渡るような轟音。こんなに大きくて、迫力のある動物の鳴き声なんて…初めて。

ザッザッ——と。

ごく自然な動作で、隊長がドノブイの真正面へと歩み出た。そして、紫がかった瞳から放たれる眼光を受け止め、睨みを返している。

「……。」

ボ、ボクは…どうしよう？

あんな怪物が相手じゃ、下手に攻撃仕掛けるわけにも——

怪物が動き出す。

その巨体が、見る見る内にこちらへ接近してくる。

あまりの迫力に、ボクはただ息を呑むことしか出来ない。

……

隊長とドノブイが交錯した。

二人の間から、僅かに鮮血が飛び散ったのが見える。

「くっ……」

ドノブイの突進を避けつつ、剣撃を加えた隊長。

でも完全には避けきれなかったのか……吹き飛ばされ、体を壁に打ち付けられたようだった。

ドノブイの方を見れば、片方の目の上辺りから

赤い血が流れているのが見てとれる。

勿論、隊長にやられた傷だろう。

「隊長！ 大丈夫ですか！？」

叫びながら、ボクは隊長の元に駆け寄る。

「ああ……。それより、ボケツとすんじゃないねえ。」

少しフラツとしながらも、隊長は自分の体を起こす。

あれっ……？ そういえば、ハルナくんは――

ブルルルルル

ヤツの鳴き声がして、慌てて後ろを振り返る。

そこには、ドノブイと至近距離で向かい合っている
ハルナくんの姿があった。

「…ッ！」

ボクは反射的に鞘から剣を抜き、彼の元へと駆け出す。
見れば、ドノブイの後方からは
ケヴィンも駆け付けようとしている様子が窺える。

ダァンッ

手頃な瓦礫を踏み台にし、ボクは大きくジャンプした。
剣を振りかぶり、ドノブイの体へと照準を定める。
ハルナくんに気をとられているためか、ヤツがこっちに気付く気配
は無い。

「この——怪物めッ！」

振り下ろした刃が、ドノブイの体を切り裂く。
すぐに、その傷口からジワリと血が滲み始めた…が。

地面へ着地したボクに対して、そして——ボクが放った攻撃に対し
て。

どちらにも、ドノブイはまるで反応を示していない。

「……。」

まあこれだけ体が大きければ、タフネスだって相当なもんだろうし…
このぐらいいは、掠り傷なんだろうか？
そんなことを考えながら、ボクは次なる攻撃の姿勢に移る。

「闇雲に攻撃するな。半端な行動は、体力の無駄だ。」

「えっ…?」

いつの間にか背後にいた、隊長の言葉。

それを聞いたボクは、少し考えた後、剣を握る手の力を緩めた。

<第57話> 【巨獣、怒れる時】

――Side 杉山榛名――

ガギヤアッ

半壊していた一軒の家屋に、ドノブイの頭が勢いよく突っ込んだ。
そこからヤツが頭を引き抜くと…ガラガラと音を立て、
家屋は完全に崩れてしまう。

「……。」

不気味な紫色の瞳が、僕を睨む。

――この殺気。

今まで生きてきた中でも、最高峰のものかもしれない。

ブオオオオオッ

大きな唸り声を上げ、再びヤツは突進してくる。

僕は進行方向をしっかりと見定め、サイドステップをして
その軌道から体をずらした。

……

踏み入れた足の先にある、恐らくは家の壁の一部と思われる瓦礫が轟音と共に粉々に砕け散った。

その踏み付けの威力に一瞬ゾクツとながら、僕は体勢を整える。

「……。」

ほんの僅か、進行方向を見誤れば…。

ほんの僅か、回避のタイミングを間違えれば…
致命的なダメージを受ける可能性もある。

集中力を切らすわけにはいかない。

しかし、逃げ回っているばかりでは…——あつ

ヤツの傍らから飛び出したジウさんが、僕とドノブイの間に現れる。
ドノブイは彼女に気付いた様子を見せると、勢いよく首を振った。

「わあッ！」

巨大な牙の側面に当たり、ジウさんの体が吹き飛ぶ。

宙に浮かび、大きな水溜まりへと落っこちた彼女に対して

ヤツは追い討ちをかけようとばかりに動き出す。

……

疾走するヤツの元へ追いつき、僕は即座にその正面へと回り込む。

しかし…僕が視界に飛び込んできたことなど、まるで眼中に無いように

ヤツはその速度を緩めてはくれない。

「……。」

僕のすぐ後ろには、ジウさんがいる。
しりぞ 退くわけにはいかない。

——Side ジウ・リーベンス——

バアンツ

大きなハルナくんの体が、まるでボールのように
物凄い勢いで吹っ飛んでいった。

彼の姿を追うべく、ボクはすぐに後ろを振り向こうとする。
けど——その気持ちは、グツと堪えた。

「今だッ！」

勢いをなくしたヤツに向かい、ボクは剣を振った。
その刹那、ヤツの目は驚いたように、カッと見開く。

ブオオウウツ

狙いは、その目だった。

ボクの斬撃をその目に受けたドノブイは、甲高い唸り声を上げて
ズシヤリとその場に倒れ込む。

「あっ……!?!」

すぐに起き上がろうするドノブイに対し、いつ現れたのか
隊長が剣を振り上げる姿があった。

ブオオウアアッ

残されたもう片方の目に、隊長が剣を突き立てる。

ヤツは一層甲高い唸り声を上げ、体をビクリと震わせた。

「ぐうッ！」

「…隊長ッ！」

倒れたまま暴れ始めた、ドノブイの太い脚に当たり

隊長の体は吹き飛ばされてしまう。

慌てて駆け付けようとしたボクの頭に、チラリと彼のことが浮かんだ。

「そうだ！ ハルナくん…！？」

バツと後ろを振り返り、彼の姿を探す。

飛ばされた方向を考えると――あの辺り？

ブルルルルル

「なっ…！？」

鳴き声がして、再度ドノブイの方を振り向く。

その瞬間にはもう、ヤツはボクの目前にまで迫ってきていた。

ドンッ

咄嗟に体を丸め、地面にうずくまるようにしたボクの体に鈍い衝撃が駆け抜ける。

骨がギシギシと悲鳴を上げたかのような、凄まじい衝撃。

「ッ…うッ。」

少しの間、意識を失っていただろうか…？

ボクは両手を地面に付き、どうにか顔を上げた。

その直後、目にしたのは——ドノブイの牙に突き上げられ、遥か上空へと舞い上がるケヴィンの姿だった。

ドシヤアッ

「…ケヴィンッ！」

叫びながら、ボクは立ち上がる。

その声に反応したのか、ドノブイがこちらの方を向いた。

…

ドクドクと血を流す両目に睨まれ、背筋に寒いものが走る。

足が笑っちゃうぐらいブルブル震え出し、全然言うことを聞いてくれない。

そんなボクに向かい、ヤツは遠慮なしに突進して——

ブガアウウッ

——くるかと思った瞬間。

ヤツの体が、不意にグラリと揺れた。

「あっ…。」

ボクとドノブイが、彼の存在に同時に気付く。

ドノブイが首を向けた刹那——彼はその長い腕を振り抜いた。

ゴオウウツ

見るからに強烈そうな物凄いパンチが、ヤツの胴体を直撃した。
低い唸り声を発して、ドノブイの体がグラリと傾く。

ブオオウウツ

続けざまに、彼の回し蹴りがドノブイの後ろ脚を襲う。
ボクらの何十倍あるかわからない太さをしたその脚に…
たった一発の蹴りで、生々しい傷が浮かび上がった。

「……。」

ゴクリと、唾を呑み込む。

ボクが今言えることは…彼が普通じゃないってことぐらい。

尚も続く彼の猛攻に、ドノブイは苦しそうな鳴き声を出しながら…
それでも逃げ出す気配は無く、暴れ回る。

ヤツのがむしゃらな動きにも全く戸惑う様子はなく、彼—
ハルナくんの動きは至って自然で、淀みが全く感じられない。

「…えッ？」

暴れ回っていたドノブイの体が、突然ピタリと止まる。

糸が切れたかのようなその不自然な変化に、ボクはもちろん
ハルナくんもなんだか戸惑っているみたいだ。

…

張り詰めた空気がしばらく続いた後。

ハルナくんが弾かれたように動き出し、ドノブイに向かう。

また、あの物凄いパンチがドノブイに当たる——かと思った瞬間。

「——ッ!？」

見えない何かの力を受けたかのように、ボクの体が宙に浮かぶ。

凄まじいスピードで、吹き飛んでゆく。

：衝撃波。

視界が霞んでゆく中、その単語が頭に浮かんだ。

《Episode》 【覇者の集い】

” 伝承の儀式が行われてから、百と余年…か。”

紫色の光点が、空間に意思を刻む。

” 歴代の魔王達と比べれば、随分とのんびりしたものだ。”

赤い光点が、空間に意思を刻む。

” …慎重派なのですよ。彼は。”

青い光点が、空間に意思を刻む。

” それだけ、用意周到ということでしょう。”

ピンクの光点が、空間に意思を刻む。

” 本拠には、現時点で征服者^{サロミア}クラスが4体…。
それも、あくまで表層から感知出来る範囲の数…。
”

影の一部が、空間に意思を刻む。

”来るか？ 魔の時代、再び…。”

緑の光点が、空間に意思を刻む。

此処は、星の意思が集う場所。

この星の分身と呼ばれる者達が、互いに顔を合わせる場所。

”そうならば、破滅の時も——”

”遠くない未来のことかもしれぬ。”

ピンクの光点の意思に、緑の光点が意思を繋ぐ。

”憂う必要はありませんよ。”

”そう。それを妨げるため、我らが存在する。”

青い光点の意思に、影の一部が意思を繋ぐ。

”どう思う…？ 賢王様は。”

”……。”

赤い光点の意思に、紫色の光点は沈黙する。

十の席の内、空席は四つ。

しかしそれらの席にも、それぞれ異なる色を持った淡い光が主人の存在を示すように瞬いている。

” 全ては、命が赴くまま……。 流れるまま……。”

長い沈黙の後、紫色の光点は意思を刻み始める。

” 我らは逆らわず、従わず……。”

紫色の光点が、フツと消え失せる。

その場所に、残り香のように紫の波紋が広がった。

” 今はまだ、静観の時……。”

” 共に見守りましょう。 この星の行方を。”

緑の光点とピンクの光点が、同時に離脱した。
二色の波紋が、ゆっくりと空間に広がる。

” どう導こうってのかねえ…賢王様は。”

赤い光点が、紫の波紋の中心を見て、意思を刻む。

” 賢者は、人を導くものではありません。 試すものなんですよ。”

その意思に呼応し、青い光点は意思を刻む。

” フン…。 俺は、俺のやりたいようにやるだけだ。”

その意思を残し、赤い光点が消え失せる。

” もうすぐ、舞台は整うんですね。 …クフフ。”

最後に残った青い光点が離脱し、空間は静かに収束した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2407/>

FILESTARD ～異世界編～

2011年10月9日23時16分発行